

日本ルワンダ学生会議
第 11 回本会議 活動報告書

2014 年 8 月 23 日(土) ~ 9 月 12 日(金)

はじめに

「日本ルワンダ学生会議 第11回本会議報告書」を手にとって頂き、誠にありがとうございます。今回の渡航におきましては準備段階から多くの皆様にご協力頂き、例年以上に実りある本会議になったと実感しております。日頃より私たちの活動をご支援頂いている皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

今回の渡航では現在でも規模を拡大させているエボラ出血熱に伴い、渡航自体の可否を問う声が各方面から挙がりました。渡航メンバーの「ルワンダに行きたい」「ルワンダ人メンバーに会いたい」という熱意のもと、例年以上に情報収集と安全管理に尽力し、無事に終えることができました。

今年2014年はルワンダ・ジェノサイドの終息から20年の節目の年であります。日本では未だにルワンダ＝ジェノサイドのネガティブな印象が強い国ですが、一方アフリカ諸国の中で治安の良い国、ビジネスのしやすい国などポジティブな面での印象も見受けられるようになってきました。

そんなまさに発展の途上にいるルワンダ、そしてその国に生きる学生から私たち日本の学生が感じた事、学んだ事を本書でお伝えできればと思います。

また今回は別冊でマガジン「Rwanda 2.0」も作成致しました。是非お手にとって頂き、私たち学生が五感で感じたルワンダを読者の皆様にもより詳しく、よりリアルに感じて頂ければ幸いです。

日本ルワンダ学生会議は先代の本会議、そして今回の本会議を糧にさらに発展し続けるため精進して参ります。今後とも日本ルワンダ学生会議をどうぞ宜しくお願い申し上げます。それでは最後までお楽しみください。

2014年9月
日本ルワンダ学生会議 メンバー一同

日本ルワンダ学生会議 第 11 回本会議 活動報告書

目次

はじめに.....	3
-----------	---

序章

日本側責任者挨拶.....	7
ルワンダ側責任者挨拶.....	8
関係者挨拶.....	9
日本ルワンダ学生会議団体紹介.....	10
ルワンダ共和国基礎情報.....	14

第一章 第 11 回本会議 事業概要

第 11 回本会議 概要・活動日程.....	18
------------------------	----

第二章 ルワンダ現地活動報告

Organic Solutions Rwanda 訪問.....	21
UMUSEKE.com 訪問.....	26
EPAK DON BOSCCO SCHOOL 訪問.....	30
The New Times 訪問.....	34
Agaseke 訪問.....	37
Umuganda 体験.....	39
在ルワンダ日本国大使館訪問.....	41
ジェノサイドメモリアル訪問.....	47
Inema Arts Center 訪問.....	49

第三章 学生会議活動報告

学生会議 概要.....	53
日本側プレゼンテーション	
ドメスティック・バイオレンス.....	54
貧困問題とマイクロファイブ～誰が貧困者を救うのか?～.....	56
日本の観光.....	58
社会の安定のために、言論の自由を制限することは許されるか.....	60
日本ルワンダ学生会議 日本側の活動.....	62
ルワンダ側プレゼンテーション	
National Dialogue and Imihigo.....	67
Economy of Rwanda.....	69
History of Rwanda.....	71
Biogas Program.....	72

第四章 参加者感想

品川正之介 早稲田大学教育学部5年.....	76
藤内庄司 横浜市立大学国際総合科学部2年.....	85
星野真希 学習院女子大学国際文化交流学部4年.....	88
丸茂思織 日本大学法学部3年.....	91
渡邊伶 早稲田大学教育学部2年.....	94
終わりに.....	99

序章

日本側責任者挨拶.....	7
ルワンダ側責任者挨拶.....	8
関係者挨拶.....	9
日本ルワンダ学生会議団体紹介.....	10
ルワンダ共和国基礎情報.....	14

日本側責任者挨拶

日本ルワンダ学生会議副代表で、第 11 回本会議の日本側責任者を務めさせていただきました横浜市立大学 2 年の藤内庄司と申します。

今回の本会議では、準備の段階からエボラ出血熱の拡大懸念に関しまして例年にも増して多くの方々にご指導、ご協力を賜りましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

1994 年のジェノサイドから今年で 20 周年を迎えました。節目の年ということもあり、今回の渡航は「ジェノサイドから 20 年、ルワンダの今」というテーマを設け、ジェノサイドからビジネスの現場まで多くの土地を訪問致しました。Organic Solutions Rwanda 様や Rwanda Nuts 様にはルワンダでのリアルなビジネスの現場を見せて頂きました。女性の経済的自立を計る RuiseB 様には製造現場を直接ご案内して頂き、インタビューをさせて頂きました。またルワンダ大手メディアの New Times 様、Umuseke 様にも訪問させて頂き、ルワンダのメディアの将来や報道の自由についてなど比較的センシティブな質問にも快く回答して頂きました。その他政府が推進する ICT 教育が実際に取り入れられている小学校や、アートでルワンダを盛り上げようと取り組んでいる Inema Arts Center を訪れることで、多角的にルワンダを見る事ができたと感じております。一方でルワンダは「アフリカの奇跡」「アフリカのシンガポール」として形容される裏で、未だに多くの人々がジェノサイドの傷跡を背負って生きています。多くのジェノサイド記念碑がルワンダの至る所に建立され、それらが現在のルワンダを物語っています。私たちは今回の本会議で一方の印象で語られるルワンダに偏るのではなく、リアルなルワンダを見る事を強く心がけました。今回のテーマ「ジェノサイドから 20 年、ルワンダの今」にはその強い意思が込められています。

また今回の渡航で私たちは相互理解の初歩に立ち返ったような思いがします。「相手を、相手の国を知る」。言葉で語るのは簡単ですが、実体験し身を感じることは想像以上に難しいことです。けれどもこの機会を得た今、日本ルワンダ学生会議として次のステージへとさらなる前進をすべき時だと感じております。メンバー一同これからも精進して参りますので、今後とも日本ルワンダ学生会議をどうぞ宜しくお願い致します。

日本ルワンダ学生会議日本側副代表、第 11 回本会議日本側責任者
藤内庄司

ルワンダ側責任者挨拶

第 11 回本会議ルワンダ側責任者のナディーンと申します。この本会議の責任者として、本事業の素晴らしい経験を皆様と共有できることを大変嬉しく思います。

この第 11 回本会議は、素晴らしい成功に終わりました。参加した日本人メンバーにとって本事業は、ルワンダについての知識を深め、また「ルワンダの本当の姿」を知ることができる貴重な機会になったことと思います。対して私たちルワンダ人メンバーにとっても、日本人のルワンダに対するネガティブなイメージを変える良い機会となりました。また本事業では、ルワンダだけでなく、日本という国に対しての理解を深めることもできました。

今回の本会議中、私たちは様々な場所を訪問し、そこから多くのことを学ぶことができました。私達はルワンダで活躍する日系企業 **Organic Solutions Rwanda** を訪れ、ルワンダはその治安やその他の様々な利点から、ビジネスをするのに良い市場となり得る可能性を持っていると知りました。また「one laptop per child」を導入するドンボスコ小学校においては、ルワンダで ICT 教育がどのように実施されているかを学ぶことができました。くわえて私達は、**Umuseke** や **The New Times** といったメディア関連企業も訪れました。またジェノサイドメモリアルでは、実際過去のルワンダで何が起こったのかを直接視ることが出来ました。これらすべての企画が私達にとって非常に有意義なものとなり、また今後の私達の将来にとっても貴重な経験になったことと思います。

第 10 回本会議(2013 年 12 月 18～2014 年 1 月 5 日に実施したルワンダ人日本招致事業)で日本を訪問した人間の一人として、私の経験を通して話をさせてください。ルワンダと日本、両国にはたくさんの違いがありますが、同時に極めて多くの類似点もあります。私達ルワンダと日本の若者は、これらの相違点・類似点を多く学ぶことで、今後ますます両国の良い関係を築くことができるのではないのでしょうか。私達はまだ若い。しかし若いからこそ、私達は「相互理解」を活動理念に交流し、そこから成し得るものがあると考えます。私たちが共に手を取り合い、さらに精進を重ねることができれば、国を、そして世界をより良いものにすることができるのではないのでしょうか。

第 11 回本会議ルワンダ側責任者
KARINGANIRE Nadine

関係者挨拶

2014年。今年は、ルワンダのジェノサイドから20年の節目の年である。ルワンダで発生したジェノサイドは、国連の安全保障システムの限界、人道支援のあり方、大衆がいかに暴力に動員されうるか、そして人間はどれほど残虐になれるかを世界に問いかけた。同時に、そこからの復興や和解についても様々な事例を提起してきた。今でも私がルワンダに行くというと、多くの人から「危なくないの?」、「戦争している国でしょ?」、「民族対立の国だよな?」などと言われる。今では周辺国よりも治安はいいし、首都キガリでは高層ビルの建設ラッシュだ。20年の間、ジェノサイドに匹敵する紛争の再発がなかったことは評価されうる。ただそれが強権的な政治運営によるものであることも指摘されている。JRYCはこれからもより、多面的にルワンダを見つめ、現地の人々と議論して行ってほしい。もちろんお互いの人や社会に気遣いは必要だが、タブーを越えて議論することができるのが学生の特権なのだから。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター ボランティアコーディネーター
小峯茂嗣

日本ルワンダ学生会議 団体紹介

JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION

日本ルワンダ学生会議とは？

日本ルワンダ学生会議（Japan-Rwanda Youth Cooperation）は、「相互理解」を活動理念にルワンダの大学生と学術・文化交流を行う学生団体です。異なる背景をもつ彼らとどうやって顔の見える関係を築くのか。日本人同士で分かり合うことでさえ決して容易なことではありませんが、日々試行錯誤して活動しています。

主な活動内容

- ・日本人メンバーがルワンダへ渡航
- ・ルワンダ人メンバーを日本へ招致
- ・週1回の定例ミーティングの開催
- ・日本とルワンダに関する勉強会
- ・講演会の開催
- ・報告会の開催
- ・報告書の作成
- ・各種イベントへの参加…等

構成人数

日本側メンバー20名、ルワンダ側メンバー16名（2014年11月現在）

活動理念

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には、次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し

主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの‘Never again’に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまった。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

団体理念の継承

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保する。ユネスコ憲章には以下のような文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまった。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

略歴

2005年 10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) が主催するスタディーツアーのかたちでルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年 9月	ルワンダにて第1回本会議を実施
2009年 3月	団体名を「ルワンダ・プロジェクト」から「日本ルワンダ学生会議」に改称
9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年 1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年 8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
12月	日本にて第7回本会議を開催
2012年 8月	日本にて第8回本会議を開催
2013年 2月	ルワンダにて第9回本会議を開催
12月	日本にて第10回本会議を開催
2014年 8月	ルワンダにて第11回本会議を開催

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員教授の小峯茂嗣氏が設立した「ルワンダ・プロジェクト」が母体となり、2008年から学生が主体の運営を開始しました。以後、日本・ルワンダ間の学生交流を中心に精力的に活動しています。

平成 26 年度の活動実績

2014年 1月	日本にて第10回本会議（招致事業）を開催 (2013年12月18日～2014年1月5日)
4月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター主催「春のボランティアフェア」出展・プレゼンテーションコンテスト出場
5月	NHK 総合「くらし☆解説『活躍する日本の若者たち～アフリカのためにできること～』にて活動を報道して頂く
6月	JASCA コラボイベント「学生団体・NPO200 団体合同新歓」への参加 JICA 様主催「ルワンダ国際協カレポーターの全容」セミナーに登壇
8月	ルワンダにて第11回本会議（渡航事業）を実施
9月	(2014年8月23日～9月12日)
11月	早稲田大学学祭にて飲食店出展 第11回本会議活動報告会を実施

公認

- ・ 駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・ アフリカ平和再建委員会（ARC） 小峯茂嗣氏
- ・ 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

連絡先

メールアドレス：japan.rwanda@gmail.com

ホームページ：<http://jp-rw.jimdo.com/>

ルワンダ共和国情報

ABOUT RWANDA

ルワンダ共和国 基礎情報

ルワンダはアフリカ中東部に位置する小さな内陸国です。「千の丘の国」と称されるほど自然豊かな国であり、現在では治安も良く、ビジネスがしやすい国として知られています。

- 首都：キガリ
- 人口：1130万人(2012年、UNFPA)
- 面積：26,338km²（四国の約1.5倍）
- 言語：キニヤルワンダ語、英語、フランス語
- 宗教：カトリック、プロテスタント、アドヴェンティスト、イスラム教ほか



略史

年月	略史
17世紀	ルワンダ王国建国
1889年	ドイツ保護領 (第一次大戦後はベルギーの信託統治領)
1961年	王制に関する国民投票（共和制樹立を承認） 議会在カイバンダを大統領に選出
1962年	ベルギーより独立
1973年	クーデター（ハビヤリマナ少佐が大統領就任）
1990年10月	ルワンダ愛国戦線(RPF)による北部侵攻
1993年8月	アルーシャ和平合意
1994年4月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに「ルワンダ大虐殺」発生（～1994年6月）
1994年7月	ルワンダ愛国戦線(RPF)が全土を完全制圧、新政権樹立 (ビジムグ大統領、カガメ副大統領就任)

2000年3月	ビジムング大統領辞任
2000年4月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003年8月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003年9-10月	上院・下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2008年9月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2010年8月	カガメ大統領再選

政治体制・内政

(1)元首：ポール・カガメ大統領

(2)議会：上院（26 議席）、下院（80 議席）

(3)内政

1962年の独立以前より、フツ族（全人口の85%）とツチ族（同14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線（RPF）がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993年8月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994年4月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年6月までの3ヶ月間に犠牲者は80～100万人に達した。

1994年7月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999年3月には、1994年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001年3月には市町村レベル選挙を実施、2003年8月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。同年9、10月の上院・下院議員選挙及び2008年9月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領（2010年の大統領選挙で再選）は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。

経済

- (1)主要産業：農業（コーヒー、紅茶ほか）、観光、地下資源
- (2)GDP：71億ドル（2012年）
- (3)GNI：570ドル（2011年）
- (4)経済成長率：8.0%（2012年）
- (5)総貿易額：（2010年）
 - ①輸出 297百万ドル
 - ②輸入 1084百万ドル
- (6)主要貿易品目：（2010年）
 - ①輸出 コーヒー、茶、錫、コルタン
 - ②輸入 消費材、資本財、中間材、エネルギー材
- (7)主要貿易相手国：（2011年）
 - ①輸出 ケニア、中国、コンゴ民主共和国、マレーシア
 - ②輸入 ケニア、ウガンダ、米国、アラブ首長国連邦
- (8)通貨：ルワンダ・フラン

二国間関係

- (1)日本は、ルワンダが独立した1962年7月に国家承認。2009年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010年1月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは1979年5月に在京大使館を開設。2000年9月に閉鎖したが、2005年1月に再開。
- (2)1994年4～6月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年9～12月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国（当時、現コンゴ民主共和国）のゴマ等に約400名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

（上記内容は外務省ホームページより引用、一部変更 2013年11月現在）

第一章

第 11 回本会議 事業概要

第 11 回本会議 概要・活動日程.....	18
------------------------	----

第 11 回本会議 概要・活動日程

ABOUT 11th CONFERENCE

開催日時・場所

場所：ルワンダ共和国（キガリ、ブタレ、ギコンゴロ）

日程：2014 年 8 月 23 日（土）～9 月 12 日（金）

活動内容

「ジェノサイドから 20 年、ルワンダの今」をテーマに、今年でジェノサイドから 20 年を迎えたルワンダを偏向な先入観で見るのではなく、ありのままのルワンダを探求する。

具体的にはビジネスや教育、メディアの現場を訪れ、フィールドワークやインタビューを行う。また 2 つのジェノサイド記念館を訪れ、ルワンダの歴史に触れる。また、ウムガンダと呼ばれる国民全員で行う奉仕活動やカルチャーイベントを開催、そしてホームステイを通しルワンダの風習や文化を身で感じる機会を設けた。

本会議前半（出国から 9 月 1 日まで）は主に企業訪問等のフィールドワークを中心に活動。本会議後半（2014 年 9 月 2 日から帰国まで）は学生会議を中心に活動した。詳しくは以下に記載する活動日程を参照。

事業目的

1. 学生が主体となった、市民レベルでの友好交流により二国間関係を強化する。
2. 日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相を紹介し合う事で、両国の理解を深め合う。また、これは両国学生が自国について再認識し、理解を深める機会でもある。
3. 日本とルワンダの学生が約 3 週間、共に行動することで、友情を育み、信頼・協力関係を構築する。豊かな人間関係を築くことによって、相互理解の第一歩とする。
4. 事業終了後、2 種類の報告書、ドキュメンタリー映像の作成・配信、報告会の開催を通して私たちが得たこと、学んだことを社会に発信する。これは日本における市民レベルでのルワンダへの理解を促す。またルワンダ側メンバーも事後活動を行い、ルワンダにおける日本への理解を促す。

第 11 回本会議 全体スケジュール

実施日	活動内容	実施場所
8月23日(土)	成田空港より日本出発	日本・成田
8月24日(日)	キガリ国際空港到着	キガリ
8月25日(月)	Organic Solutions Rwanda 訪問、Rwanda Nuts 訪問 (ルワンダでのビジネスの現場を視察)、会社職員の方との食事会	キガリ
8月26日(火)	Umuseke 訪問 (インターネットメディアの先駆を訪問し、インタビュー)	キガリ
8月27日(水)	EPAK DON BOSCO Primary School 訪問 (ICT 教育の実践現場を視察)	キガリ
8月28日(木)	学生会議	キガリ
8月29日(金)	Agaseke 訪問 (RuiseB 様の製造現場を視察・インタビュー) 文化交流イベント (日本・ルワンダの両国の伝統的なダンスを披露)	キガリ (ホームステイ)
8月30日(土)	ウムガンダ参加 (毎月最終土曜 8:30~11:00 まで行われるコミュニティワークと地域のミーティングに参加)	キガリ
8月31日(日)	休息日	キガリ
9月1日(月)	日本大使館表敬訪問	キガリ
9月2日(火)	学生会議	キガリ (ホームステイ)
9月3日(水)	学生会議	キガリ
9月4日(木)	ブタレへ移動 ムランビ・ジェノサイド・メモリアル訪問	キガリ⇒ブタレ
9月5日(金)	ルワンダ大学見学 キガリへ移動	ブタレ⇒キガリ
9月6日(土)	キガリ散策	キガリ
9月7日(日)	キガリ散策	キガリ
9月8日(月)	学生会議	キガリ
9月9日(火)	学生会議	キガリ
9月10日(水)	学生会議	キガリ
9月11日(木)	キガリ国際空港よりルワンダ出発	キガリ
9月12日(金)	成田空港到着	日本・成田

第二章

ルワンダ現地活動報告

Organic Solutions Rwanda 訪問	21
UMUSEKE.com 訪問.....	26
EPAK DON BOSCCO SCHOOL 訪問.....	30
The New Times 訪問.....	34
Agaseke 訪問.....	37
Umuganda 体験.....	39
在ルワンダ日本国大使館訪問.....	41
ジェノサイドメモリアル訪問.....	47
Inema Arts Center 訪問.....	49

Organic Solutions Rwanda 訪問

担当者：品川正之介

企画概要

日時：2014年 8月 24日（日）13:00~15:00

場所：Kicukiro, Kigali（市中心部よりバスで30~40分）

協力者：

・原田俊吾氏

（Organic Solutions Rwanda 専務）

・長谷川竜夫氏

（Organic Solutions Japan 営業部長）

・エリック氏

（Organic Solutions Rwanda インターン）

企画目的

近年「ルワンダでのビジネスが熱い」と聞くことが多い。例えば、世界銀行が毎年発表している「Doing Business」というレポートでは、ルワンダでのビジネス環境の評価は毎年向上している。ビジネス環境の良さや治安の良さが評価されてか、日本で開催された、JETRO と大使館主催の「ルワンダビジネス・投資セミナー」では、100人以上の来場者があり、ルワンダビジネスへの関心の高さが伺われた。また最近では、ビジネス関連の話題でルワンダがテレビで取り上げられることも増えてきた。しかし、ルワンダでのビジネスが注目されているといっても、アフリカの小国でしかも内陸国、まだまだ発展途上のルワンダに本当にビジネスの魅力があるのか、自分の中で疑問であった。そこで、実際に自分の目で、ルワ

ンダでのビジネスの現状、特に日系企業のビジネスの現状を見てみたいと考えた。従って、今回の訪問では、以下を目的として設定した。

- ・実際にビジネスを行っている日系企業への訪問・見学を通じて、ルワンダでのビジネスの現状を学ぶ。
- ・現地で働いていらっしゃる日本人の方に、ルワンダビジネスの面白さ／難しさ等お話を伺う。
- ・ルワンダでのビジネスの魅力や可能性を、学生の視点から発見する。

活動報告

1. Organic Solutions Rwanda 概要

Organic Solutions Rwanda は、2008年に設立した、主に微生物を使った消臭剤を貧困層向けに製造・販売している会社である。ルワンダでは、公衆衛生、特にトイレ環境に大きな問題がある。ルワンダに存在するトイレの90%以上は、堅穴式（所謂ぼっとん便所）であり、また堅穴式といっても、地面に穴を掘り便器を乗せただけのトイレで、汲み取り業者の数は少なく、費用も高い。トイレの悪臭やたかるハエなど、悪い衛生環境は深刻な問題である。ルワンダの5歳未満児の死亡原因は1位が肺炎（24%）、2位が下痢（21%）であり、これは、トイレが不衛生であるほか、排水や廃棄物処理の管理が不十分で、また石けんによる手洗いの習慣がないことなどが関係するという。Organic Solutions Rwanda では、この堅穴式トイレの消臭剤として微生物資材を販売し、ルワンダの公衆衛生環境の向上に取り組んでいる。11年には保健

省の環境衛生官やコミュニティーヘルスワーカーを通じて約 300 トンを全国に流通させており、現在は主に学校や病院など公的セクター向けに販売を行っている。

2. 活動報告

訪問当日は、会社内をルワンダ人インターン生のエリックさんに案内していただいた。実際に製品が製造される場所や、オフィス内部を見せていただいた後、原田さんと長谷川さんを変えて質疑応答を行った。
※Rwanda Nut Company 訪問の内容は、諸事情によりここでは割愛する。



施設内の紹介を行うエリック氏



記念撮影を行うメンバー

◆質疑応答 (Q.: 日本人・ルワンダ人学生、
A.: エリックさん)

Q. 「なぜこの会社で働こうと思ったのですか。」

A. 「自分が大学で学んでいた分野がこの会社で生きて、知識や経験を得ることができると考えたからです。また、多くの人と関わって、海外でも働くチャンスがあることも魅力でした。」

Q. 「どうやってこの会社を知りましたか。」

A. 「大学 3 年生の時、大学のアドバイザーがアカデミックインターンシップを勧めてくれたことがきっかけでした。」

Q. 「日本人と仕事をするのはどうですか。」

A. 「良いです。勤勉でスマートで、仕事が早いことが素晴らしいです。」

Q. 「このオフィスでは何人働いていますか。」

A. 「ルワンダ人 6 名、日本人 2 名です。」

Q. 「製品を買いたい場合は、ここに来なければいけないのですか。」

A. 「いえ、配達しています。」

Q. 「夢は何ですか。」

A. 「私の夢はお金を得ることではありません。経験を積み、会社やお客さんの役に立てるようになりたいです。また、可能であれば、将来的に海外で勉強したいです。」

Q. 「お金を得るより、国や社会に貢献したいのですか。」

A. 「そうです。必要最低限のお金と少しの貯金があれば十分だと思います。」

Q. 「社会貢献意識が高いようですが、ソーシャルビジネスをいう言葉を聞いたことがありますか。」

A. 「そうですね、この会社自体ただ多く利益を上げるのではなく、国の発展や従業員や人々の生活向上に貢献することが目的だと思っています。」

Q. 「海外で働きたいとのことでしたが、どこに行きたいですか。」

A. 「自分の知識や経験を深めた後、会社が海外、例えばコンゴやブルンジなどに支社を設立したとしたら、そこで社長を試みたいですね。これも夢のひとつです。」

Q. 「勤務時間は何時から何時ですか。」

A. 「8時から17時です。間に休憩を1時間挟みます。土日は休みです。」

Q. 「会社の福利厚生の制度は整っていますか。」

A. 「保険等、必要なものは全て整っています。パーティの諸経費も出たりします(笑)。この会社は家族みたいなものですね。」

Q. 「どの程度の数の顧客がいますか。」

A. 「たくさん、たくさん、たくさんですね(笑)。」

Q. 「とある資料によると、ルワンダの90%以上のトイレはぼっとんトイレとありますが、本当ですか。」

A. 「本当です。」

◆以下、Q.: 日本人・ルワンダ人学生、A.: 原田さん

Q. 「なぜルワンダでビジネスをすることになったのですか。」

A. 「日本では人材総合サービス事業を行う会社に勤めていて、今の仕事とはかなり分野が違っていました。ただ、途上国で起業したいと考えており、ずっとチャンスを探していました。去年、幸運にもケニア・ナッツ・カンパニー(年商30億円・ケニア最大の食品加工会社の一つ)創業者の佐藤さんにお会いしました。佐藤さんの経歴や話を知った時に感銘を受け、また実際にお会いして話を聞いて、ここでビジネスをすることを決めました。佐藤さんがこの会社(Organic Solutions Rwanda)を私に任せてくださったので、今ここで働いています。ちなみに、(先ほど話したとおり)私は環境や公衆衛生分野のプロフェッショナルではありません。ただ、単なる知識は簡単に得ることができます。しかしビジネスは知識だけではなく、人間関係とチームをオーガナイズする力、市場のチャンスを捉える力が大切だと考えています。ですから、前職と今の仕事の分野は違うものの、特に大きな問題はありません。」

Q. 「ルワンダで働くことはエキサイティングだと思いますが、もし日本で働き続けていたら、生活は安定し、給料も高かったと思います。それらを犠牲にしてまでルワンダで働くモチベーションは何でし

ようか。」

A. 「(途上国で起業するという) 夢を叶えなかったからですね。日本に留まっていたはその夢は達成できないので。また妻がルワンダの他の会社で働いていることも大きいです。だから、皆さんもルワンダでビジネスを始めるなら、結婚してからくるのがいいですよ (一同笑)。また、今の時代、日本で一つの企業にずっと勤めていることこそ、リスクが高いことのようにも思います。」

Q. 「農村の人にとって、製品の価格が高いように感じます。農村等に今後事業を拡大するために、コスト面などでどのような戦略を今後とるのでしょうか。」

A. 「まだ現時点では、製品を政府や公的セクターに売っています。次の段階で、民間の企業に製品を広め、また次の段階で、一般の人に向けて製品を売りたいと考えています。また、現在、製品を作るための原料をケニアから輸入しているためコストがかさんでいますが、今後ルワンダでその原料を製造できるようになれば、コストが下がると思います。」

Q. 「ルワンダに来る前、日本でどのくらいの期間働きましたか。またいつ頃から途上国でビジネスをしようと考え始めましたか。」

A. 「6年間働きました。年は今 30 歳です。ルワンダに来てからは 4 ヶ月になります。23 歳・24 歳の頃には、途上国でビジネスをしたいと考え始めていました。」

Q. 「世界銀行の『Doing Business』という

レポートで、ルワンダのビジネス環境は高く評価されていますが、ルワンダでビジネスをするのは本当に簡単でしょうか。」

A. 「難しい点もあります。一例を挙げると、VISA の取得が難しいことですかね。観光客向けには VISA が出やすいですが、現地で働くための VISA の取得が非常に難しいです。ルワンダ開発局は Welcome、移民局は No と言っているような感じがします (一同笑)。もちろんルワンダだけがこの様な問題を抱えているわけではないと思いますが。」

Q. 「この仕事以外に、ルワンダで他にやってみたいことや、ビジネスのアイデア等ありますか。」

A. 「まず、自分自身でビジネスを始めたいと思っています。実際、ルワンダにはたくさんビジネスチャンスが転がっていると思います。例えばですが、ルワンダの女性は美しいのでモデル事務所を開いてケニアとかタンザニアに向けてビジネスとかできそうですね (一同笑)。また、ルワンダにはいくつか日本食レストランがありますが、日本人経営のものが無いので、それも始めてみるとかも一案かもしれません。ビジネスに関して私からアドバイスをするのであれば、ビジネスを難しく考えないことです。生活の中で、不満や不便な点、不足していることがあるならば、それがビジネスを始めるきっかけになり得ます。ただし、まずどこかの会社で経験をつんでから自分自身のビジネスを始めるのが良いですね。ルワンダと日本は大きく違いますが、ビジネスの根

本的な部分は変わらないと思います。」

Q. 「ルワンダ人は勤勉だと聞きますが、実際のところルワンダ人と働くのはどうですか？」

A. 「そうですね。とても勤勉で驚きました。毎朝時間通りに出勤しますよ。基本的にはいつも一生懸命働いています。たまに、Facebook をいじっていたりするのを見かけますが (笑)、ただ日本でも勤務中にカフェにいったり休憩していたりもするので、同じようなことだと思います。」

Q. 「もっと多くの日本人にビジネスをしに来てほしいですか。」

A. 「そうですね。毎日、いたるところでビジネスチャンスを発見します。しかし私としては、今たくさんのことを一度にやる余裕がないので、多くの人がビジネスをやりきってチームとしてビジネスができれば面白いかもしれません。」

◆以下、Q. : 日本人・ルワンダ人学生、A. : 長谷川さん

Q. 「ルワンダと他の国との違いは何でしょうか。」

A. 「言語ですね (一同笑)。他には、タンザニアやケニアから帰ってくる度に、キガリの綺麗さには驚きます。綺麗好きなのは、ルワンダ人の国民性のひとつかもしれませんね。また、政府が他の国に比べて多くの予算を街の清掃に投じていることも一因でしょう。ビジネスに関して言えば、ルワンダは人口密度が高いので、私たちのビジネスはしやすいですね。タ

ンザニアでビジネスをするとなると、商品を配達するのに 300km、400km と車を走らせなければいけないかもしれませんが、ルワンダは小さい国土に多くの人が住んでいるのでその点でやりやすいですね。また、例えばタンザニアでビジネスをしていたとして、営業担当の人が病院や学校などの公的セクター向けにビジネスをしたいと提案してきた場合、恐らく (私は) NO と言うでしょう。というのも予算が職員・役人の元に消えてしまうなど問題が多いので。学校を訪問してみると、生徒が何もせず遊んでいることなどがあって、どういうことかということ (職務を放棄して) 教師が自身のビジネスをしていたりするんですね。ケニアでも同様のビジネスをしていますが、主なターゲットは民間セクターですね。学校や病院とかではなく。ただルワンダではそういうことは無いですね。」

Q. 「本当にルワンダにビジネスの魅力と可能性はあるのでしょうか。」

A. 「正直、ルワンダの市場は小さいし、港から遠いです。ですから日本の企業が支社を立てるなら、タンザニア・ケニアで事足りるでしょう。ただ、ルワンダ・ナッツ・カンパニーの場合は、マカダミアナッツを現地の農家から買い上げて加工しているので、ルワンダに会社を持つ必要がありますね。ただ、日本製品をルワンダで販売したい場合などは、ルワンダに支社を構える必要は必ずしも無いでしょう。」

感想

これまで、私は「ルワンダでビジネスを立ち上げる＝挑戦・リスクが高い」「日本で働く＝安定・リスク低い」と考えており、また途上国でビジネスをすることに對し、高いハードルの様なものを感じていた。だが、今回の訪問を経て（たしかに途上国でビジネスをすることは大変なことは理解しているが）、そのようなイメージは少し変わっていった。個人的な話だが、日本の様に先進国で、色々とビジネスが飽和状態、しかも高齢化が進んで「元気の無い」様な社会で働くより、若い人が多く、発展途上で勢いのある国で働きたいとの思いが強くなった。発展途上のルワンダには、たくさんのビジネスチャンスが転がっているという。将来のことはまだわからないが、自分も途上国に飛び込んで何かをしてみたい。

訪問を通じて印象的だったのは、現地で働いていたルワンダ人従業員のエリックさんが、収入よりも自身の成長や社会への貢献を重要視していたことだった。これまで、途上国で働く人々は自身の生活向上のためにギラギラと働いているという勝手なイメージを持っていたのだが、エリックさんのような意見が聞けたのは興味深かった。

最後に、一つ考えさせられたことがあった。ルワンダ滞在中、いたるところで小学生・中学生など多くの子供達を見かけていた。彼らはいわばジェノサイド以後の世代であって、「民族」間の憎悪感情や過去の悲惨な記憶を持たないため、今後のルワンダ社会を築いていく希望の様なものだと思いつながら彼らを見ていた。しかし、会社訪問後の夕食会の場で興味深いことを伺った。ルワンダは現在深刻な職不足で、雇用創出

は今後の国家の発展と安定のために重要なのだが、現在そしてこれからも増え続ける若者人口の受け皿となる雇用が足りていないとのことだった。増え続ける若者人口は、見方によっては希望というよりも、むしろ「怖い」存在なのであるという。この様なこともあり、今後ルワンダでは、援助や支援といった活動と同時に（もしくはそれ以上に）、ビジネスによる雇用創出が重要になってくるのだと、改めて考えた。

Umuseke.com 訪問

担当者：丸茂思織

企画概要

日時：8月26日（火）

場所：Umuseke.com

（HP：<http://www.umuseke.rw/>）

協力者：Umuseke.com の皆様、設立者マルセル・ムチンダシュヤカ氏

企画経緯と目的

企画経緯

ルワンダは2014年の今年、1994年に起こったルワンダ大虐殺よりちょうど20年を迎える。ルワンダには大虐殺発生時、当時ルワンダで主なメディアであったラジオが政府によって悪用され、それが虐殺を加速させたという悲劇の歴史がある。大虐殺から20年を経た今、従来悪用されたルワンダのメディアがどのように活用されているのか。インターネット新聞社 Umuseke をひとつの題材として、ルワンダメディアの今・未来の可能性を学びたいと考えたこと

が本企画実施に至った経緯である。

企画目的

- ①ジェノサイド当時悪用され虐殺を助長したとされるメディアが、ジェノサイドから 20 年を迎えた今どのように活用されているのか。インターネット新聞社 **UMUSEKE** の取り組みを一つの例に、ルワンダメディアの現状を学ぶ。
- ②近年ジェノサイドの歴史を理由に、ルワンダ政府によりメディアや言論の自由を規制する法制定が進められている。**Umuseke** の設立者であるマルセル氏にそれらに対する考えを伺い、今後のルワンダメディアの可能性を探る。

活動報告

本企画では **Umuseke** 設立者であるマルセル・ムチンダシュヤカ氏に、会社概要やルワンダメディアの現状、また近年制定されているメディア規制法等についてインタビューさせて頂いた。以下の内容はマルセル氏へのインタビュー内容をまとめたものである。



設立者のマルセル氏

1. **Umuseke** とは

(1) 設立背景

Umuseke (キニヤルワンダ語で「夜明け」の意) とは、インターネット上で情報提供を行うインターネット新聞社であり、キニヤルワンダ語と英語の 2 つのサイトを運営している。設立者であるマルセル氏は 1994 年のジェノサイド時に家族を失った経験から、ジェノサイドサバイバーとして自分ができることは何かと考えた。その結果、当時のルワンダ人にとって唯一のメディアであったラジオがヘイトスピーチを拡散するプロパガンダとして悪用され虐殺が助長されたことから、そのメディアを有効活用して平和構築を行いたいと考え **Umuseke** を設立した。

(2) 会社概要

Umuseke は 2011 年にマルセル氏によって設立された。設立当時社員はわずか 5 名だったが、現在は 28 人の社員を抱えている。またその 25 人のうち 18 名が記者である。記者は世界中に派遣され、現地より **Umuseke** オリジナルのニュース記事を執筆している。またウェブサイトの作成・運営の全過程を **Umuseke** が行っており、記者以外にもリーガルチーム、アカウントチーム、マーケティングチーム等のチームが存在し、それぞれの役割を果たしている。またサイト訪問者数は 1 日でおおよそ 125000 アクセスを誇り、現在ではルワンダを代表するインターネットメディア会社となっている。

(3) 目標

Umuseke の到達目標は「若い人材のキャリア形成」と「メディアによる安定し

た社会の形成」である。また Umuseke と他のウェブメディアとの違いは、運営目的が「平和構築」と「復興」にある点であり、ルワンダの人々を再びひとつに団結させることが Umuseke の役割であるとマルセル氏は述べている。

2. UMUSEKE の取り組みと課題

(1) 取り組み

① 平和構築と復興のための取り組み

ジェノサイドからちょうど 20 年を迎えた今年、ジェノサイドサバイバーから直接当時の証言を聞き、それを特集記事として取り上げるという独自の取り組みを行っている。一般的に犠牲者と言われる「ツチ」のみならず「フツ」に対してもインタビューを行っており、人々に真実を伝える活動に努めている。また Umuseke の中で一番訪問者数の多いコンテンツが「平和構築」であり、そこからルワンダ人の平和に対する意識の高さがうかがえる。

② 炎上対策

ジェノサイド当時のようにメディアが民族分断を助長することがないよう、Umuseke ではコメント欄の炎上対策を徹底的に行っている。ツチやフツ等民族に関連するコメントや他国を批判するようなコメントは、インターネット上に公開する前に担当チームによって削除される。コメントの程度によるが、Umuseke の運営目的である平和構築に反するような内容コメントは基本的に掲載することができない。

(2) 課題

① 利益を挙げることが困難

現在はウェブサイトに掲載している広告によって主な収入を得ているが、購読料を取るようなコンテンツを取り扱っていないため利益を挙げることが難しい。

② インターネット普及率の低さ

現在 Umuseke が抱える課題のひとつとして、インターネットの使用が不可能な環境にいる人々への情報提供がある。インターネット環境の問題にとどまらず、現在のルワンダには金銭的な理由からコンピューターの入手が困難な人や、コンピューターを利用する技術を持たない人が数多くおり、インターネットメディアだけでは彼らのような状況にある人々に情報提供を行うのが難しい。その問題を打開するために、ルワンダで最も普及しているメディアであるラジオによる情報提供を来年 2015 年の 6 月から開始する計画を進めているという。



鮮やかな赤い看板が目を惹く Umuseke

3. ルワンダのメディア規制法と言論の自由

(1) メディア規制法

ルワンダには「RMC (Rwandan Media Commission)」というジャーナリストのための機関がある。また他に政府によつ

て「メディア法」などの法律が整備されている。マルセル氏は「メディア規制法はメディアが人々を分断するのを防ぐためのもので、あくまでメディアを活用して国を発展させることを目的としている。メディア規制法は非常に柔軟性があるもので、Umusekeに悪影響はなく素晴らしいものである。」と述べている。またこれらの法律はジャーナリストの行動に節度を持たせるためのもので、民族分断を予防するにも非常に有効であると言う。

(2) 言論の自由

マルセル氏はルワンダの言論の自由について「他国の人間はルワンダには言論の自由がないと懸念するだろうが、ルワンダ人が自由であるか否かを決めるとするならば自由だ。」と述べている。その理由として、ジェノサイド時にメディアが悪用されたという過去を繰り返さないために、メディアを政府が注意深く監視する必要があるからだそうだ。

感想

Umuseke 訪問では興味深いお話を数多く伺うことができた。

お話を聴いてまず驚いたのは、マルセル氏の「平和構築」への意識が非常に高いという点である。大虐殺の経験から Umuseke 設立に至ったということは以前から知っていたが、メディアの力で「平和構築」をするという彼のこだわりがインタビューの随所に見られ、またそのこだわりが Umuseke のウェブサイトやその運営目的・方法に色濃く反映されていると感じた。「昔悪用されたものを再びこの国のために有効活用したい…」言葉にすると簡単に聞こえてしまう

かもしれないが、従来悪用されたメディアの力を使って社会を良くしたいと決意し、またそれを堂々と言えるようになるまでにどれだけの覚悟が必要だったか、私には計り知れない。

またメディア規制法や言論の自由、ジェノサイド関連事項など、一社長が回答するにはデリケートな質問ではないかと危惧していた質問に対して、快く答えて下さったことが正直驚きだった（政府を批判するようなことを言及していなかったからかもしれないが…）。その中でも、ルワンダの言論の自由についてお伺いした際に「他国の人間はルワンダの自由は制限されていると危惧するだろうが、ルワンダ人が自由か否かを定めるならば自由だ。民族分断を防ぐためにも、むしろ政府がメディアを厳しく監視すべきだ。」という彼の言葉が印象に残っている。それはつまり、メディアの影響力やまたそれが悪用されたという過去をふまえたうえで、政府のメディアへの介入を推奨しているということである。私は「政府のメディア介入によってルワンダの言論の自由は大幅に制限されているのではないか。またその事実自体、ルワンダ人は気付いていないのではないか。」と考えていたので、政府の介入を推奨するという彼の姿勢に驚かされた。しかし冷静に考えてみれば、私の意見は、社会の安定した先進国に住む日本人らしい考え方であると気づいた。「社会の安定」と「言論の自由」を天秤にかけた議論は数多くなされているが、言ってしまうとその国の成熟度によって正解は異なる。マルセル氏の意見には「良い政府」を前提としているという問題点もあるが、ジェノサイドという特殊な歴史を抱える現在のル

ワンダにおいては、「民族分断を防ぐために政府が介入する」というかたちが一番望ましいのかもしれない。こうした「ジェノサイドをふまえたルワンダ独自の自由」ではなく、「世界基準の自由（他国と比較した上での自由）」でルワンダの自由が図れるようになった時こそ、ルワンダが本当に復興した時であると言えるのではないかと思った。

最後に、稚拙かつ無礼な英語で質問攻めにしたにも関わらず1問1問真摯に回答してくださったマルセル氏には勿論のこと、仕事中だったにも関わらず快く受け入れてくださった Umuseke の従業員の方々に心から感謝したい。誠にありがとうございました。マルセル氏と Umuseke の今後に注目し、また活躍に期待したい。

EPAK DON BOSCCO PRIMARY SCHOOL 訪問

担当者：渡邊伶

企画概要

日時：8月27日（水）

場所：EPAK DON BOSCCO PRIMARY SCHOOL

協力者：EPAK DON BOSCCO PRIMARY SCHOOL の皆様、校長トゥアギリマ氏、ルワンダ教育省最高技術責任者キメニ・エリック氏

企画目的と経緯

企画経緯

ルワンダは「VISION2020」で ICT 分野の人材育成を目標にしている。その目標を達成するために、「One Laptop Per Child (OLPC)」を掲げ、小学校から ICT を用いた教育をおこなっている。今回の企画では、まずルワンダの ICT 教育の現状や課題を知り、そして日本の ICT 教育と比較してその相違点を考える。

企画目的

- ・「One Laptop Per Child」を実践している小学校を訪問し、ルワンダにおける ICT 教育の現状や特徴、問題点を知る。
- ・ルワンダの ICT 教育と日本の ICT 教育とを比較して、その相違点を考察する。



PC を真剣に操作する子供達

活動内容

本企画では実際にラップトップを使用している生徒と、担当教員にインタビューさせていただくという形式で行った。

1. ICT 教育とは

ICT とは「information communication technology」のことで、日本語では情報通

信技術と訳される。この ICT を用いた教育を ICT 教育という。ICT を用いて教育をより質のいいものにしようという動きは世界中に広まっている。その代表的なもののが、アメリカの教師アロン・サムズ氏等が発案した「反転授業」というものである。全生徒にタブレットを渡し、事前に家で講義を見てもらう。学校では、家で見えてもらった内容の確認やディスカッション、または応用問題などに取り組む。この反転授業では、一人一人の理解度に合わせた授業を行うことができるほか、ディスカッションも行うことができるため、生徒の自主性や創造性を育てることができるかと期待されている。その一方で、タブレットの値段が高い、先生に指導力とは別の力が求められてしまうなどの課題もある。



子供達が使用する PC

2. ルワンダの ICT 政策

ルワンダ政府は 2020 年までに達成する目標として「VISION2020」を掲げ、その一つを ICT 分野の人材輩出としている。今回視察した DONBOSCO スクールは、「One Laptop Per child」というプログラムを導入している学校である。この小学校にはおよ

そ 300 台もの PC がある。2009 年より日本でいう 4・5・6 年生の生徒がこの PC を用いて、英語・科学・数学・プログラミングの授業を 1 週間に 2 時間行っている。ルワンダには現在 416 のセクター（地方行政区分の一つ。大体人口 2 万 5000 人程度）が存在する。そのうち 409 のセクターでは、各セクターで最低 1 校以上、PC を活用した ICT 教育が導入されているという。PC は、パブリックスクールは無料で子供たちに提供し、プライベートスクールはお金を出して買う。

また、教師にも、どのようにコンテンツを使うか、コンテンツにアクセスするかなどの訓練をしている。

3. 質疑応答

ルワンダ教育省最高技術責任者であるキメニ・エリック氏にインタビューを行った。

Q. 「“One Laptop Per Child” は素晴らしい取り組みだと思う。この取り組みを他の地域にも導入することはできるのか。」

A. 「はい。しかし “One Laptop Per child” 行うためには電気やサーバーが必要である。その設備があれば可能である。」

Q. 「一回 PC をもらったらそれはずっとその生徒のものか。」

A. 「いいえ。基本的には、生徒にあげることはおすすめしていない。しかし田舎では生徒にあげる学校もある。私たちは、ラップトップを生徒の所有物にしないことを推奨しているのだが、その大きな理由は、セキュリティ、安全性の問題だ。」

Q. 「日本でも ICT 教育が行われているが、多くの子供が教師に向かって座り、PC を使う場合がほとんどである。それに対して、今回視察した教室では、生徒が 8 人ぐらいで、グループワークを行うような机の並びだったが、ルワンダでは、日本が導入している反転授業のような ICT 教育は行わないのか。」

A. 「コンビネーションが大事である。教師は多くいる。どの学校にも多くの教師が割り当てられている。生徒が何か意見を発したいと思っていると感じた時は、教室を歩き回り意見を求める。教師が立って授業を行うのとは、提供する情報が異なってくる。」

Q. 「たとえ ICT 教育を進めて、良い人材を育てても、そもそもそのスキルを活かせる仕事が不足しているのではないか」

A. 「確かにこの国には若い人が多い。インターネットも最近整備されたばかりだ。しかしこの国の子どもたちはだんだんと ICT スキルを身に着けることができる。そして仕事で ICT スキルを活用することができる。私はどの仕事に就くにしても ICT スキルは基礎として必要なものであると考える。マイクロソフトやグーグルなどは ICT スキルを要求している。進級していくにつれて ICT スキルを高めていくことが大事であるのは間違いない。これからも ICT 教育を続けていく。」

Q. 「このプログラムのどのような点が重要と考えているか。」

A. 「ただタブレットを与えるだけでなく、使い方の指導もしている。タブレットを

使用することで、ICT スキルを高めると同時に、クリティカルシンキングを鍛えることもできる。ルワンダにおいて、例えば先生や医師、法律家など将来の希望の職に就こうとするためには、大きな制約がある。しかし ICT を用いて、調べることができるので、可能性が広がる。」

Q. 「このプログラムの課題は何か。」

A. 「3 点ある。1 点目は、電気が国中どの場所でも使用することができるわけではない点。電気が使用できるのは、キガリなどの都市部のエリアがほとんどである。2 点目は、先生の質についてである。キガリにおいては、教師は比較的短時間で見つけることができる。しかし、ローカルエリアにおいては、見つけるのにも時間がかかるし、訓練するのにも時間がかかる。3 点目は、使い方である。たとえカリキュラムが変わっても、同じサーバーを使い続けてもらうように指導しなければならない。」



校内で記念撮影

4. インタビュー

(1) 校長トゥアギリマ氏へのインタビュー

Q. 「この学校で行っている ICT 教育の概要や効果は何か。」

A. 「“One Laptop Per child” はルワンダ人の ICT 技術を改良していくとともに、ICT に触れる機会を提供している。ICT は病院や教育や産業など様々な分野で重要なものとなっている。政府は生徒たちが自分の頭で考えるように ICT を授業に導入した。全ての生徒がラップトップを使用するわけではなく、ルワンダの ICT 政策にはプロセスがあり、4 年生から 6 年生が PC を使用する。ルワンダ政府は全ての人が ICT にアクセスすることを理想としているが、同時にプロセスを大事にする。また、PC を用いることは発展のために有効である。」

Q. 「ルワンダの子供たちに、どのようにルワンダの社会に貢献していくことを期待するか。」

A. 「私は、高い技術力を持った人々が様々な分野で活躍してくれることを期待している。高い技術は農業、産業、医療などの様々な分野で私たちの生活を助けてくれる。ICT を学ぶことは、国をより発展させるために重要なことである。」

Q. 「ICT スキルはジェノサイドからの復興、発展のためにポジティブなパワーになると思うか。」

A. 「はい。ICT は国を発展させるためにとっても重要である。ルワンダ政府はこの小さい PC を用いる教育プログラムを実行している。政府からサーバーが与えられ

たことで、子どもたちは、様々な知識を得るためにサーバーにアクセスすることができる。私は将来ルワンダの子どもたちが良い人材になることを願っている。」

(2) 生徒へのインタビュー

Q. 「PC の使いやすさはどうか。」

A. 「とても使いやすい。調べ物をする際などに活用できるうえに、知りたいことなどを調べて学ぶことができる。」

Q. 「PC を使う上での問題は何か。」

A. 「私は自分のタブレットを持っていないため、繰り返し復習して自分の知識にすることができないこと。」

感想

ルワンダの ICT 教育の視察を行ったが、素直に言えば、驚いたという表現がふさわしい。

ラップトップの教材も数学や科学、プログラミングなど様々なものがあり、また少人数で行っていたので、先生から個人的な指導も受けることができるだろう。

しかし、ルワンダの ICT 教育は日本の ICT 教育と大きく異なると感じた。まず、目的である。日本の ICT 教育は、ICT を用いて、子供たちに考える力、創造性を身につけさせる目的で行っていることが多い。それに対してルワンダは、ICT スキルを子どもたちに身に付けてもらうことを第一の目的にしている。これは、「VISION2020」で ICT スキルを持つ人材を育てる目標を掲げているためである。つまり子供のころから PC に慣れてもらい、将来、本確定に ICT スキルを身に着けるための基礎にするとい

うことであろう。もちろんルワンダも ICT を用いて、数学の知識をより効果的に効率的に身に付けてもらうことはねらいとしていると言っていたが、それは第二以降の目的であろう。この点に、ICT を国づくりのための政策の一つとしているルワンダと、ICT 分野に限らず総合的な人材を育てようとしている日本の違いが出ている。もちろんどちらが良いというわけではなく、目的が違うというだけである。

しかし、日本の ICT 教育を用いた授業、例えば反転授業は、今後ルワンダに導入すれば効果を発揮する可能性はある。また、ルワンダの ICT 政策、例えば「One Laptop Per child」の仕組みを日本に導入することも考えられる。日本にはまだタブレットを配布したくても経済的に難しい地域もあるからだ。

同じ ICT 教育を進める国同士、相違点が多くあり学ぶことが多かった。

The New Times 訪問

担当者：丸茂思織

企画概要

日時：8月27日（水）

場所：The New Times

（HP：<http://www.newtimes.co.rw/>）

協力者：The New Times の皆様、編集長ケネディ氏

企画経緯と目的

企画経緯

ルワンダは2014年の今年、1994年に起こったルワンダ大虐殺よりちょうど20年を迎える。ルワンダには大虐殺発生時、当時ルワンダで主なメディアであったラジオが政府によって悪用され、それが虐殺を加速させたという悲劇の歴史がある。大虐殺から20年を経た今、従来悪用されたルワンダのメディアがどのように活用されているのか。出版社 The New Times をひとつの題材として、ルワンダメディアの今・未来の可能性を学びたいと考えたことが本企画実施に至った経緯である。

企画目的

- ①ジェノサイド当時悪用され虐殺を助長したとされるメディアが、ジェノサイドから20年を迎えた今どのように活用されているのか。New Times の取り組みを一つの例に、ルワンダメディアの現状を学ぶ。
- ②近年ジェノサイドの歴史を理由に、ルワンダ政府によりメディアや言論の自由を規制する法制定が進められている。New Times の設立者の一人であり現編集長を務めるケネディ氏にそれらに対する考えを伺い、今後のルワンダメディアの可能性を探る。

活動報告

本企画では The New Times 設立者の一人であるケネディ氏に、会社概要やルワンダメディアの現状、また近年制定されているメディア規制法等についてインタビューさせて頂いた。以下の内容はケネディ氏へのインタビュー内容をまとめたものである。

1. The New Times とは

(1)会社概要

New Times は、1995年9月に設立したルワンダでは有名な新聞社である。月曜日から土曜日まで出版している英字新聞「New Times」や、日曜日に限り特別に出版している英字新聞「Sunday Times」、キニヤルワンダ語の新聞「Izuba Rirashe」等、数多くの新聞を出版している。2006年からはニュース情報の提供を行うウェブサイトも開設し、そのアクセス数は月100万以上である。また現在は週に1度、雑誌の出版も行っている。設立当時4人だけだった従業員の数は、設立から15年を経た現在では100人以上に昇ると言う。

(2)ターゲットと理念

読者層のターゲットは、将来のオピニオンリーダーとなるヤング・エリート層であり、より学術的なコンテンツの配信に努めている。New Times は多角的な側面から物事を捉え、公平な立場から真実の情報を発信することを基本理念としており、記事内容の事実確認にも力を入れている。またメディアがジェノサイド時に悪用されたという歴史をもつルワンダにおいては、「人々にいかにメディアを信じてもらうか」が挑戦であったとケネディ氏は語っている。

2. The New Times の独自性と課題

(1)独自性「3言語による新聞の出版」

母国語であるキニヤルワンダ語と公用語である英語・フランス語という、ルワンダで使用できる3言語すべての言語で新聞を発行していることが New Times

の独自性である。またジェノサイド後のルワンダにおいて、初めて英字新聞の出版を始めたのも New Times である。

(2)課題

①他社との競争

以前は政府からお金の支給があったためお金に困っていなかったが、現在は他社と競争する必要に迫られている。新聞や雑誌等のプリントメディアは読者が減っていることに加えて、New Times は読者層の少ないフランス語の新聞を出版しているため非常にコストがかかってしまう。しかし New Times 独自の情報量の多さによって、他社との差別化を図っている。

②お金になびく記者の存在

賄賂を受け取るかわりに、お金をくれた人にとって都合の良い記事を書いてしまう記者が存在する。New Times はこういった行為を止めるよう教育しているが、それに刃向うジャーナリストがおり、以前1度だけ裁判沙汰になったことがあると言う。こういった状況のなか、公平な情報を提供することに努めている。

3. ルワンダのメディア規制法と言論の自由

(1)メディア規制法

以前のルワンダにおけるメディア法は不鮮明なものであったが、ジェノサイドから現在にいたるまで4回もの改正(1982年・1992年・2001年・2007年)をしながら改善されている。またルワンダには「RMC (Rwandan Media Commission)」という、記者による記者のための機関が存在している。RMCは政府の機関ではなく、ジャーナリストによ

って構成・運営されている。New Times にも RMC の委員が在籍しており、委員会のメンバーは選挙によって選出されている。

(2) 言論の自由

ケネディ氏は、ただ批判するのではなく代替案の提案を行うのが望ましいとしているうえで、事実に基づいていれば政府を非難することも可能であると述べている。

またケネディ氏はルワンダの言論の自由に関して「言論の自由は社会の柱であり非常に重要なものであるが、時に自由過ぎることは危険を伴う。特に近年、過ぎた発言により表現の自由の悪い側面が目立ちつつある。しかし明確な事実があれば政府を非難することも可能である」と私は思う。また私は、ルワンダの人々は情報の自由を持っていると信じている。なぜならルワンダには十分な情報があり、また人々はそれらの情報を選択する自由を持っていると考えるからである。」と述べている。



New Times の社内の様子

感想

現在のルワンダメディアに携わる方にインタビューさせて頂いたのは、Umuseke 設立者のマルセル氏も含めて二人目であったが、両者共に私が想像していた以上に「メディアが悪用された過去の歴史」を意識しており、「公平な情報を提供することに努めている」「ソースのある真実しか伝えない」といったことを繰り返し述べていたことが印象的だった。メディアが社会に対していかに大きな影響力をもち、また自分がそのメディアに携わるひとりであるということ強く自覚しているからだと思った。

また現カガメ政権は多くのルワンダ人から厚い支持を受けており、個人的にも彼に心酔しているルワンダ人が多いと感じていたため、ケネディ氏が「明確な事実があれば政府を非難することも可能である」と述べていたことには驚かされた。ルワンダ政府や政府関係者に都合の悪いことを言う・する人は秘密裏に殺されている…という話を小耳に挟んだことがあったため、「ルワンダの政府やリーダーを非難する自由は、国の改善を促すものであるから悪いことではなくポジティブなことである」とまで言い切っていたケネディ氏の身が少々心配になった。

しかし逆に言えば、メディア法によって報道や言論の自由が規制されているとは言え、ある意味そういう発言ができるレベルには「自由」であるのかもしれない。「ルワンダは、政府によって言論の自由が制限されている！」と騒いでいるのは、一部の先進国のみで（ルワンダに来る前の私もそのひとり）、実際ルワンダ国民は「よけいなお世話よ。」程度に思っているのかもしれない。

私自身、ルワンダ人学生から、BBC から情報収集を行うといった話や、ルワンダのテレビ局が日本のニュースを報道しているといった話を聞いて、ルワンダが報道の自由度ランキング 162 位（180 ヶ国中）の国であることが信じられなかった。ありきたりな結びになってしまうが、先進国が自国の「自由」の価値観を押し付けて他国を非難することは非常に簡単なことである。その国独自の「自由」の定義や価値、またその違いを大事にしなければならないと思った。

お忙しいなか興味深いお話を沢山聴かせてくださったケネディ氏、また **New Times** の従業員の方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



会社前で記念撮影

Agaseke 訪問

担当者：星野真希

企画概要

日時：8月29日（金）

協力者：三戸優理氏、組合所属の女性達、その他関係者様

企画経緯・企画目的

企画の経緯

Agaseke とは、首都キガリ市・RBD（ルワンダ開発局）が協力して行っているプロジェクトで、貧窮した女性たちに、ルワンダの伝統工芸品であるアガセチェやバスケット製作によって雇用を生み出し、収入を与え、女性の自立支援を促すプロジェクトである。実際に、Agaseke により、女性が主収入を得ることができ、生活が改善されたと報告されている。筆者は、Agaseke で働いている女性の生活が改善されているのか。また、女性達がどのようにして Agaseke を知り、Agaseke で働こうと思ったのかという経緯を知りたいと思い、Agaseke で働いている何人かの女性にインタビューすることにした。また、カルチュラルイベントを行った経緯としては、伝統ダンスは昔の人々の生活の営みや文化を表すものであり、日本とルワンダのダンスをお互いに披露することにより、お互いの文化や歴史の理解を深めること。また、Agaseke の働いている人達に、日本の伝統ダンスを披露することで、日本の文化についてより身近に感じていただくことも目的としている。

企画目的

①Agaseke で働いている女性達にインタビ

ューすることで、Agaseke がどのようにして女性達に仕事の技術を施し、仕事を与えているのかを知り、女性支援に関する知識を深める。

②ルワンダ人学生と日本人学生がダンスを通じて、お互いの文化を知り、当団体の活動理念である「相互理解」を深める。

活動内容

1. 企画概要

ルワンダ人学生と一緒に、Agaseke で働いている女性達に自己紹介をおこなった。そして、Agaseke の工房を見学した後に、そこで働いている女性数人にインタビューを行った。インタビューを終えた後に、Agaseke で働いている女性たちに向けて、ルワンダ人学生はルワンダの伝統ダンスを披露し、日本人学生は、ソーラン節を披露するカルチュラルイベントを行った。



バスケットやアガセチェを製作する女性達



2. インタビュー内容

(1)リディアさん

Q. 「なぜ Agaseke に加入したのか？ Agaseke をどのように知ったのか？」

A. 「お金の問題で収入を得たいと思い加入した。Agaseke は近所の友達が入っており、その友人を通して知った。」

Q. 「アガセチェをつくるのは大変ではないのか？」

A. 「大変ではない。まだトレーニング段階で、完璧にアガセチェを作れるわけではないが、アガセチェを製作していて楽しい。」

Q. 「Agaseke に加入したことにより生活は改善したのか？」

A. 「生活は改善した。まだ加入して1週間だが、多くの友達ができ、収入も得ることができるようになった。」

(2)アグネスさん

Q. 「なぜ Agaseke に加入したのか？ Agaseke をどのように知ったのか？」

A. 「2 人子供がいて、子供を大学に通わせるのに十分なお金と服を買うお金がなかったので、Agaseke に加入した。」

Q. 「Agaseke などの商品をつくることは大変ではないのか？」

A. 「確かにつくるのは大変そうに見えるが、作り方自体はとてもシンプル。なので作り方を覚えてしまえば簡単である。」

A. 「Agaseke に加入したことで生活は改善されたか？」

Q.「改善された。子供の学費が払えるようになった。」

感想

今回 Agaseke を訪問して印象的だったことは、Agaseke は女性達の収入を得る場だけでなく、コミュニティ形成の場になっていることである。リディアさんのインタビューの発言だけでなく、女性たちが楽しくおしゃべりをしながら、アガセチェやバスケット製作をしている姿をよく見かけた。また、工房内にはアガセチェとバスケットが展示されていたが、どれを見ても荒い網目などなく、品質のよい製品がおかれていた。きちんとしたトレーニングによってこのような商品が完成されるのだと思った。

どの女性達も一生懸命にアガセチェやバスケットを製作しており、彼女達の顔に誇りを感じられた。Agaseke は、女性達に収入を与えることだけでなく、コミュニティを形成し、女性達の仕事が社会的に評価される喜びを与える場だと筆者は実感した。

カルチュラルイベントでは、Agaseke で働いている女性が一緒に踊って下さったり、また手拍子や掛け声をかけてくださった。日本人学生がソーラン節を踊り終わった後、ルワンダ人がダンスを教えてほしいなどといったやりとりもあり、ダンスはお互いを文化の理解を深めるものであると実感した。



Umuganda 活動 体験

担当者：渡邊伶

企画概要

日時：8月30日（土）

企画目的と経緯

企画経緯

ルワンダがジェノサイド後から経済発展を遂げている理由の一つとして Umuganda が挙げられる。Umuganda に参加し、実際に奉仕活動を体験し、参加者の意見を聞くなどしてなぜウムガンダが経済発展の要因の一つになっているのかを考察する。

企画目的

1. Umuganda というルワンダ独自の取り組みを通じて、ルワンダの文化や伝統、社会についての理解を深める。
2. Umuganda に参加しているルワンダ人のコミュニティと交流を図る。

活動報告

1. 事前学習「Umuganda とは」

Umuganda とは、毎月最終土曜日に国民全員の参加が義務づけられている奉仕活動の事である。共同作業を通して、コミュニティの和解と構築、さらに経済発展を目指すことで、ジェノサイド後の国家の立て直しと繁栄を目的としている。ジェノサイドがツチとフツの対立から発生した過去を反省して、コミュニティ毎の共同体意識を醸成し協働することで、荒廃した大地をよみ

がえらせてきた。

ウムガンダの日は、午前 8 時から 10 時まで奉仕活動を行い、11 時からはコミュニティ毎に集まってミーティングを行う。奉仕活動の内容は、コミュニティ毎に異なり、そのコミュニティのリーダーが指示したことを行うのが基本である。活動内容例として、清掃などの美化活動や、道路工事、植林などがある。ちなみにウムガンダでは基盤作りのみを行って、それ以降はお金を出し、業者に委託して建設の進行状況を確認するにとどまる。

奉仕活動の後には、コミュニティ毎に集まってミーティングが開かれる。ミーティングでは、リーダーと市民とで、コミュニティの課題について話し合われる。

ちなみに Umuganda が行われている時間帯は、商業活動が禁止されるため、お店も営業されず、交通機関もストップする。



ミーティングの様子

2. Umuganda の活動内容

Umuganda が行われる時間は、交通機関がストップしてしまうので、ウムガンダ開始前にタクシーで活動地に向かった。

ウムガンダが行われる場所では、多くの

ルワンダ人が集まり、すでに作業を開始していた。

今回私たちが行った場所では、道路の開発作業が行われていた。私たちが行った作業は三つある。一つ目はシャベルを使って道路のわきにある土を荷車に積む作業。二つ目は土が積まれた荷車を一箇所に運ぶ作業。三つ目が運ばれた土をトラックに積む作業である。

荷車を運ぶ人、土を積む人など役割が分担されていたが、道具の数に制限があるため、全員が同時に作業をしていたわけではなく、交代で行っていた。

奉仕活動後、Umuganda が行われていた場所から徒歩で約 10 分移動した場所でミーティングが行われた。200 人以上は入れる会場に、市民が集まっていき、前のステージには、コミュニティのリーダーが座っていた。ミーティングは一貫してルワンダ語で行われていた。

感想

Umuganda を実際に体験してみて、その仕組みの素晴らしさを実感した。Umuganda で共同活動を行うことで、コミュニティの和解と構築、さらには経済発展を図ることができる。市民にとっても政府にとってもメリットがあり、ジェノサイドからの経済発展を目指すルワンダにとってふさわしい素晴らしい仕組みである。私はウムガンダ中に JRYC メンバー以外のルワンダ人とも話したりして交流を深めていたが、同じようなことはルワンダ人同士でも起こっているのだろう。Umuganda はコミュニティの構築につながっていくことを体感した。

また、今回ルワンダ人と一緒に Umuganda を行い、ルワンダ人の作業の上手さに驚いた。荷車で集めた土をトラックに積む作業では、シャベルで土をすくい、それをトラックに投げ込む必要があったのだが、私達日本人が行うと、半分ぐらいの土がトラックまで行かず、その途中で落ちてしまった。一方で、ルワンダ人は土を塊の状態のまま、トラックに投げ込んでいた。もちろんルワンダ人は毎月この作業を行っているため、私達より上手にできることは当たり前なことだが、彼らも最初から上手にできたわけではないのだろう。何回も活動しているうちに上達していったと思われるし、そこに Umuganda という活動の継続性を感じた。



ウムガンダ活動に参加するメンバー



在ルワンダ 日本国大使館訪問

担当者：品川正之介

企画概要

日時：2014年9月1日（月）

15:00~16:30

場所：Plot no. 1236, Kacyiru, South Gasabo, Kigali, Rwanda（キガリ中心地より Kacyiru 行きのバスに乗り約 15 分）

協力者（面会した大使館員）：

- ・小川和也氏（在ルワンダ日本国大使館特命全権大使）
- ・村田絵梨子氏（一等書記官）

企画目的

- ・日本とルワンダの外交上の関係・現状について理解を深める。
- ・日本とルワンダの近年における経済的関係の進展について理解を深める。
- ・日本ルワンダ学生会議と大使館との今後の関係について意見を述べる。
- ・近年西アフリカで猛威を振るうエボラ出血熱のルワンダ国内での発生時など、緊急時の対応や連絡方法等について、滞在中の安全対策を確認する。

活動報告

<対談内容（一部抜粋）>

※簡単な自己紹介の後、小川大使よりお話を頂き、その後質疑応答をする形式で対談を進めた。日本人学生・ルワンダ人学生同席での訪問であったため、基本的に対談は英語で行われた。

◆大虐殺から 20 年

小川大使（以下、小川）「今年は大虐殺から 20 年の節目の年です。4 月に行われた大虐殺の追悼記念式典は、昨年にも増して大事なものであったと思います。私たちにとっては、20 年前と言うと大分昔のことの様にも思われますが、ルワンダの方々にとっては、大虐殺の経験は今なお鮮明なものであるでしょう。皆さんには大虐殺の記念館を訪れることをお勧めします。キガリにもギソジのメモリアルがありますが、そこでは、展示等を通じて大虐殺やルワンダの歴史に関してよく知ることができます。ルワンダに来られる日本の政府関係者の方にも、大虐殺の記念館を訪れることを勧めています。最近では石原外務大臣政務官、衆議院議員の三原議員・山際議員が記念館を訪問されました。」

◆日本人との類似点

小川「日本人とルワンダ人の国民性には、共通点があると言われます。勤勉でよく働き、シャイで、自分の思いや考えをなかなか打ち明けない、という点です。ルワンダに赴任する前から、チャールズ・ムリガンデ駐日ルワンダ共和国大使よりルワンダの国民性については聞いていました。私がルワンダに来て 1 年 4 ヶ月が経ちますが、ルワンダの国民性には、実際その様な特徴があるなと感じています。日本に赴任しているボランティア、専門家の人たちも、ルワンダの人はシャイだとよく言っておられますね。」

◆ルワンダの良さ

小川「ルワンダには多くの良い面がありま

す。まずは治安の良さです。若い外国人の女性でも、夜に外をジョギングできる程治安は良いでしょう。アフリカで最も治安の良い国の 1 つであると言えます。次に、政府のスタビリティです。一部カガメ大統領に対する批判もありますが、政治的な混乱が多い他のアフリカ諸国に比べ、政治の安定は着目に値します。街の綺麗さも素晴らしいです。日本の国会議員の方々もキガリの綺麗さに驚いておられました。汚職に対して非常に厳しいことも良い点です。ルワンダ政府は、“Zero Tolerance for corruption（汚職に対する毅然たる対応）”を掲げています。他のアフリカ諸国では、日本人ビジネスマンが汚職に悩まされているという話も聞きますが、ルワンダではそういうことは稀でしょう。」

◆日本企業のルワンダ進出

小川「最近、日本からのアフリカ貿易・投資促進官民合同ミッションの受け入れをしました。ルワンダにおける貿易と投資の機会を探ることを目的に、民間からは三井、三菱、住友、伊藤忠、丸紅等の商社や、メーカー、金融などの企業の代表団がルワンダを訪れました。カガメ大統領もミッション一行を快く迎え、とても良い雰囲気での議論が進められました。太陽光発電、地熱発電、農業加工、ICT 等の分野で、既にいくつかの日本の企業がルワンダでビジネスを始める意向を示しています。現在、ルワンダへ投資している日系企業にルワンダナッツという会社があります。ケニアでマカダミアナッツの生産を長年されていた佐藤芳之さんが立ち上げた会社で、名前の通りマカダミアナッツを扱う会社です。『Hills』

という商品を皆さんもナクマツなどのスーパーマーケットで購入することができます。今後、更に多くの日本の方に、ルワンダ市場に興味をもって頂きたいと思っています。」

◆東アフリカ共同体市場

小川「ルワンダは、人口が 1200 万人程度で市場としては小さいです。しかし、ケニア・タンザニア・ウガンダ・ブルンジ・そしてルワンダで構成される東アフリカ共同体で考えてみると、約 1 億 4000 万人の市場が実現します。ルワンダに投資することは、この大きな市場をカバーできることを意味します。ただ、ビジネス的にルワンダがケニアやタンザニアなどに飲み込まれてしまう危険性もありますが。また、コンゴ民主共和国東部の市場にもアクセスしやすい場所にルワンダが位置していることも大きいでしょう。というのも、コンゴ民主共和国の首都キンシャサから東部は非常に離れており、またキンシャサと東部間は道路整備も良くなされていないため、東部に行くにはほとんどの場合、飛行機でルワンダを経由しなければいけないためです。」

◆ルワンダ発展の鍵、イミヒゴとウムガンダ

小川「これは私の個人的な意見ですが、ルワンダの経済発展を支える鍵が 2 つあると思っています。イミヒゴとウムガンダです。まずイミヒゴですが、これは事業契約とでも訳せるもので、毎年大統領と閣僚、知事、在外大使等との間で業績目標を決め、実行し、その達成度合いを年の終わりに厳しく審査するというものです。このイミヒゴの

様子は、インターネットやテレビで公開され、誰でも見ることができます。駐日ルワンダ共和国大使の場合は、日本人観光客の数をこれだけ増やす、日本への伝統工芸品の輸出をこれだけ増やす、といった様なイミヒゴが結ばれることもあります。このイミヒゴの仕組みは、各閣僚や知事、大使の間に競争を促します。競争は激しく、また成果を出せない人は降格や左遷されることなどもありえます。競争は、ルワンダの発展の大きな要素の 1 つでしょう。イミヒゴにはデメリットもあり、視点が 1 年単位の短期的なものになってしまう、イミヒゴで表明されたこと以外の項目に対する関心が低くなってしまふ、ということがあります。次にウムガンダです。公共奉仕活動とでも言えるでしょう。毎週最終土曜の午前中に、国民総出で地域の道路工事や清掃などの公共奉仕活動が無償で行います。私も何度か参加したことがあり、植林や道路工事のお手伝いをしました。カガメ大統領もこのウムガンダに参加します。大虐殺以降、このウムガンダは、協働によって地域の人々の結束・和解を深めています。ルワンダは世界第 6 位の PKO 貢献国で、各地にルワンダ兵を派遣していますが、紛争後の現地でルワンダ兵がウムガンダを実践していたりもするそうです。現地の人々にウムガンダを紹介し、地域の結束や和解を促進して、またどの様にルワンダが和解と発展を成し遂げたか教えることは、他の国のためにもなるでしょう。」

◆質疑応答 (Q.: 日本人・ルワンダ人学生、
A.: 小川大使)

Q. 「日本からのアフリカ貿易・投資促進官

民合同ミッションの受け入れをされたとのことでしたが、近年日本のルワンダに対するビジネスの注目度が高まってきた理由は何かとお考えでしょうか。」

- A. 「政府やルワンダ開発庁、またチャールズ・ムリガンデ駐日ルワンダ共和国大使の働きも大きいと思います。彼はこのミッションに同行してルワンダに帰ってこられました。約2日の短期間の日程で、キガリ郊外の経済特区の視察、カガメ大統領との会談、ルワンダ開発庁によるビジネスセミナー、その他省庁とのワーキングセッションなどを実現されました。多くの日本のビジネスマンがルワンダでのビジネスに対して、ビジネス環境の良さ、治安、汚職の少なさなどの好印象を持って帰られました。また近年は、日本のテレビがルワンダのことを取り上げることも多く、多くの日本人がルワンダを知り始めていることも大きいですね。この間は、報道 Station が佐藤芳之さんのルワンダナッツに関するドキュメンタリーを放送していました。ルワンダと Google で検索すると、たしかにまだ大虐殺の情報が多く出てきますが、それでもルワンダに対する日本の見方は少しずつですが変わってきていると思います。日本政府もルワンダやアフリカ諸国に関するネガティブなイメージを変えるために、施策を講じています。」

Q. 「中国と韓国の企業はルワンダ始めアフリカ諸国に積極的に進出していますが、日本の企業の進出状況はどうでしょうか。」

- A. 「中国と韓国の進出はとても勢いがあり

ますね。去年は韓国の Korea Telecom という企業が約400億円もの投資をルワンダで行いました。彼らはリスクテイクに関してとても長けていると思います。一方で日本の企業は意思決定に時間が掛かるなどして、うまく進出できていません。中国と韓国には非常に大きく遅れをとっている実情です。」

Q. 「ルワンダで大使を務めることが決まった時の心境はいかがでしたか。戸惑い等はありませんでしたか。」

- A. 「大虐殺のことは知っていましたが、赴任が決まり改めてルワンダのことを調べてみると、発展が進み『アフリカのスイス』や『アフリカのシンガポール』と呼ばれていること等を知り、面白そうだと思います。『Rwanda, Inc.』という本で、カガメ大統領はまるで企業の CEO の様に国の発展を進めていると書かれていますが、まさしく、カガメ大統領のリーダーシップで発展が進んでおり、そういう点も面白いと思います。」

Q. 「資本主義最後のフロンティアとも言われ発展が進むアフリカにおいて、日本はどのような分野で貢献したりプレゼンスを発揮できるとお考えでしょうか。」

- A. 「まず発展が進んでいるという点ですが、ルワンダはまだまだ1人当たりのGDPでは低開発の途上国ですし、キガリを見ている限りでは発展している様に見えますが、地方では裸足で歩いている子供や、格差も見られます。そういった意味で日本の経済協力の余地は十分にあります。日本ができる貢献ですが、2つあって、1

つは経済分野の進出です。ビジネスで日本とルワンダお互いが win-win になるような関係を築くことです。中国はアフリカの様々な資源を狙って進出していますが、そのような形ではなく、日本らしい形で進出できればと思います。もう 1 つは先ほども言ったように経済協力です。日本独自の経済協力のやり方があると思っています。欧米諸国に比べて日本は経済協力に成功しているのではないかと思います。現在の東南アジアの発展を見ると、元々は賠償で始まったものではありますが、日本のインフラへの経済協力というものが発展の大きな要因でした。中国も日本から巨額の経済協力を受けており、日本の経済協力をベースに東アジアが発展したことは事実であると思います。一方、同じような期間に欧米諸国はアフリカで経済協力を行ってきましたが、成功しているとはなかなか思えません。経済協力には様々な考え方があって、インフラなどに注力するもの、人道で食糧援助や医療などに注力するものがあります。日本はインフラに力を入れ効果を生んだ一方、欧米諸国はアフリカで人道の部分に力を入れてきて、うまくいかなかった状況があります。インフラは一度作れば次のものを生みますが、人道分野の援助は一過性で、援助が引き上がると続かない面もあります。近年はイギリスなども援助に関して考えを改めはじめています。また細かいことを言えば、日本は農業などで、技術協力のきめ細やかさが非常に優れていると思います。現場で現地の人に手取り足取り教える。欧米の人はなかなかそういうことはしないそうです。」

Q. 「日本とルワンダで、経済面だけでなく文化面での協力はありますか。」

A. 「文化面はなかなかまだ手が回っていない現状がありますが、日本の映画祭など、今後もう少しできればと考えています。実は、昨日はここで空手大会、日本大使杯を開催しました。その他には留学生の受け入れをしています。安倍総理になってから、ABE イニシアティブにて、今年ルワンダの学生 10 名が日本で留学やインターンをします。」

Q. 「日本ルワンダ学生会議ルワンダサイドとして、日本に関するイベントに参加したいのですが、大使館が何かイベント開催の際は参加することができますか。」

A. 「JAAR (Jica Alumni Association of Rwanda: ルワンダ JICA 帰国研修員同窓会) という組織があり、現時点で約 200 人ほどのメンバーがいます。今秋 JAAR が日本の生活や体験に関する話をする JAPANESE DAY というようなイベントをルワンダで開催するそうです。その際は何か協力ができるかもしれませんね。」

Q. 「2017 年に大統領選挙があります。カガメ大統領は現行憲法の規定では大統領に出馬できないことになっていますが、2017 年以降のルワンダはどうかとお考えですか。」

A. 「これは非常に重要で、またデリケートな問題です。カガメ大統領は次回の選挙に関しての明言は避けていますね。たしかに現行憲法は大統領の 3 選は禁止されていますが、もしルワンダ国民が彼の 3 選を望み、また正式な法的手続きが踏ま

れば、彼の3選も無いことは無いでしょう。現時点では、これ以上のことは言えません。ただ、ルワンダの選挙まではあと3年ありますが、実はそれまでの間に、他のアフリカ諸国でも同様に選挙があり、それに対応せねばなりません。国際社会はそれらを注意深く見守っていくでしょう。」

Q. 「日本とルワンダの若者に何を期待しますか」

A. 「若者には無限の可能性があります。両国の関係を強化するためにも、ぜひ活動に全力を尽くしてください。大使館としても両国若者の交流活動をサポートしたいと考えています。是非、世界の視野を広げて頑張ってください。」

感想

小川大使には、政治・経済からルワンダの文化や国民性に至るまで、様々なお話を頂いた。中でも特に興味を引いたものが2つある。ひとつはイミヒゴというルワンダの制度について、もうひとつは文化交流に関してである。イミヒゴの詳細は上記の通りだが、この制度からは日本も学ぶべき点が多い。日本では、政党や政治家個人がマニフェストや公約を掲げはするものの、その実際の結果がしっかりと審査・評価されることは珍しい。近年の民主党や自民党の例を見ても、以前に掲げられていた公約やマニフェストと、実際に実行された政策、そしてその結果は甚だ乖離していることがしばしばあるように思われる。一方イミヒゴによって、業績目標の設定・実行・評価が厳密に行われており、その様子が国民に

オープンであるルワンダの事例は、日本も大いに見習えるのではないか。次に、政治や経済の交流に比べ、文化交流がまだまだ進んでいないというお話を小川大使より伺ったが、この文化交流こそ、私たち学生が力を発揮できる分野だと思った。日本とルワンダの関係を考えてみると、政治、ビジネス、支援・援助、文化交流など様々な切り口が考えられるが、学生の私たちがある意味一番の比較優位を発揮できるものは、まさに文化交流や、その他様々な交流ではないだろうか。というのも、政治は政治家・外交官に、ビジネスはビジネスマンに、支援・援助は、JICA等の援助機関やNPO・NGOなど、それぞれのプロフェッショナルに任せれば良い。自由な立場で時間に余裕のある学生だからこそ、すぐに目に見える様な結果が出にくい、もしくはわかりやすい成果の見えにくい交流活動に全力で取り組める。交流を通じて、お互いのことをよく知り信頼や友情を深めることは、両国関係を発展させることに大きな意味を持つものだと、今回お話を聞いて改めて考えた。



ジェノサイドメモリアル 訪問

担当者：藤内庄司

企画概要

■ムランビ・ジェノサイド・メモリアル

日時：8月4日（木）

場所：ギコンゴロ

■キガリ・ジェノサイド・メモリアル

日時：9月7日（日）

場所：ギソジ

企画目的と経緯

ジェノサイドから20年経った今、当時の社会状況をもう一度学び直すため。またメモリアルの位置づけ、メモリアルの役割を確認するため。

活動概要・報告

ムランビ・ジェノサイド・メモリアルは首都キガリから車で約3時間のところにある。メモリアルは眺めのいい丘の頂に建てられており、まさに「千の丘の国」にふさわしいロケーションである。中に入ると、メモリアルのスタッフが私たちを待っていた。彼からジェノサイド当時この場所で起こったことを詳しく説明してもらい、敷地内を案内してもらう。1994年当時この場所はムランビ技術学校という学校であった。フランス軍が駐留しているということもあり、安全の地を求めて多くのツチがこの場所に集まった。しかし1994年4月のある日、食料供給や生活インフラがすべてストップし、食べ物や水の不足が続く中、

フランス軍の保護を受ける事もなく、フツ系過激派民兵のインテラハムウェの襲撃を受けた。約50,000人いた避難者のうち生き延びたのは12人とほんのわずかである。次に敷地内のある部屋へと案内してくれた。そこには、数十人のミイラ化した遺体、そして頭蓋骨……部屋に入ると強烈なおいが鼻をつんざいた。眠っているような赤子の遺体、口を大きく開け苦悶の表情を見せる遺体、そしてマチューテ(虐殺時利用された農業用の山刀)で襲われ裂け目のはいった頭蓋骨。これらを“展示”している部屋が軒並みに並ぶ。その他被害者を葬っている慰霊碑、被害者が当時身につけていた大量の衣類などを見せて頂き、彼は当時の惨劇を彷彿させるかのように説明してくれた。本館にはジェノサイドまでの歴史、当時の社会制度や政策などが多くの写真と文字（現地語、英語、仏語）を用いて説明されていた



佇むムランビのメモリアル（上）と旗（下）

キガリ・ジェノサイド・メモリアルはキガリ中心部から車で 20 分の所に位置する、最も有名なジェノサイドメモリアルの一つである。ムランビを訪れた際、訪問客は私たち以外に見かけなかったが、キガリでは多くの欧米人訪問客の姿が見られた。またムランビとは異なり、キガリのメモリアルは 2004 年に新しく建てられたもので、比較的新しい印象であった。解説展示としてはムランビと同様、ジェノサイド当時を中心に社会的様相が解説されていたが、外国人観光客が多いせいか、ジェノサイド当時の国際社会(各国の動向や国連、NGO や NPO の動向まで)に言及する展示も数多く見られた。またルワンダのジェノサイドだけではなく、ドイツ・ナチ党によるジェノサイド、カンボジアにおけるポル・ポト政権による虐殺など歴史上のジェノサイドを詳しく解説するブースが非常に印象的であった。またそこにルワンダの「Never Again」の精神がルワンダだけでなく、世界へ向けた言葉であることを認識させられた。



キガリのメモリアルから撮った風景

感想

ムランビ・ジェノサイド・メモリアルである一室に案内された。中に入ってみると一人の男性が私の方を向いている。彼はジェノサイドで殺され、歪んだ口を大きくあけ、苦悶の表情で私を見つめていた。助けを求めているような、また何かを怒っているような、はたまた私に何かを訴えかけているような気がした…彼が言い残したかった言葉は一体何だったのだろうか……

ルワンダは現在豊かな自然と絶滅危惧種に指定されるゴリラ、そしてアフリカでも群を抜く治安のよさが欧米の観光客を中心に誘致している。また最近ではアフリカでビジネスをしやすい国 2 位に選ばれ、国際的な評価も高まりつつある。日本では「ホテル・ルワンダ」で名を博したこともあり、ルワンダ＝ジェノサイドのイメージが未だ色濃く残るが、JICA や大学を始めとする様々な機関がルワンダに関するセミナーやシンポジウムを開くなど、徐々にルワンダの印象が変化する兆しが見え始めている。

そこでよく聞く言葉が「ルワンダは発展途上の国であり、投資のチャンスが多く存在する」「ルワンダはアフリカのシンガポールである」などである。もちろんルワンダに多くの投資が集まり経済が活性化し、政府が進めるシンガポールのような ICT による国づくりには非常に期待がかかる。持続的な経済成長なしに国づくり、ひいては生活の安定は為せないからである。

高度経済成長期の日本は「もはや戦後ではない」と言われた。そこから戦争は「歴史の 1 ページ」へと化した。そして戦争は遠い過去・そして記憶になりつつある。ルワンダでもその時期にさしかかっているの

ではなかろうか。ルワンダ・ジェノサイドが教科書の1ページを飾り、遠い過去・記憶になる前に、私たちに出来る事はまだまだあるはずだ。

来年 2015 年は第二次世界大戦終戦から70年の年である。戦争体験者や原爆被爆者の高齢化は著しく、体験者発信の「語る」という伝承方法が消滅しつつある。すでに日本では先の戦争が「歴史の1ページ」になってしまっているが、新たなカタチで語り継いでいく必要がある。それはまぎれもなく「Never Again」のために…

メモリアルで私を見つめていた彼がこの世に言い残したことは正直わからない。しかし彼の表情からこの世に生かされている一人の人間としてまだなにかやれることがあるのではないかと諭されているようにも感じた。

Inema Arts Center 訪問

担当者：品川正之介

企画概要

場 所：KG 563 St Kacyiru, Kigali, Rwanda.

日 時：2014年9月7日（日）

協力者：Inema Arts Center の皆様

HP：<http://inemaartcenter.com/>

Facebook：

<https://www.facebook.com/pages/Inema-Arts-Center/402598333168213>

企画目的

日本人がルワンダから連想するのは、「ジェノサイド」「民族対立」「危険」といったネガティブなものが多いが、実際のルワンダでは、安定した政治、急速に発展する経済、すこぶる良い治安、シャイだが人懐っこくもある人々、伝統ダンスを始めとする文化等、様々なポジティブな面が存在する。今回の訪問は、その様なジェノサイドだけではなくルワンダの魅力を探るために企画された。このような想いのもと、以下を訪問の目的に設定した。

- ・ジェノサイドだけではなく、ルワンダのポジティブな魅力を発見する。
- ・ルワンダの芸術を見て、感じ、理解を深める。

活動報告

訪問地概要

◆Inema Arts Center とは

キガリ郊外の閑静な住宅街の中に佇むアートスタジオ。作品が展示されたギャラリーとアーティストたちが作品を制作する作業場等がある。現代アフリカ美術・工芸・音楽・ダンス等、扱う範囲は幅広く、ギャラリーでは、絵画・彫刻・混合メディア表現などの様々な作品を楽しむことができる。

Inema Arts Center は、兄弟である Emmanuel Nkuranga 氏、Innocent Nkurunziza 氏によって 2012 年に設立された。ルワンダアートを担う有能でクリエイティブな才能達が出会う場を提供し、またアートによって生活を向上させることを目的にしている。また、Inema Arts Center は以下のような取り組みも行っている。

(1) NZIZA ART WORK

工芸品を作る女性に技術指導を行う。女性たちが作った製品は Inema Arts Center を通じて販売されるため、女性たちの雇用も生み出している。

(2) ART WITH A MISSION

孤児を対象にしたプログラム。毎週のワークショップを通じて、10 歳から 17 歳までの子供たちの美術的才能を引き出す。完成した作品は販売もされ、収益は孤児の生活費や学校の授業料などに使用される。

(3) INEMA DANCERS

伝統ダンスチーム。若い世代の音楽やダンスの才能を育てている。20 名以上の若者メンバーが参加している。ルワンダ各地でパフォーマンスを行い、伝統文化を後世に伝えると同時に、パフォーマンスであげられる収益は、子供たちの生活費や学校の授

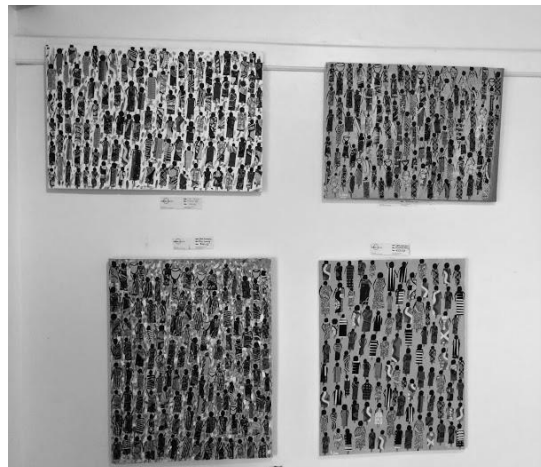
業料などに当てられる。

感想

第 11 回本会議での訪問地は、どれも興味深く、1つ1つが充実したものであったが、その中でも特に印象に残っているのが、この Inema Arts Center である。閑静で雰囲気の良い住宅街の中、赤土の道を抜けたところにあるこのスタジオでは、様々なルワンダアート作品が鑑賞できる。白を基調としたスタジオ内部はとてもおしゃれで、日本のおしゃれスポット（表参道とか代官山とか…？）にこのスタジオがあってもなんら違和感がないくらいであった。スタジオ内部の様子や作品を写真や動画に収めて、日本人に見せたとしたら、これがアフリカのルワンダという国にあるスタジオであるなんて絶対に想像できないであろう。ゆっくりと作品の鑑賞を楽しんでいると、当日遊びに来ていた子供たちが外でルワンダドラムをたたき始め、その音はけたたましくもわくわくさせるようなものであった。ちゃっかり彼らにドラムの叩き方も教えてもらい、子供たちとのひと時交流も楽しめた。作品鑑賞、作品製作現場見学、ドラム体験となんと 2 時間近くも滞在させていただいた。欧米から来た観光客もちらほらおり、子供にルワンダダンスを習っていたりして、とてものんびりとした時間が流れるよいスタジオであった。ルワンダに旅行に行く方には、抜群にお勧めのスポットである。ルワンダを旅行するとなると、ジェノサイドメモリアルや、ゴリラトレッキングが主流だとは思いますが、このスタジオにもぜひ一度足を運んでみて頂きたい。あなたのルワンダ観に新たなものが加わるのは間違いない。

ギャラリー写真

百聞は一見に如かず。以下ギャラリー内の様子と展示作品を写真にて紹介する。



第三章

学生会議 活動報告

学生会議 概要.....	53
日本側プレゼンテーション	
ドメスティック・バイオレンス.....	54
貧困問題とマイクロファイス～誰が貧困者を救うのか？～.....	56
日本の観光.....	58
社会の安定のために、言論の自由を制限することは許されるか.....	60
日本ルワンダ学生会議 日本側の活動.....	62
ルワンダ側プレゼンテーション	
National Dialogue and Imihigo.....	67
Economy of Rwanda.....	69
History of Rwanda.....	71
Biogas Program.....	72

学生会議 概要

ABOUT STUDENT CONFERENCE

実施日

2014年8月28日、9月2日、3日、8日、9日、10日

活動内容

日本・ルワンダ両国の学生がそれぞれの興味・関心のある分野や社会問題などからトピックを決めプレゼンテーションを行い、そのトピックに関連したディスカッションや意見交換を行う。

活動目的

団体の活動理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から、様々なテーマについて深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

活動成果

- ・互いの国に対するより深い理解。
- ・異なるバックグラウンドを持つ学生同士の、異なる価値観や考え方との出会い。
- ・団体の将来について、日本側・ルワンダ側双方の真剣な議論。

ドメスティック・バイオレンス

発表者：星野真希

テーマ選択理由

ルワンダといえば、女性のエンパワーメントの国である。例えば、女性国会議員が80人中51人在籍しており、60%を占めている。女性の国会議員数の比率では世界でもトップクラスである。一方、世界のドメスティック・バイオレンス（以下 DV）の被害のおよそ99%は女性である。女性のエンパワーメント化が進んでいるルワンダで、被害の大多数を女性が占める DV をルワンダ人はどう感じるのか。また、DV の被害が、アフリカでは先進国諸国と比べて報告されておらず、ルワンダの DV の現状を知りたいと思ったこと。そして、DV の被害者・加害者支援が先進国を中心に行われているが、女性のエンパワーメントが進んでいるルワンダでは、そのような支援をどう思うのか知りたいと思い、このテーマを選んだ。

プレゼンの概要

はじめに、DV の定義について説明した。DV とは、パートナーを身体的、精神的に支配することであり、①身体的虐待②性的虐待③経済的虐待④心理的虐待⑤社会的虐待に分類わけできる。次に、DV は世界的にみても大きな社会問題であることを説明した。例えば世界中の女性の3人に1人は DV の被害をうけており、また15歳から45歳の女性は、癌やマラリアで死亡するより

DV で死亡する割合のほうが高い。そして、先進国であるイギリスと、DV の被害が著しいロシアとブラジルを例にあげ、いかに DV が世界各国で問題になっているか説明した。そして、日本の DV の現状についても説明し、DV を家庭内の問題として捉えていた時代から DV が社会的問題であると認識され、配偶者暴力防止法が施行される経緯を説明した。最後に、DV に対する日本の取り組みと世界の取り組みを紹介した。

ディスカッション概要

「ルワンダの DV の現状について」という議題でディスカッションを行った。

グループ1

以前は、身体的暴力の被害が多くて問題になったが、今は少ない。性的虐待は少ないが、心理的虐待は多い。パートナーのお金を管理する経済的虐待は、ほとんどの家庭で行われていると思う。なぜかという、家長が家族のお金を管理するからだ。それは、家長というルワンダの習慣と関係している、経済的虐待をルワンダ人は虐待と認識していない。ちなみに、ルワンダ人は DV と聞くと、ほとんどの人が身体的暴力を思い浮かべる。ルワンダでは、民間のカウンセリングが存在し、被害者および加害者が、民間のカウンセリングをうける。もし加害者が、被害者を殺したりした場合は、刑務所に行く。もし身体的虐待をしたら、刑務所に行くかもしれないので、人々は恐れて身体的虐待をしない。公的なものではないが、男女別れてグループをつくり、虐待された体験談をはなすプログラムは、いくつかの地域で行われている。トラウマを抱えている人も多いので、DV を受けた

ことがあってもかくしている人が多いのかもしれない。

グループ 2

ルワンダでは 1994 年以降女性の力が強くなってきてから、DV の問題が浮上した。そして、DV の現状を理解しているが、どうやって被害者数を減らせばいいのか具体的な案を、まだ出せていない。それがルワンダの問題でもある。ルワンダでは、もし虐待されている人をみかけたら、警察に通報する。もし、自ら通報するのが怖い場合は、カウンセラーが相談にのってくれる。村のコミュニティのリーダーなどが、DV の被害者がでる前に、警察に通報するなど被害者を守ってくれる。性的虐待を受けた場合、ワン・ストップ・センターで、医療的処置や検査をすることができる。

感想

発表者

今回発表して、DV の定義が日本とルワンダで違うことに驚いた。例えば、日本や欧米はパートナーのお金や財産を管理することを経済的虐待としているが、ルワンダでは家長が家族のお金を管理することが習慣であるということである。私は、DV は、パートナーを精神的および身体的に苦しんでいる状況に追い込むことだと考えているので、国の習慣や考えを尊重したうえで、DV の定義を決めればいいのかと思った。また、ルワンダでは、DV を家族の問題ではなく、地域の問題と考えることが興味深かった。もし DV の被害にあっていたとしても、同じ村の人が警察に通報してくれるので、被害が拡大することがないのではないかと考えた。地域の人と連

携をとって、被害をくいとめるという点は、日本も見習うべき点だと感じた。

参加者

- DV は世界的な問題であるが、日本人が定義している DV とルワンダ人が定義している DV に違いを感じた。日本は、近所の連携を密にして、DV の被害をとめるべきである。(Marie Paul)
- DV の解決策として、DV の被害がでるまえに、加害者に DV について認識させるようなプログラムがあると、被害が食い止められるのではないかと感じた。被害者、加害者ともカウンセリングを受けられるようなサービスも必要ではないかと思った。(Patria)
- 性的虐待が存在することにショックを受けた。また、海外でも DV の被害が大きいことに驚いた。国際的に DV の加害者を取り締まるような条例があるとよいと思った。(Emmanuel)



プレゼンテーションの様子

貧困問題と マイクロファイナンス

～誰が貧困者を救うのか？～

発表者：渡邊伶

テーマ選択理由

今回私が貧困とマイクロファイナンスをトピックに選択した理由はいくつかある。私が日本人ルワンダ人両者に問いかけてみたいことが今回のプレゼンに凝縮されている。それ故一貫したまとまりのないプレゼンとなってしまったことは、大いに反省すべき点ではあるが、日本人とルワンダ人の意見を聞くことができ有意義だった。以下に私がこのプレゼンに込めた想いを書き記す。

貧困は命に直接係わるため、優先して解決しなければならない問題である。しかし、世界には 12 億人も貧困ラインの人がいる。一方で食料を余らせている地域も多くある。それはなぜか？もちろん様々な要因があるが、一度自分たちで考えてほしかった。またプレゼン中に貧困削減方法の例としてマイクロファイナンスを紹介した。これは、ルワンダ人はマイクロファイナンスについてどれくらい知っているのか。貧困をビジネスで解決する手法についてどのように考えるのかを聞く目的があった。事前に調べたデータではマイクロファイナンスはアフリカではあまり展開しておらず、それが本当なのか、もし本当ならば、その理由も私自身知りたかった。

プレゼン概要

1. 貧困とは？

世界銀行の定義によれば、貧困とは一日 1.25 ドル未満で暮らしている人々のことを指す。その該当者は世界中に 12 億人いるという。貧困には絶対的貧困と相対的貧困の二種類がある。絶対的貧困とは、他地域や他人と比較せずに、定められた数値によってのみきまる貧困である。一方相対的貧困とは、ある地域やグループで比較した場合に決まる貧困の事である。世界銀行が定めた貧困は前者である。しかし、貧困とは世界銀行が定めたように数字で表せるものだけではない。経済学者アマルティアセンは貧困を **a capacity deprivation** と呼んだ。これは、貧困によって何かを達成しようとする潜在能力が奪われてしまっている状態のことをさす。

2. 貧困解決の事例、マイクロファイナンスの紹介

マイクロファイナンスとは、貧しい人に対して少額の融資を行うことである。基本的に一般の商業銀行は、貧しい人に対してお金は貸さない。これには「情報の非対称性」と「モラル・ハザード」という二点の問題が絡んでいる。銀行はお金の貸し出しを希望している人のことを良く知らない。例えばその人に返済能力があるのか、真面目にお金を返してくれる人なのかなど。これが「情報の非対称性」である。情報の非対称性により銀行員は、お金が返ってくるのか不安に思い、お金の貸し出しを渋る。そのためお金を借りたい人は、担保を出して、自分はお金を返せることを証明するのだ。銀行も担保を見て、初めてこの人には

返済能力があると分かりお金を貸すのである。また、もし銀行が少額のローンで少額の融資を行った場合、借りた側は次のように思う可能性がある。「借りている額が少ないから、たとえこのお金を返さなくても自分の損害は少ない。」そのように思い、借りた額を返さない人が現れる可能性がある。これを「モラル・ハザード」と呼ぶ。

マイクロファイナンスは、一般の商業銀行とは異なり担保のない貧困者をターゲットにしている。貧困者は少額の融資をしてもらい、その融資を元にビジネスをして貧困から脱出することを目的としている。マイクロファイナンスの総融資額は 2001 年から増加しており、2007 年には 2001 年の 9 倍になっている。また、特にアジアやラテンアメリカの国で独自のマイクロファイナンス機関が設立され、それぞれ貧困からの脱出に貢献している。

3. マイクロファイナンス成功の理由、グラミン銀行の事例より

なぜマイクロファイナンスが貧困から脱出させることができるのか。その仕組みを代表的なマイクロファイナンス機関である「グラミン銀行」を例にして説明した。私は今年グラミン銀行に二週間インターンをしてきたため、その経験もふまえて説明をした。

グラミン銀行には、ビジネスローン、住宅ローン、教育ローンの三つのローンが存在する。グラミン銀行のメンバーは 8276494 人で、住宅ローンを借りている人数は 696167 人、教育ローンを借りている人数は 52761 人で、総融資額は 943290 ドルである。これらの数字だけで素晴らしい

が一番驚くべきなのは返済率であり、その返済率は 97.28%である。

グラミン銀行がなぜこれほど成功したのか。三つの視点から説明した。「創設者ムハマド・ユヌス博士」「グループ制」「集会」である。ムハマド・ユヌス博士はグラミン銀行の創設者で経済学者である。彼の情熱がグラミン銀行を成功に導いた第一の要因である。二点目に、グループ制が挙げられる。グラミン銀行に加入するためには 5 人組のグループを作るか、入らなければならない。グループのメンバーはお互いに助け合うことが義務付けられている。このグループ制が担保の代わりとなっているのである。最後に集会である。グラミン銀行のメンバーは週に一度集会に行くことが義務付けられている。この集会では、グラミン銀行から行員が来て、融資の確認やグラミン哲学について教えられる。この集会は教育の場となっており、あまり教育を受けてこなかった人もいるメンバーにとって重要なものとなっている。実際に集会で、子供に教育を受けさせる重要さや、ルールを守る必要性を学んだものが多い。

ディスカッション概要

1. ディスカッションテーマ

- ①あなたの国にある貧困を話してください。
- ②貧困を解決する例であるマイクロファイナンスをあなたの国（日本またはルワンダ）に導入することはできますか？できる場合、その効果。できない場合、その理由は何ですか？
- ③マイクロファイナンス以外で貧困を解決する方法を考えて下さい。

2. ディスカッション結果

ルワンダにはマイクロファイナンス機関があり、ローカルなエリアにも浸透している。また、ルワンダでは家計状況によって分類され、その分類によっては学費が免除されたり、割り引かれたりする。一方、日本では、あまり自国の貧困者に対する支援がないのではないかという意見が出た。

貧困者を助ける場合、援助とビジネスどちらがふさわしいのかという議論では、多くのルワンダ人がビジネスと答えていた。その理由としてビジネスだと支援を受ける側とする側が平等である。またビジネスだと持続性があるというものが挙げられていた。

感想

発表者

プレゼンをした感触では、ルワンダ人があまりマイクロファイナンスについて知らない、よく分からないという表情をしていた。しかし後にリフレクションシートを見てみると、多くのルワンダ人がマイクロファイナンスを知っており、ルワンダでもマイクロファイナンス機関は多くあるという。また、ほとんどのルワンダ人が支援よりはビジネスで貧困を解決するべきだと言っていた。これらは私自身にとっても新たな発見であった。

参加者

- ・マイクロファイナンスはもっと日本とルワンダで導入されるべきだ。なぜなら少額のお金で、一日 1.25 ドル未満で暮らす人々の生活を改善することができるのだから。(Isac)
- ・グラミン銀行の高い返済率に驚いた。ま

た、グラミン銀行では集会も開かれ、貧困削減だけではなくコミュニティの形成にも役に立っていると思った。(星野)

日本の観光

発表者：藤内庄司

テーマ選択理由

2011年3月の東日本大震災以降落ちこんだ訪日観光客数も2013年初めて1000万人を突破した。現在、多くの雇用を生み出し、経済の起爆剤ともなり得る“観光業”は政府が最も力を入れる産業の一つでもある。またルワンダでは観光業は最も大きな外貨獲得手段の一つである。絶滅危惧種に指定されているゴリラを始め、豊かな自然と群を抜いた治安の良さが欧米の旅行客を魅了している。

しかし観光には他に大きな役目がある。それは国際的相互理解の第一歩となるということである。旅人がある国を訪れ、その国の人々との間にコミュニケーションが生まれる。そこで互いの人・国がもつ“コンテンツ”(=文化、風習ほか)が交換される。また観光地を訪れるとその土地の歴史や文化に触れることになる。観光はお互いの人・国を知り合うきっかけを作り出すのである。

ルワンダ人メンバーに日本のイメージを質問すると、このような答えが返ってくる。「テクノロジー」「広島・長崎」「福島」「発展」…彼らのイメージには「原爆が落とされ、原発事故があったが、テクノロジーで発展している国」といったものである。2014

年7月米旅行専門誌の調査で世界人気観光地ランキング1位に輝いた、日本を代表する古都京都は全くと言っていいほど知られていなかった。相互理解の第一歩となる「相手を、相手の国を知る」という点で日本のコンテンツを発信できていない反省があった。そこで観光・観光地という視点から日本の国土や文化を紹介しようという経緯に至った。

プレゼン要旨

まず観光の魅力と役割について説明した。次に日本各所の観光地を取り上げ、日本の国土、歴史、風習を始め、自然、気候、食などを紹介した。(東京・広島・長崎・大阪・京都・北海道・静岡・佐賀を取り上げた) 補足として観光業が平和の産業と言われる所以を説明し、最後に国際相互理解における観光の可能性を弊団体の活動を用いて説明した。

質問一覧 (ディスカッション内)

- ・東京や横浜はどんな街か？
- ・富士山のごみは誰が掃除しているのか？
- ・日本で一番の工業地帯はどこか？
- ・日本には多くの島(離島)があるが、どのように行くのか？
- ・日本はクリスチアンの国ではないのに、なぜクリスマスを祝うのか？
- ・モノレールはどうやって動いているのか？
- ・京都にはウシがいると聞いたが本当にいるのか？
- ・日本の料理はどんな味がするのか？
- ・タコはどんな味がするのか？
- ・クジラは見られるか？またどこで見ること

とができるのか？

アンケート実施結果

Q. 「“日本” と聞いたらどんなイメージを思い浮かべるか？ (1人3つ記入してください。)」

A. 「広島(原子爆弾)・長崎(原子爆弾)・福島(原発事故)・工業化の国・発展・仏陀の国・魚介類(シーフード)・明治(文明開花)・天皇(明治維新期の権力移行に関心があるそう)・電車・新幹線・箸」等

感想

参加者

- ・北海道の自然と京都の食べ物について気になった
- ・明治時代に天皇がパワーを持っていたということを初めて知った。
- ・観光地をみることで日本の歴史や文化について多くの情報を知ることが出来た。
- ・もっと日本について知りたい。

発表者

私が今回の学生会議を通して学んだ事がある。それはルワンダ人にとって時に私たちの何気ない日常が有名な観光地を訪れるよりインパクトがあるということである。特筆すべき例として日本の商店街が挙げられる。最近では地域観光活性化の手段として商店街が注目を浴びている。戦後、大量生産大量消費の波の中で日本人の生活に定着したスーパーマーケットが私たちにとって当たり前存在になっている。しかしアーケードの下に昔ながらの小さな商店が軒をつらね、地域住民のコミュニケーションの場としての役割も担っている商店街の様相が外国人にとっては目新しい風景であり、

新たな日本を発見する場になっている。私たちは日本をよく知ってもらおう、観光地を訪れて驚いてもらおう、日本を学んでもらおうという気持ちが前に出がちだが、ルワンダ人を始め海外の人々にとっては日本人が「当たり前」と思っていることにこそ、驚きや異文化を感じるのであろう。

来年冬日本で本会議を行う予定だが、ルワンダ人が日本に来ている間、日本人が当たり前だと感じていることに価値を見だし、ルワンダ人に“発展”や“原爆”以外の日本を紹介したい。そして日本への理解、関心を促進したい。今回の学生会議がその第一歩となれば幸いである。

社会の安定のために、 言論の自由を制限することは許されるか

発表者：丸茂思織

テーマ選択理由

近年ルワンダでは、ジェノサイド時にラジオや新聞等のメディアが悪用された過去の歴史を理由に、政府がプレスやメディアに介入することを正当化する流れが生じている。またそれに伴い、ジェノサイド以降報道や言論の自由を規制する法律が政府によって数多く制定されている。ジェノサイド発生当時に人々の唯一の情報源であったラジオが政府関係者によって掌握され、それが虐殺を助長することになってしまった過去と同様に、現在のルワンダにおいても

政府がメディアを掌握し、自らに都合の良い情報をのみを発信することが可能となる土壌を育みつつあるのではないかと私は危惧している。そこで、将来のルワンダを担うルワンダ人学生と共に「言論の自由」、「メディア法規制」という二つのキーワードから、ジェノサイドから20年が過ぎた今現在のルワンダのメディア状況や言論の自由について考える機会を設けたいと考えたのが本テーマ選択の理由である。

プレゼン概要

私は本プレゼンテーションを、有意義なディスカッションをするための導入という位置づけで行った。

前述したように、近年ルワンダでは、メディアやプレスを規制する法律が政府によって数多く制定されている。この理由として、ジェノサイド時にラジオや新聞を中心とするメディアがプロパガンダとして悪用され、虐殺を助長したという背景がある。実は、メディアが悪用された歴史を背景に政府がメディアに介入しようとする動きはルワンダに限ったことではない。日本でも第二次世界大戦時にメディアがプロパガンダとして利用され、また2007年には通称「納豆事件」と言われるメディアを悪用し、人々を惑わす事件が起こった。以後、日本もルワンダと同様に、政府のメディアへの介入が許容される法律の強化等がなされている。メディアが悪用された歴史を背景に、政府がメディア関連法の規制・強化を正当化しているという過程は日本もルワンダも共通であると言える。

しかし、日本とルワンダにおいては、憲法における言論・報道の自由についての位

置づけに大きな違いがある。日本では日本国憲法において表現の自由が保障されているのに対し、ルワンダでは2003年憲法によって「プレスと情報の自由は、国家によって認められ、保護される。」と定義されている。国家によって認められ保護されているという点において、ルワンダの自由というのは日本と比べると非常に制限的で、かつ政府の都合の良いような情報操作が憲法によって保障されているのではないかと私は危惧していた。また国境なき記者団の2014年度の報道の自由度ランキングによると、ルワンダの順位は180ヶ国中162位と、かなり自由度が低いことが分かる（ちなみに日本は59位である）。これらの現状をふまえたうえで、自国の言論・報道の自由についてどう考えるのか、ルワンダ人学生の意見を聞いた。

ディスカッション概要

プレゼンテーションの後「社会の安定のために、言論・報道の自由を制限することについてどう考えるか」という議題で、3つの小グループに分かれてディスカッションを行った。以下はその内容をまとめたものである。

グループ1

ジェノサイドという悲劇の歴史を繰り返さないためにも、政府はメディアに介入すべきである。ルワンダの言論・報道の自由は制限されていると言われていたが、ルワンダは他国とは違いジェノサイドという特殊な歴史がある。ルワンダはルワンダ独自の基準で「自由」を図るべきである。日本のような平和な国であれば言論の自由は憲法や法律等によって保障されているが、ルワ

ンダのようないまだ社会が不安定である国においては自由を制限してでも社会の安定を優先する必要がある。また言論の自由の定義もその国毎に異なる。その国の国民が、自国が自由か否かを決めるべきである。

グループ2

現在のルワンダにおいて、政府はメディアやジャーナリストをコントロールすべきである。なぜならルワンダのジャーナリストの給料は非常に低いため、彼らは権力や財力を持った人に容易になびいてしまう傾向にあるからである。もし政府が介入しなかったら、ジェノサイドのような悲劇がもう一度起こりかねない。

グループ3

報道の自由の概念は国の状況によって異なるため、それを尊重すべきである。なぜなら国の状況や地理、歴史によって人々の考え方も異なるからである。

感想

発表者

プレゼンテーションをする以前は「かなりデリケートなトピックである故に、ルワンダ人学生から本音を聞くことは難しいのではないかな」等の懸念があったが、そんな私の想像に反して議論がかなり白熱しており、その点に関しては非常に良かったと思う。「ジェノサイドを繰り返さないために言論の自由が政府によって制限されることは当然だ」という彼らの回答は想定内の結論ではあったが、「政府は積極的にメディアに介入すべきである」と彼らが強く主張していたことには正直驚いた。これは「社会の安定が最優先」という理由だけでなく、現在の政府が国民の大多数から信頼を得てい

るカガメ政権であることも大きな理由である
と私は思う。

また近年数多く制定されているルワンダ
のメディア規制法には、ジャーナリストの
在り方や義務を厳しく定めるような内容や、
ジェノサイド当時の政府の責任をジャーナ
リストに転嫁するような内容等が記述され
ていると聞いており、それらの点に関して
個人的に疑問を抱いていたが、それが「給
料の低いジャーナリストが財力・権力をも
った人になびかないよう、政府が介入・支
配する必要がある」という理由に基づいて
いるということを知ることができたのは新
たな発見だった。

ルワンダのもつジェノサイドの歴史等も
ふまえて、人々が信頼している政府がメデ
ィアに介入するというのは現在のルワンダ
においてベターな方法なのかもしれないが、
ルワンダが発展していくにつれてゆくゆく
は言論の自由を保障しながら社会の安定を
図る必要が出てくることだろうと私は思う。

「ジェノサイドを経験したルワンダは特殊
だから、ルワンダはルワンダ独自の基準で
自由を図る必要がある」というルワンダ人
学生たちの意見は最もだと思うが、他国と
比較し、自国の状況を客観的に捉えること
も重要であると思う。ずいぶん偉そう
なことを言ってしまうているが、多くのル
ワンダ人学生が政府の政策や政治に関して
非常に高い関心を持っている点については
驚かされた。発展途上国だからこそ、自分
たちが国の将来を担うという認識が強いの
かもしれない。私たち日本の学生もその点
に関しては見習わなければならないと思っ
た。(丸茂)

参加者

ルワンダにおいて、わたしたちの必要と
している言論・報道の自由は十分あると私
は思う。ルワンダの憲法において、言論・
報道の自由が国家によって規制されてい
るのは、ルワンダの歴史が理由である。私は
ルワンダの言論の自由は、たとえ日本であ
っても他国と比べられないと考える。なぜ
なら私たちのメディアの歴史は、ジェノサ
イドがあったがゆえに完全に他国と違うも
のだからである。以上の理由から、私は言
論の自由を規制する法律は良いものである
と考える。(Nadine)

日本ルワンダ学生会議 日本側の活動

発表者：品川正之介

テーマ選択理由

日本ルワンダ学生会議の理念は「相互理
解」であるはずなのに、本会議開催期間
以外の時期にお互いがどのような活動をして
いるのかは、恥ずかしながら十分に相互理
解がなされてこなかった現状がある。とい
うよりも、日本側に比べてルワンダ側は、本
会議開催中以外の時期に活発に活動してい
るとは思えなかった。これにはモチベー
ションの問題を含めいくつかの理由があるが、
一つに、これまでルワンダ側の日本ルワ
ンダ学生会議という団体は、インダンガム
チヨというルワンダ大学のダンスサークルの
内部に存在しており、活動内容や活動時間
が限られていた現状があった。しかし、今

年からルワンダ側の組織構造が大きく変わり、ルワンダ側の日本ルワンダ学生会議はインダンガムチョから独立し、ルワンダ大学の全ての生徒に活動の門戸が開かれ、加えて今後インカレ化（団体構成員の他大学化）が進むこととなった。このような状況を踏まえ、今後日本ルワンダ学生会議、特にルワンダ側での活動がより活発になり発展するヒントを提供する意味で、日本ルワンダ学生会議日本側の本会議期間以外での活動内容を紹介することとした。



熱心に話を聞くルワンダメンバー



プレゼンテーションの様子

プレゼン概要

日本ルワンダ学生会議の活動は、何も本会議だけではない。日本側は、次のような活動を行っている。①毎週1度のミーティング②月に2回の勉強会③新メンバー勧誘・新入生歓迎イベント④勉強合宿⑤アフリカ・ルワンダに関する各種イベント参加⑥メディア（時には新聞やテレビ）やSNSを利用したアフリカ・ルワンダに関する情報発信⑦本会議の企画・立案⑧本会議訪問地下見⑨年2回の本会議報告会⑩報告書・活動紹介ドキュメンタリーの作成⑪助成金確保、等々。日本側は、本会議期間中以外にも様々な活動を行っているが、これは全て、メンバー個々人の高いモチベーションによって行われている。

ディスカッション概要

ディスカッションテーマは①何故日本ルワンダ学生会議に参加したのか、②今の活動に対するモチベーションは何か、この二つに設定した。というのも、今後ルワンダ側が活動を拡大するには、メンバー個々人のモチベーションを一度皆で話し合い互いによく理解する必要があると思われたからである。以下は一つのグループの議論の抜粋。

藤内「この団体に加入した理由は2つあった。1つ目は、元々アフリカに興味があったこと。アフリカは様々な可能性がある一方で日本においてアフリカのことを知れる機会は少ない。自分はこの日本ルワンダ学生会議を、ルワンダという国を通じて、アフリカをもっと知りたいと考えている。2つ目は観光分野に関係する。ルワンダはグ

リーントゥリズムの分野で非常に強いと考えている。もしより多くの人がルワンダを訪れると、きっと驚くと思う。自分ももっとルワンダ観光の可能性を見つきたい。」

Rosette 「理由は3つあって、1つめは、日本ルワンダ学生会議を知ったとき、純粋に興味を持ち入りたと思ったから。2つ目は、ルワンダは発展途上国で、日本は先進国であって、私達は日本からたくさんものを学べると思ったし、発展、教育、技術、日本の様々なことに興味を湧いたから。3つ目は、外国の若者と交流して文化や考え方を知りたかったから。日本とルワンダ、違う大陸の国の若者が交流することは、とてもエキサイティングだと思った。」

Appolinaire 「日本ルワンダ学生会議に入った理由だが、はじめに、団体に入る前から日本のことに興味があり、当時は日本に対する知識が少なかったので団体に入ることで自分の知識を深められると思った。次に、日本の文化や、生活様式、農業などに興味があった。日本は島国だけど、第二次世界大戦後、特に2度も原爆の被害を受けながら、復興したことに興味を持った。というのも、ルワンダもジェノサイドという悲劇を経験して、復興に向けて今まさに努力しているところだから。日本のビジネスやビジネスマンに関しても興味がある。あと教育システムに関しても知りたい。教育は何事にも大切であるからね。日本がどの様に高い教育水準を手に入れたのか、学びたい。」

渡邊 「理由はシンプルだった。ルワンダに行ったらルワンダの発展を見て、ルワンダ人

に会って話したかった。高校生の時ルワンダのジェノサイドについて知ったが、同時にルワンダが発展していることも知っていた。日本はすでに先進国で、日本が発展している時代に自分は生まれていなかった。発展途上国を自分の目で見てみたかった。ルワンダが今急速に発展している様子は、ほかの発展途上国のモデルにもなるだろうし、ルワンダの発展をこの目で見て学びたかった。」

藤内 「この団体にいると、ルワンダ人から日本の発展について色々聞かれるから、自国の発展について改めて学ぶ良い機会でもある。この点は自分たちにとってとても有益だとも思うね。」

Fidele 「アレックス（前ルワンダ側代表）という人物が電話してきて、日本ルワンダ学生会議のことを手伝ってくれといわれたことがきっかけだった（一同笑）。団体で活動するモチベーションは、まず自分の視野を広められること。具体的には、もし日本にいけば様々なことを見られて、日本の文化に触れられる。自分はルワンダの文化はわからないけど、日本ルワンダ学生会議は、自分の視野を広げてくれる。加えて、自分と同じ専門の学生に会ったり、学部に行ったらどうやって勉強しているのか見てみたい。そしてそれをルワンダのものと比較してみたい。次に、ジェノサイドの後、ルワンダの人々は心に傷を負ったけど、日本の人々は原爆を経験したあとの様な道をたどったのか知りたい。同時にどの様に発展したのかも知りたい。日本人の日常生活ものぞいてみたいね。日々の生活から何か

学べることもあると思う。特に大学のキャンパス内を見てみたいな。」

藤内「日本のことを、特に発展の面に關して皆興味を持ってきていて知りたがっていたけど、知った情報や知識を今後自分のためや国のためにどう活用していく？」

Appolinaire「まずは、自分自身を成長させることなしに国を發展させることはできないから、まずは自分の知識や能力を高めたいね。どう活用させるかだけど、難しいね。日本の良い面をうまく取り込んで、コピーすることかな。特に、ルワンダ人は日本のことを良く知らない人が多いから、多くのルワンダ人に日本の良い面を広めることは意義があると思う。」

Fidele「日本の親がどうやって子供を育て教育しているか気になるね。子供がより良い未来を迎えられるために、どうやって親が教育しているのか知りたい。君の親、おじいさんがどう子供を教育してきたのか、また君たちがどうやって子供を育てるのかも気になるね。」

藤内「話をまとめると、ルワンダメンバーの皆は、日本ルワンダ学生会議を、『学びの場』として捉えているということかな？」

Fidele「そうだね。短期的な結果を求めるといふよりも、長期的に自分のためになるような多くを学べる場だと考えているよ。あとはやはり、日本の友達ができて、友情が深められること、ことはとても素晴らしいことだよ。」

感想

発表者

団体組織の構造が大きく変わり、また新メンバーも多い現在のルワンダ側の日本ルワンダ学生会議は、新たなスタートをきったばかりである。「相互理解」の理念の下、よりよい活動が継続していくように、今後ともできる限りの彼らのことをサポートしていきたいと思う。

前回（2011年）渡航した時と今回の渡航とで、ルワンダ側メンバーの中で大きな意識の変化があった。以前ルワンダにて、団体の将来の方向性について議論した際、彼らは「日本ルワンダ学生会議として、より社会に貢献するような活動（貧しい村の支援や援助）を始めたい、仮に日本に渡航できるメンバーが減ったとしても。」というようなことを述べていた。私は彼らのそのような意見にかなりショックを受けたりしたのだが、今回の渡航でそのような意見は一言も聞かれず、むしろ「学生交流の活動に力を入れたい、日本のことを学びたい」といった意見を多く聞いたし、各訪問先で、ルワンダ人が団体のことを説明する機会があったのだが、向こうの代表のナディーン以外の皆が団体理念や活動内容（＝学術・文化交流）の趣旨をよく理解した上で団体紹介をしており、とても頼もしかった。

これには大きく2つの理由があると考えている。1つ目は、前年の日本開催の本会議の際に、日本がいかにかアフリカやルワンダに対して偏見やネガティブな印象を持っているかということ、具体的なデータを示しながら紹介したことで、ルワンダ人学生の中で「相互理解」を理念に学術・文化交流をする私たちの活動の意義がこれまで

以上に強く理解されたことである。日本の大学生 70 名を対象にしたアンケート調査で、「アフリカ＝貧困・サバンナ・未開」「ルワンダ＝ジェノサイド・紛争・ホテルルワンダ」といった様なイメージを日本の大学生が持っていることを知り、彼らは衝撃を受けた。そして自国の誇りの回復と、国の発展のために日本とルワンダの関係性を強化する必要性を理解したルワンダ側メンバーは、私たちの活動に対するモチベーションを以前より高めたのだと思う。

2 つ目に、ルワンダ国内で、国民の自助自立精神が高まっている点があると思われる。近年ルワンダは、隣国のコンゴの反政府武装勢力を支援していると国際社会から疑惑を持たれ、資金援助の凍結を受けた。援助が途切れてからルワンダはアガチロ基金というものを立ち上げており、この基金は、ルワンダの資金的自立の実現を意図しルワンダ人が任意の献金を基金に行うことで国の発展を後押しするためのものである。この援助打ち切りとアガチロ基金の設立以降、カガメ大統領始め政府が、以前にまして自立や自助努力を強調しているため、ルワンダ側メンバーが支援や援助といったような活動をしたいと以前より口にしなくなったのだと思われる。

この 2 点が、彼らの意識が変わった要因だと考えられるが、特に個人的には後者が興味深く思っている。良い意味でも、悪い意味でも、ルワンダ人はトップダウンの指示や命令(?)に従いやすい性質を持っているのだが、この一件はそれが如実に現れたものであると思う。これは勝手な印象かもしれないが、日本ルワンダ学生会議のルワンダ側の組織を見ていると、まるで“ミ

ニ・ルワンダ”を見ているようで面白い。例えば、リーダーが変わることで組織がガラッと変わったり（良いリーダーだと安定するが、悪いリーダーだと大変なことになる等）、役職につかないメンバーや年下のメンバーの発言権が弱いことなどである。この様なことを含めて、日本ルワンダ学生会議での活動は私に色々な学びを与えてくれる。

参加者

- ・日本側の国内活動を頑張っていることを理解できた。ルワンダ人メンバーは、まだまだ日本に行きたいということが活動のモチベーションになっている人多いけれども、意識を改革して更に活動の質を高めていかないといけないと思う。日本側メンバーが活動の質を高めたり、メンバーのモチベーションを高めるために用いている方法をぜひ学んで、ルワンダ側も活用すべきだと思う。
- ・ルワンダ側の活動を充実させていきたい。たとえば JICA と連携してルワンダにてイベントを開催したり、何かしらのイベントに参加したい。日本側は広報に力を入れてテレビに少しだけ紹介されたり、新聞に取り上げられたりしているけれど、団体を大きくするためにもルワンダ側ももう少し国内での知名度向上に努めたい。また日本ルワンダ学生会議をよりオープンにして、大学内・他大学からのメンバーを増やしたい。」

National Dialogue and Imihigo

発表者：Mugema Emmanuel
(訳 品川正之介)

プレゼン概要

ルワンダでは、National Dialogue Council (国民対話会議) というものが1年に1回開かれる。これは、2003年より始まった取り組みで、大統領はじめ、各省大臣、地方自治長、在外大使、各政党代表、その他地域代表等々、合計1000名以上の各代表者がこの会議に出席する。会議の議題は、主に国の発展や国民の団結に関する様々なものである。例えば、2013年度会議のテーマは“The Rwandan spirit: Foundation for sustainable development (ルワンダ人の精神：持続可能な発展の基礎) ”、2012年度会議のテーマは“Agaciro: Aiming for self-reliance (自信と尊厳：自助自立型の発展を目指して)” というものであった。会議は、代表者のプレゼンテーションとそれに続く議論で構成される。

この国民対話会議の中で重要なものが、Imihigo (イミヒゴ) である。イミヒゴとは、事業契約とも訳せるもので、会議において大臣、地方自治長、在外大使等ら政府関係者は、自分の職務に関する1年間単位の業績目標を表明する。この業績目標は、1年後に実際に達成されたか厳しく審査される。目標を達成できた者は表彰され、達成できなかった者は最悪の場合、失職や左遷となる。会議・イミヒゴの様子はテレビやラジオ、インターネットで全て国民に公開され、

またメールやFacebookやTwitterなどの各種 SNS を通じて国民がコメントも行える。この会議やイミヒゴの仕組みは、各プレイヤーに徹底した効率性・アカウントビリティを求め、また各プレイヤー間の競争も促進するので、国の発展プログラム (経済発展計画の Vision2020 や経済発展と貧困削減戦略の EDPRS) の迅速で質の高い実行に大きく寄与するものである。

イミヒゴは、実は新しい取り組みではなく、ルワンダの文化や伝統に基づいたものである。これまで政府は、ガチャチャ (草の根裁判制度)、ウムガンダ (公共奉仕活動)、ギリンカ (貧しい家に牛を送る仕組み) など、植民地以前から存在するルワンダの伝統的なしくみを現代の状況に適応させながら蘇らせてきたが、イミヒゴもその1つである。昔も地域のリーダーやチーフが、イミヒゴを行っていた。ちなみに、イミヒゴの元々の言葉の意味は「実行への誓い・他者との競争」というものである。



Imihigoの様子

質疑応答

Q. 「毎年会議の名前とテーマを決定するのか。」

A. 「毎年、その年の状況に合わせて会議の名前とテーマを設定する。」

Q. 「プレゼンの中で **Rwandan spirit** (ルワンダ人の精神) というものが出てきたが、それはズバリどのようなものだと考えるか。」

A. 「私たちは、私たち自身の価値観、そして同時にタブーも持っている。例えば、いつも誠実であるべき、決して人を騙してはいけない、我慢強くあるべき、こういうものがあげられる。余談だが、プレゼンであったようにイミヒゴは私達の文化や伝統を基にしているが、家族の中でイミヒゴが実践されたりもする。例えば、お父さんはいついつまでに家の部屋を増築するだとか、子供であれば、どのくらい成績を向上させるだとかのイミヒゴを表明し、1年後に振り返りをする。イミヒゴは発展への大きなモチベーションを喚起する。」

Q. 「1000名もの人が参加する会議とイミヒゴ全てをテレビやラジオで放送するとなると、かなりの時間がかかると思うが。」

A. 「まさにその通り。会議とイミヒゴで3日間かかる。」

感想

参加者

日本人は「学び」に関して、欧米諸国から学ぼうという意識は大変強いが、ルワンダはじめアフリカ諸国から何かを学ぼうと

いう姿勢が欠如していると常々感じていた。政治でも経済でも社会保障でも、アメリカだドイツだスウェーデンだ、あーだこーだとよく聞くものの、「アフリカから学ぼう！」と聞くことは、稀である。確かにアフリカはまだまだ発展途上の地域かもしれないが、彼らが長年紡いできた歴史・文化・生活の中の知恵には、私たち日本人や日本社会に何か有益なものが絶対にあるはずだと強く思っていた。ということで、今回の渡航ではルワンダ“を”学ぶだけでなく、ルワンダ“から”何か学びたいとの思いを以前より強く持ち本会議に臨んでいたのだが、まさしくそれが、学生会議で紹介されたこのイミヒゴであると思った。

イミヒゴから日本が学ぶべき点は多い。日本では、政党や政治家個人がマニフェストや公約を掲げはするものの、その実際の結果がしっかりと審査・評価されることは珍しい。(余談だが、普段の政治の現場を見ても、第2次世界大戦を見ても、近年の原発事故を見ても、日本人はどうやら結果や問題の責任の所在をはっきりさせ、また責任をとらせることが一部苦手な民族のようにも思われる。) イミヒゴの徹底した効率性・アカウンタビリティ・競争の原理は、日本社会、特に政治の分野で適応してみると、なかなか面白いのではないかと思う。

もう一点、カガメ大統領が、イミヒゴやウムガンダはじめ多くのルワンダの伝統的な仕組みを現代版に蘇らせ運用していることが面白い。植民地化以前(=ツチ・フツという“民族”が分断される前)に適応されていた仕組みを現代に適応することは、国民としての一体感・団結を深める作用もあるだろうし、外国の先進的な制度だけで

国の発展を主導するのではなく、ルワンダ独自の方法で国を効率的に発展させる作用もあると考えられ、とても興味深かった。(品川)

Economy of Rwanda

発表者：Muhumuza Isaac
(訳 渡邊伶)

プレゼン概要

1. ジェノサイド前の経済

多額の援助と比較的好ましい条件の貿易条約によって、一人当たりの収入は増加し、低いインフレ率を保っていた。しかし、1980年代にコーヒーの値段が急激に下落し、成長が停滞した。1973年から1980年の平均経済成長率 6.5%と比較して1980年から1985年の経済成長率は、年間に平均して2.9%で、1986年から1990年の間は停滞した。

2. ジェノサイド後の経済

1994年のジェノサイドがルワンダのもろかった経済を破壊し、多くの国民、特に女性が貧困に陥った。それが個人の投資を受けられる機会をさらに奪っていった。しかしルワンダは安定的で再生したかのような目を見張るほどの経済成長をした。1998年6月、ルワンダは Enhanced Structural Adjustment Facility にサインした。またルワンダは ambitious privatization program も世界銀行の助けによって始めた。

3. 現在の経済とこれからの見込み

ルワンダは2006年に高度経済成長期に入った。次の年からも8%の経済成長をしていて、アフリカで最も速く経済成長している国の一つである。この持続的な経済成長が、貧困を減らしている。具体的には、2006年から2011年の間にルワンダで貧困生活をおくっている人の割合が57%から45%に減少した。

4. コーヒーと農業と畜産業

コーヒーはルワンダの主要輸出作物の一つである。ルワンダは長い間外貨獲得をコーヒーに頼っていた。1989年のコーヒーの値段の下落が購買力の大幅な低下を招き、国内の緊張も高まった。

ルワンダにおいて、牛やヤギや羊、豚、鶏、ウサギなどの家畜が増加した。キガリ付近ではいくつかの農場はあったが、生産システムはほとんどが伝統的のものであった。土地と水の不足や不十分で低品質の餌が感染症を引き起こしている。獣医の仕事も制限されている。釣りは国の湖で行われているが、在庫は減少しており、食用の魚は国の経済を復活させるために輸入される。

ルワンダの鉱山産業は重要で、年間に930000000ドルを生み出している。天然の鉱山は、スズ石、鉄マンガン重石、サファイア、金、コルタンを含んでいて、それらは電子製品や携帯電話などの通信端末に使われる。1983年からはメタン製品を作り始めた。しかし Bralirwa Brewery のみで使われていた。

5. エネルギーと電気

ルワンダは21世紀の国々において、もの

すごい電気の進化を遂げた国である。とても多くの新しいエリアが経済基盤の増加によって電気を使えるようになった。

森林の減少によって、結果的に、ルワンダ人は、料理や物を温めるために、石炭以外の石油燃料を使うようになった。豊富な山資源と湖があるため、水力発電ができる可能性は十分ある。ルワンダはブルンジやコンゴと一緒に共同水力発電事業を通して、それらの自然資源を利用している。

ルワンダの製造セクターは、うち向け消費の代わりである輸入作物によって占領されている。多くの事業がビールやソフトドリンク、煙草、鋏、手押し車、石鹸などを作っている。

6. 観光とサービス

銀行は貸し出しを減らし、外国の援助や投資も減ったため、ルワンダのサービスセクターは、2000年代の不況の間苦しんでいた。サービスセクターは経済出力によって、2010年に復活し国の最も大きなセクターとなり、国のGDPの43.6%をサービス業が占めるようになった。サービス業とは、銀行や卸売りと小売業、ホテルやレストランなどを含む。

観光業は最も早い経済成長のリソースの一つで、2011年には国の外貨獲得手段となった。ジェノサイドがあったにもかかわらず、ルワンダは安全な場所との評価を受けた。

2011年の1月から7月の間に、405,801人がルワンダを訪れた。そのうち16%はアフリカ以外から来た人である。観光業の収入は2011年の1月から6月の間で1156000000ドルであった

7. 経済成長を阻害する要因

ルワンダの経済成長を阻害する要因として次の5つが挙げられる。

- ・ 貧困の連鎖
- ・ 国際的で政治的な要因
- ・ 国際的な貿易制約
- ・ 国際的な金融制約
- ・ 社会的で文化的要因

ディスカッション概要

テーマ「どのようにすればルワンダに存在する経済成長を阻害する制約を取り除くことができるのか。」

本議論では、日本がなぜ経済成長をとげることができたのかを話しながら、ルワンダの場合との相違点を議論していった。

日本が経済成長を遂げた理由のひとつに教育が挙げられる。国民全員が質の良い教育を受けてきたからこそ、大量生産ができ、経済成長につながったのである。しかしルワンダの場合、どんなに良い教育を受けたとしても、そもそも仕事がないという。また、言語の問題もあり、他国へ仕事を求めて行くのも難しい状況だという。これは子供の数が多いのが原因の一つのようだ。日本の場合、仕事がなく失業者が多い時は、政府が公共事業などを始め、雇用を増やす政策をする。しかしルワンダでは政府が公共政策を行うことはないようだ。

感想

参加者

ルワンダの経済に関する今回のプレゼンを聞きながら、経済発展するためには様々な要素が絡んでいると思った。例えば地理は重要な要因である。その土地で何が採れ

るのか、農業には向いているのか、海があって、輸出入しやすいのかなどは経済発展に大きくかかわる。ルワンダは日本が発展した理由を知りたい。確かに日本が経済発展を遂げた理由を学ぶと、ルワンダにとっても参考になることは多いと思う。しかし、地理的要因、政治的要因、また時代も違い、日本の経済発展した理由をそのままルワンダに当てはめるのは難しいのではないかと感じた。(渡邊)

History of Rwanda

発表者：Geoffy
(訳 星野真希)

1. プレゼン概要

プレゼンターは、ルワンダの歴史を4つのパートにわけ、1.植民地以前の歴史 2.植民地時代のルワンダ 3.ルワンダ独立後からジェノサイドまで 4.ジェノサイド後のルワンダについて説明した。

1. 植民地以前のルワンダの歴史

ルワンダの国の概要（国土面積など）について説明した後、最初の王 Ngoma Ijana が他の地域（ウガンダ、コンゴなど）を併合し、国の面積を拡大していったこと。また、Kigeli iv 王が、国の機能をつくり、ルワンダ国中に広めたことなど、王の偉業について説明した。

2. 植民地時代のルワンダ

OSCAR BOVMAN と ADOLF VON GOTZEN によって、ドイツがルワンダの植

民地化をすすめる過程について説明した。

1897 年に、ルワンダは king kigeli iv rwabugiri 王がドイツ人を受け入れた後、ルワンダはドイツの植民地になった。ルワンダはドイツの植民地だったが、のちにベルギーの植民地になった。第一次世界大戦後の 1919 年のベルリン会議で、ルワンダはベルギーの植民地になることが決まった。1930 年代から、ルワンダではヨーロッパから独立を求める声が上がったが、1962 年のルワンダの最初の大統領である kayibanda がリーダーシップをとるまで独立することはなかった。

3. ルワンダ独立後からジェノサイドまで

ルワンダが独立した後、政治体制が整ってなく、脆弱なこともあって、1965 年から 1990 年代に亡命する人がたくさんいた。亡命したルワンダ人は、ルワンダに帰国することを望んだが、その主張はききいれられなかった。ジェノサイド時には、都市が破壊され、ルワンダ人がルワンダ人を殺しあった。プレゼンターは写真を見せながら、ジェノサイド時の状況を説明した。1994 年 4 月、ルワンダから亡命した人達は、ジェノサイドを止めようと立ち上がり、H.E やいくつかの軍隊がジェノサイドを止めた。

4. ジェノサイド後のルワンダ

ジェノサイドによって百万人以上のルワンダ人が亡くなった。ジェノサイドの要因はいくつかあるが、1.他国の介入（ジェノサイドのとき武器を提供したなど）2.読み書きができない人が多く、人々の情報を手に入れる手段が少なかった 3.貧困と悪い政治システムに問題があるとプレゼンターは

述べた。また、ジェノサイドの後、新しい政治体制が敷かれ、国歌もつくられた。ルワンダの国旗は、仕事の発展や人々の幸福など様々な意味をこめられてつくられたものである。

質疑応答

Q. 「ベルギーに対して、憎しみに近い感情を持つのはわかるが、ドイツに関してはどうか。」

A. 「ドイツはベルギーよりかはまし。ドイツが非難されるのは、植民地支配期に、ルワンダの土地を減らしたこと(キブ湖の一部を失う)による。ドイツは、植民地支配期に教育、健康、インフラなどを普及させた面がある。もちろんそれらはルワンダのためというより、植民地支配のためのものだが、評価する面も無くはない。」

Q. 「1962年代の独立運動はよく知られているが、1930年代から続いていた、独立運動、独立への活動とは何か。」

A. 「ベルギー支配になってから、人々の間でサボタージュやストライキが起っていた。」

Q. 「フランスとの関係が深くなったのはいつからか。何故か。フランス側の利益は何か。」

A. 「ルワンダは独立後に、国際的な関係を築きたかったため、フランスを選んだ。kayibanda以降フランスとの関係深くなる。フランスの利益は、市場拡大とカトリックの普及にあった。市場拡大に関しては、フランスは、製品と武器を海外に売って利益を得たかった。」

感想

参加者

ルワンダの歴史ということで、植民地時代やジェノサイドだけに焦点をあてたものでなく、植民地時代以前の歴史が紹介されていたことが興味深かった。植民地以前の歴史は、本や学校の授業などで紹介される機会が少ないので、そういった歴史について知識を深められたのはよかった。また、質疑応答で、ドイツが評価されている部分もあったことに驚いた。植民地化=悪というイメージだったが、植民地化によって教育やインフラを普及させ、国の発展に導くという側面もあることを知った。植民地時代におこなった国の政策によって、ルワンダの人々のその国に抱く感情が、今でも影響を及ぼしていることが理解できた。(星野)

Biogas Program

発表者：Fidèle Ngirinshuti

(訳 丸茂思織)

テーマ選択理由

ルワンダの Biogas Program をプレゼンテーショントピックに選んだ理由は、私自身が自宅でバイオガスシステムを活用しており、私たちの実生活に根差した政府の取り組みを日本人に紹介したいと考えたからである。

プレゼン概要

1. Biogas Program とは何か

現在ルワンダでは排泄物を原料とするバイオガス(メタンガス)生成設備の設置が

着々と進められており、またそれらのガスは主に料理をする際やガス灯等に利用されている。バイオガス導入前のルワンダは、調理時および照明に使用する燃料（木等）が高額なことによりそれら燃料の利用が制限されてしまうという問題や、伝統的な調理方法により引き起こされる空気汚染問題、不十分な衛生設備など、多くの人々に身近な問題を抱えていた。これらの問題の主な原因となっていた従来のエネルギーに変わってバイオガスを導入することで、上記の問題を解決するだけでなく、家計収入の増加や男女平等、健康改善や環境問題等の改善にも貢献できるとしている。

そもそも The National Domestic Biogas Program とは The Ministry of infrastructure (ルワンダ政府の省) と The Netherlands Development Organization (1965 年にオランダで設立された非営利の国際的開発組織) によって、2007 年 5 月より開始されたプログラムであり、国内のバイオガス部門を開発・展開しながら天然資源搾取を軽減することを主な目的としている。また近年のルワンダでは、毎年 170000 人も若者が十分な技能や資格を習得しないまま職に就いていると言われており、そんな彼らが景気循環の一役を担う機会は非常に制限されている。以上の現状を踏まえ、ルワンダにおける Biogas Program では雇用創出と中小企業への投資に特に力を入れている。

2. Biogas Program の仕組みと取り組み、またその課題

バイオガス生成の大まかな仕組みとしては、人や動物の排泄物をダイジェスター（発

酵槽）に投入し、ダイジェスター内でバクテリアを使用し排泄物を発酵させることでガスを発生させる。

ルワンダにおけるバイオガスを活用した取り組みは、1998 年より刑務所にて開始され、現在は学校等の他の施設においても使用が拡大されている。また今後は病院での使用も検討されている。現在は地方に住居を構える 4500 世帯と 11 もの刑務所にバイオガス施設が設置され、そこで生成されたバイオガスが利用されている。またルワンダでは、バイオガス施設を設置する際に「1 人または 1 つの家庭に対し、家または家の近くに最低 2 頭の牛を所有していること」を条件として設けている。この理由としては、個人や一家庭でバイオガスプログラムを導入する際には牛の排泄物を利用するケースが多く、牛 2 頭分の排泄物の量から十分なバイオガスを生成することが可能であることがその理由である。一個人一家庭レベルで人間の排泄物を利用しない理由としては、公衆衛生の問題や排泄物の量の問題がある。

数多くのメリットがあるバイオガスプログラムだが、課題も多く存在する。1 点目は普及率の問題である。バイオガス施設の設置費用が高額なことから、現在のルワンダにおいても本プログラムを導入している家庭はいまだ少ない。またキガリなどの都心部では設備を設置する土地・牛を飼育する土地がないため、ほとんど利用されていない。

3. バイオガスプログラムの成果

バイオガスを導入することで、ルワンダでは以下のような成果を得ている。

①調理時のクリーンエネルギーに

料理人が長時間煙にさらされる危険が減少し、また従来よりも迅速な調理が可能になった。

②照明のクリーンエネルギーに

地方在住の子供たちが学校のノートの復習をする際の照明等に活用されている。

③火を起こすための木材の採集してくる必要がなくなることで女性や子供たちの仕事量、また燃料となる木材を購入する出費が軽減

④森林伐採率の減少

⑤地方における雇用創出

質疑応答

1. 料理をする際に、どのような道具を使っているのか

日本では主に電気やガスを使用しているのに対し、ルワンダでは電気やガス、またチャコと言われる木製のポットのようなものや、火を直接使う等して料理を行っている。

2. その道具は環境にどのような影響をもたらしているのか

日本のガスや電気はそこまで環境に悪影響がないのに対し、ルワンダの伝統的な手法である直接火を起こす料理方法は森林伐採や煙による空気汚染など、環境への悪影響が多くある。しかしルワンダでは電気代が非常に高額であるため、都心部においても料理をする際に電気を活用している家庭は多くない。地熱発電や風力発電、太陽光発電はルワンダにおいても活用されているが、それだけでは不十分であるというのが現状である。

感想

参加者

・本プレゼンテーションを聴くまでバイオガスプログラムというものを全く知らなかった私にとって、非常に興味深いトピックであった。新しいシステムやものを1から導入しようとするのではなく、従来から地方に暮らす人々が数多く所有していた「牛」に目を付けたのが非常に効率的で興味深いと思った。本プログラムは都心部での使用が課題として挙げられるが、地方や農村部で効果的なシステムを、あえて都心部でも無理やり導入しようとせず、都心部は都心部でまた別に有効なシステムを導入すべきではないかと思った。(丸茂)

・ルワンダ人は自国の環境問題について、日本人より非常に高い意識をもっていると感じた。日頃から都心に住んでいる日本人は環境問題について考える機会はなかなかない。しかしルワンダ人にとってそれは非常に身近な問題である。実際に環境問題は今この時も深刻化し続けている。ルワンダ人のように、自分事として環境問題を捉える姿勢を持つようにしたい。(藤内)

・私にとってこのトピックは非常に身近なものであった。私は環境保護のためにもバイオガスプログラムの導入には賛成である。しかし、バイオガスプログラムが導入しづらい環境にある都心部でも、いまなお環境に悪影響を及ぼす料理方法を採用する家庭が多くあり、それが大きな課題であると感じている。(Marie Paule Isabane)

第四章

参加者感想

品川正之介 早稲田大学教育学部 5年.....	76
藤内庄司 横浜市立大学国際総合科学部 2年.....	85
星野真希 学習院女子大学国際文化交流学部 4年.....	88
丸茂思織 日本大学法学部 3年.....	91
渡邊伶 早稲田大学教育学部 2年.....	94

表裏一体

早稲田大学教育学部 5年

品川正之介

■2回目のルワンダ

自分の目でルワンダを見たいという、
純粹な好奇心に強く動かされた3年前。
初めての海外ということもあり、ルワ
ンダへの渡航は、期待と興奮に溢れた
「異世界」への旅であった。あれから3
年。日本開催の本会議でルワンダ人と
の交流を重ね、ルワンダに関する知識
も深めた今では、以前よりルワンダは
心理的にぐっと近くなっていた。



過去の渡航では、とにかくルワンダ
を体験したいという漠然とした気持ちで参加した。しかし、今回の渡航には、2つの確固たる目的があった。1つ目は、ルワンダのポジティブな面をできる限り知り、そして写真や映像に残すこと。2つ目は、ルワンダ「を」学ぶだけでなく、ルワンダ「から」日本が学べるものを見つけること。全19日のスケジュールを前に、これら目的を胸に秘めた自分の中には、ただ静かな緊張が在った。

■日本人のアフリカ観

2つの目的を設定したのは、日本人のアフリカ・ルワンダ観を変えたかったからだ。今回の渡航は、その為の材料集めの旅だったとも言える。この団体に加入してから、日本人のアフリカ観、つまりアフリカに対する偏見に満ちた眼差しと固定化されたネガティブな印象に、憤りと問題意識を感じるようになっていた。アフリカといえば、貧困・紛争・エイズ・援助の対象、更に未開なんて言う人もいる有様で、ルワンダに関しても同様、ジェノサイド・民族紛争²・貧困といったイメージを持つ人は多い³。ルワンダはじめアフリカ諸国には、政治、経済、社会上の様々な問題が多いのも確かではあるが、それ同等もしくはそれ以上のポジティブな面がある。最近ルワンダがテレビで紹介されることも多く、少しずつ偏見やネガティブなイメージは解消されてはきているが、現状はまだである。私は、この日本人のアフリカ観・ルワンダ観を変えたかった。それはアフリカ・ルワンダのため、というよりも寧ろ日本のために変えたかった。

日本のためとはどういうことか。まず経済的な点が挙げられる。近年アフリカの注目度は経済的な面を中心に高まっており、中国、韓国、そして歴史的に結び付きの強い西洋諸

国などは、ビジネス等経済的な関係性を深めている。一方で、日本はかなり遅れをとっている。たしかに、地理的な距離や様々なリスクを考えれば致し方ない面もあるが、今後の更なる経済成長や人口増加⁴（≒市場の拡大）が見込まれるアフリカ市場に日本が出遅れることは、後々の痛手になるのではないかと私は、この様な出遅れに、日本人のアフリカに対する偏見やネガティブな印象、もしくは無関心が少なからず影響していると考えている⁵。次に、偏見やネガティブな印象が影響してか、日本人はアフリカから何かを学ぼうという意識が欠如している。政治でも経済でも社会保障でも、アメリカだドイツだスウェーデンだ、あーだこーだとよく聞くものの、「アフリカから学ぼう！」と聞くことは、稀である。これは、アフリカを援助・支援の対象（≒日本が何かを教えてあげる対象）と見ているからであろうか。確かにアフリカ・ルワンダはまだまだ発展途上の地域かもしれないが、彼らが長年紡いできた歴史・文化・生活の中の知恵には、私たち日本人や日本社会に何か有益なものが絶対にあるはずだ。これを見過ごすのは、もったいない。

このような考えに加えて「日本人のルワンダ・アフリカ観」を変えたいと自分に強く思わせたのは、仲良くなったルワンダの友人たちに対して、日本人がネガティブな偏見や印象ばかり持っているのが悲しかったからだ。ルワンダの友人、そしてルワンダという国の知られていない良い面をより多くの人に知ってほしかった。だから今回の渡航は、できる限りルワンダのポジティブな面を見てそしてそれを記録するための旅であった。

■ポジティブ・ルワンダ

この様な思いを胸にルワンダ渡航に臨んだ訳だが、収穫は多かった。ジェノサイドから20年経ったルワンダで、多くのポジティブな面を発見することができた。そのポジティブな面を、この紙面やドキュメンタリーの映像（団体 HP に後日アップロード）で皆さんにお伝えしたい。

さて、さっそくルワンダのポジティブな面を紹介するのだが、ルワンダでは、治安は抜群に良く、街にはゴミが全然なく綺麗で、キガリは建設ラッシュに沸き……と、もはやルワンダの発展を紹介する際によく使われる枕詞的な文言はもはや書くまでもないとして⁶（Google で「ルワンダの奇跡」と検索すると、色々出てくるので、興味がある方はご参照ください）、ここでは、各訪問地で発見したルワンダのポジティブ面に関して紹介したい。今年の渡航では、「ジェノサイドからの復興・ルワンダのポジティブな面」に関わる訪問地が多く選ばれており、全ての企画から、ルワンダのポジティブな面や可能性を感じたわけだが、特に個人的に印象深かった、Organic Solutions Rwanda・Rwanda Nut Company⁷（企業）、EPAK Don Bosco Primary School（学校・ICT教育）で見・聞いたこと、また学生会議でルワンダ側からプレゼンがあった Imihigo より、自分の感じたルワンダのポジティブ面の紹介をしていきたい。

■ビジネス in ルワンダ。魅力と可能性。

実はルワンダは、世界銀行のレポート「Doing Business 2014」によると、ビジネスの始めやすさが世界第9位、ビジネスの行いやすさは世界第32位に位置づけられている⁸。カガメ大統領が企業誘致・投資促進にかなり本腰を入れており、日本でも最近ルワンダ大使館とJETROが主催のルワンダのビジネス・投資セミナーが開催され、来場者は100名以上と大盛況であった。「ルワンダでのビジネスが熱い！」と最近（個人的感覚として）よく聞き、自分もルワンダを紹介する際にDoing Businessを引き合いに出してルワンダのビジネスの可能性を話していたのだが、正直なところ、「アフリカの内陸のこんな小国に経済的な価値があるのだろうか。しかも日本から遠いし。」と内心想っていた。しかし、渡航に向けてルワンダでのビジネスに関する事前勉強を進め、そして実際にルワンダでビジネスをされている企業を訪問することにより、この考えは変わる事となった。

事前勉強でまずわかったことは、ルワンダ単体で見ると、やはりそこまでビジネス的な魅力は高くないということだった。国の名目GDPは73億ドルしかなく（日本の約0.15%！）、人口は多いといえども1000万人程度しかない⁹。しかし、鍵になるのが東アフリカ共同体である。ケニア・タンザニア・ウガンダ・ブルンジ・ルワンダで構成される東アフリカ共同体市場で考えると、GDP約10兆円、人口約1.4億人の市場が現れる。この東アフリカ共同体は、関税同盟と共同市場を発足しており、域内外ビジネスの更なる増加が見込まれている（EUをイメージするとわかりやすい）。しかもそれぞれ加盟国は、経済成長の真っ只中で、今後の期待も高い。ルワンダを一国ではなく、東アフリカ共同体の中のルワンダとして捉えると、上述したビジネス環境のよさ、また治安の良さや現時点での政情の安定なども相まって、日本企業にとっては、東アフリカ市場を攻める拠点、もしくは本格的にアフリカに進出する前の「アフリカビジネス練習の場」としてのルワンダの可能性が見えてくる。実際に、私たちがルワンダに滞在していた9月、日本からのアフリカ貿易・投資促進合同ミッションがルワンダを訪問しており、三井・三菱・住友・伊藤忠・丸紅等の大手商社から金融、メーカーまで様々な日系企業計17社がルワンダを視察に訪れていた。

今回訪問させて頂いたOrganic Solutions RwandaとRwanda Nut Companyは、佐藤芳之¹⁰さんという、50年近く前に単身アフリカに渡り、年商30億円・ケニア最大の食品加工メーカーのケニア・ナッツ・カンパニーを築いた方が、ルワンダで立ち上げた企業である。現在現場の指揮をとっていらっしゃる原田様ご夫妻と、社員の方々とお話させて頂いて、特に印象に残った点が3点あった。1つ目は、発展途上のルワンダにはどこにでもビジネスチャンスが転がっている、ということ。2つ目は、一見途上国でビジネスを始めることは、リスクが大きいように見えるかもしれないが、実際は（先行きも見えず・不安定な）日本国内でずっと働いていこうと思う方がリスクが高いということ、3つ目は、ルワンダ・アフリカといえども、ビジネスは人と人との関係であり、下手に難しく考えすぎる必要は無い、ということだ。実際、現場で働いていらした皆様の前職は公衆衛生や、農業・食品の分野とは異なるものであった。事前勉強および、今回の訪問によって、ルワンダビジネ

スの印象が大きく変わった。ルワンダでのビジネスは、自分が思っていたよりも魅力と可能性があるし、何より楽しそうであった。「こんなにチャンスがあるなら、もっと多くの日本人・日本企業に、ルワンダに来てビジネスをしてほしくないですか??」との質問に、原田さんは「いや、競争が激しくなるから、来てほしくない！（笑）」との返答だったが、いつか自分もルワンダ、もしくはアフリカのどこかでビジネスを始めてみたいと思う。まだまだ将来のことはわからないが。

■ ICT 教育

「アフリカの奇跡」と呼ばれる経済発展を遂げているルワンダは、現在情報通信など知識集約型の経済への転換を目指しており、ICT 分野での人材開発に国を挙げて注力している。特に、ICT 分野の人材開発において象徴的な取り組みが学校での ICT 教育であり、小中学生に PC を配る「1 人 1 台」政策などを通じて若い世代への ICT 教育の拡充を図っている。ちなみに、ルワンダでの ICT 教育の事例は、朝日新聞の朝刊一面で紹介されたこともある。

ICT 教育のことは以前から知っていたし、緑色の小型 PC を前に、笑顔で授業に臨むルワンダの小学生の写真は何度か見たことがあったのだが「所詮、ルワンダの ICT 教育なんて大したことないだろう」と思っていた。しかし、今回の訪問で私は非常に驚かされた。小学生がプログラミングをやっていたのである。こんなもの、自分が小学生や中学生の時にもやったことなかった…。しかも結構複雑で難しそう。加えて、先生に聞いてみると、英語・算数・科学も PC の映像授業で学べるらしい。更に更に、もちろん PC の映像から流れてくる言語は英語である。生徒の学習状況は、先生の PC によって管理されているらしく、各生徒の学習進度が個別に把握されているのだとか。これには驚いたし、もしかしたら ICT 教育に関してはルワンダの方が日本より進んでいるのでは、と思わせるほどであった（といっても、自分が小学校・中学校を卒業したのは遙か昔の話であり、日本の ICT 教育の現状には詳しくないのだが。）。そんなこといっても、どうせ一握りの裕福な学校でしか ICT 教育は進んでいないんでしょう、との声が上がりがうだが、現在、政府は 1 セクターに最低 1 校以上 ICT 教育を実践できる学校を建てる計画だそうで、現時点で 416 のセクターのうち 409 ものセクターで、1 つ以上の学校が ICT 教育を実践しているそうだ。今後も、その数を増やしたいと言う。とにかく、ルワンダの ICT 教育は、自分が思っていたものよりも量質共に進んでいた。自分の甥っ子と変わらないくらいの年の小学生が、英語で自分がプログラミングして作った作品を紹介してくれたことは、大きな驚きであった。

■ Imihigo 日本がルワンダから学べること

これは、学生会議のページに詳細をすでに記載しているので詳しくは述べないが、まさしく、日本がルワンダ“から”学べることの 1 つであると思う。今年になって、「私はルワンダ『を』学ぶだけでなく、ルワンダ『から』学べることはたくさんあるはずだ！」と色

んな場所言ってきたのだが、「じゃあ具体的に何ですか？」といわれると答えに窮することが多かった。以前まで、「人の温かさや伝統ダンスはすごいし...あと男女平等が進んでいます！」と苦し紛れに答えるばかりであったが、この Imihigo の制度はドンピシャリ日本が学べる点だと思うし、Imihigo の発見 (?) により、更に探せばルワンダ「から」学べる点が出てくるはずだと大きな自信になった。

そのほかにも、ルワンダのポジティブな面は各訪問地（お気に入りには Inema Arts Center !!）や日々の生活の中で見られたのだが、ここでは割愛する。とにかくまとめると、ルワンダは、社会が安定し治安も良く、発展の活気に沸き、様々な可能性にあふれている...とでもなるだろうか。他のポジティブ面が気になる方は、ぜひ本誌の学生会議・訪問地紹介ページ等を参照されたい。

■では、ルワンダはこのままずっと順風満帆「アフリカの奇跡」なのか？

『ネガティブからポジティブへの印象の転換』ではなく、『ルワンダの持つ二面性』に対して理解を促していくこと、つまり、良い事も、悪い事も、全てひっくるめて理解しなくては、本当の『相互理解』にはならないのではないかと思います。」2013年度の日本招致の活動報告会を行った時、大学院時代にルワンダを専門で勉強され、今は開発コンサルタントとして活躍されている方にこの様なアドバイスを頂いた。まさに仰る通りである。今のルワンダは外国人が普通に過ごしていれば過去の悲劇のことなど微塵も連想できない程、平和で穏やかな国である。しかし、ルワンダ社会には表と裏がある（更にやっかいなことに、いくつかの表と裏はまさしくコインの裏表の関係で、密接に結びついている）。ここからは、ルワンダのポジティブな面だけではなく、渡航中に自分の目で見て、感じ、ルワンダ人から聞いて考えた、ルワンダ社会の裏、言い換えるなら、懸念とでもいえるものを紹介していく。

■20年の歳月がもたらしたもの

初めに、ジェノサイドに興味がある人からよく聞かれる質問「ルワンダ国民の和解と団結(unite)は進んでいるのか。」「民族対立の爪跡は今も残っているのか。」に関して述べていきたい。端的に答えるならば、「和解と団結は進んでもいるし、進んでもいない。」となるだろう。まず、若い世代に関して、ルワンダはジェノサイドから20年が経っており、これはルワンダ国民の20歳までが、ジェノサイドを直接知らない世代であることを意味する。ジェノサイド終結後、現大統領のカガメ氏率いるRPFが権力を奪取して以降、ツチ・フツという区別は徹底的に廃止、公の場で民族的な憎悪を煽る発言をすると厳しく処罰されるなど、1つのルワンダ、ルワンダ国民としての意識構築がなされてきた。その成果もあってか、ルワンダ人の友人いわく、今の若い世代はツチ・フツという対立感情は薄く、今後若い世代が「同じこと」を繰り返すことは無いだろう、とのことだった。実際に（これは表

面的にしか見られていないのかもしれないが)、ルワンダの若者ら交流しても、そのような「民族」の対立の様な雰囲気を感じることは無かった。一方で、国際機関や NPO・NGO などの援助機関の取り組みのおかげで、人々の間で和解が進んでいるケースもあるものの、ジェノサイドを直接経験した大人の世代では、今でも対立やいざこざが起きることがあるらしい。これは正直、あの悲劇を経験したのならば致し方ない面もあると思う。20 年という時の流れは、ジェノサイドを経験した人にとって、無に等しい歳月なのかもしれない。

今後のルワンダ社会の発展と安定には、「民族」対立の思想や過去に関する憎悪を持たない若い世代、1994 年以降に生まれた、もしくは 1994 年以降生まれでも、小さかったためにジェノサイドの記憶の薄い若い世代が非常に大事である。ジェノサイドから 20 年が経った現在、ルワンダでは、0 歳から 24 歳までの人口が全体の 61%を占めており¹¹、誤解を恐れずに言うならば、国全体で、ジェノサイドの記憶は「薄まって」きている。ルワンダはどこにいても子供が多い。道端で握手を求められたり、適当なルワンダ語で会話してみたり、ふざけて遊んだりして、個人的にとってもほっこりしたし、毎日しっかりと学校に通う彼らの姿に、将来のルワンダの明るい未来を見ていた。しかし、若い世代の増加は、ジェノサイドの記憶を「薄める」と同時に、大きな問題を孕んでいる。それは、若者の雇用不足である。

■若者の雇用

若者の雇用の創出は、ルワンダにとって喫緊の課題である。ルワンダには今、増え続ける若い世代の受け皿となる十分な雇用が無い。ちなみに、ルワンダ大学卒業の学生、つまり超エリートであっても、就職活動にかなり苦戦している様だ。日本ルワンダ学生会議のルワンダ側 OB メンバーの中にも、未だに職が決まらない人が数人いる。現在政府は若者の雇用対策にかなり力を入れてとりくんでいるものの、もしこれがうまくいかない場合、社会の混乱は免れないであろう。若者が職にありつけずに不安定な生活をおくれば、治安の悪化や社会の不安定化はもちろん、現政権への不満は高まるだろうし、また反体制派の武装集団にリクルートされる等もあるかもしれない。また政権への不満は、以前の様なエスニックな憎悪を呼び起こすかもしれない（景気が悪くなったり、社会が不安定になったりするとナショナリストや排外主義が増加するのと同じで）。増え続ける若者人口は、ルワンダにとってポジティブにもネガティブにも働き得るもので、まさしく表裏一体なものである。

■カガメ大統領

ルワンダの裏表といえ、一番に連想され得るであろう人物は、まさにカガメ大統領この人だろう。卓越したリーダーシップとカリスマ性で、ジェノサイドで壊滅したルワンダをここまで復興・発展させたその功績は、誰も疑う余地がない。一方で、強権的な姿勢や言論の自由・その他人権の抑圧、選挙時の不正疑惑など、さまざまな黒い噂が国際社会か

らあるのも事実である。

2017年に、ルワンダは大統領選挙を控えている。現行憲法の規定では、カガメ氏が大統領に再選することは不可能になっている。恐らく憲法を改正し大統領の職にとどまるとの大方の味方だが、本人は明言を避けている。2017年以降になるのか、それとも更に先になるのかはわからないが、ルワンダにおける“After Kagame”の問題は、重要なものであり、その時がジェノサイド後ルワンダの1つの正念場となるであろう。

色々と黒い噂があるものの、現時点で個人的にはカガメ大統領の国家運営の手腕は素晴らしいと考えている。しかし問題なのは、カガメ大統領率いる政府の力が強すぎることで、後々問題を起こす可能性がある点だと考えている。一例を挙げると、現政府は近年、社会の安定のためにメディアに対する規制を強化し、国家によるメディアの管理を強めている¹²。欧米社会から見れば、ルワンダの言論の自由は大きく侵害されている様に見えるだろう。ただ（これは学生会議の議論で面白いと思ったことなのであるが）、ルワンダの大学生は、このメディアの規制に賛成なのだそう。これにはいくつか理由がある。1つ目に、ルワンダでは、フツ・ツチという民族的憎悪がまだ燻っており、欧米型の言論の自由を保障してしまうと、それがまた再燃してしまう危険性があること、2つ目に、ルワンダのジャーナリストは給料が低いため、現政権を転覆させたい旧体制派や、現政権に不満を持つ人に簡単に買収されてしまい、事実に基づかない出鱈目な、そして社会に混乱をもたらすような言論が社会に広まる可能性があること、3つ目に、依然として教育水準やメディアリテラシーの低いルワンダ国民は、そのような悪意のある情報に扇動されやすいこと、などがあげられていた。従って、「良い」政府が「正しく」メディアを指導することは、社会の安定に資するため、好ましいとの彼らの意見であった。

問題なのは、仮に今の政府が「良い」もので、「正しく」メディアを規制しているとしても、その構造が今後もずっと保たれて万が一「悪い」政府が、「間違っただ」メディア規制をした場合に、どうなるかということである。この疑問に対して、ルワンダの大学生ははっきりとした回答をできず、歯切れの悪い回答をしていた。ジェノサイドの爪跡が残るルワンダが言論の自由を100%保障するまでに、あと50年は掛かる、とある学生はいつていたが、その50年後に、政府はメディアの管理という今まで持っていた大きな権限を、簡単にそして自主的に手放すであろうか。それまでの50年に悪い政府が登場したらどうなるのか、この様な疑問に学生らは満足いく答えを与えてはくれなかった。

政府が強い権限を持つことは、「良い」リーダーが「正しく」統治している場合は、社会の安定と発展に大きく貢献するだろう。しかし一方で、「良い」リーダーが「悪い」リーダーに豹変したり、代わったりした場合、最悪の結果を引き起こす。今のところ、カガメ大統領という強い権限を持つ「良い」大統領が「正しく」統治しているが、今後彼が豹変もしくは後継者が「悪い」リーダーになった場合、カガメ大統領が構築してきた強い政府という構造は、危険なものになるであろう。

カガメ大統領は、国際社会から様々な評価を受けているが、彼を正しく評価するには、

まだまだ時間が必要であると思う。20年、30年後にも、ルワンダ社会が引き続き安定・発展しているのであれば、彼は真に素晴らしいリーダーだったと言えるのだろう。

■ルワンダの国民性

上記のメディアの事例ばかり、ルワンダでは恐らくずっと、「強い権限を持つリーダー」と「それに（盲目的に）従う民衆」という構造が温存されてきていると思う。恐らく、ジェノサイド以前のハビャリマナ大統領の時代であっても、現代のカガメ大統領の時代であっても、根本的な構造自体は同じなのではないか。この様な構造があるせいで、正直、現代のルワンダでは欧米的な民主主義は絶対に機能しないであろうし¹³、かといって強権的なリーダーが国を率いていくのも、すこし不安要素が残るといえる。今後この構造をどう変えていく（もしくはうまく付き合っていく／制度によってコントロールする／強靱な行政機構を構築する etc）かが、ルワンダ社会におけるクリティカルな問題になるのではないかと思う。

■おわりに

都市の発展と取り残される農村、輝かしい功績とその裏に黒い噂を持つカガメ大統領、社会の安定にも不安定にも寄与する若者人口の多さ、一見平穏な社会とくすぶる不安と将来（After Kagame）の懸念、良くも悪くも動員されやすいルワンダの国民性—。現在のルワンダは、様々な要素が表裏一体となって結びつきその様相をなしている。基本的には、ルワンダのポジティブな面を見るために来た渡航であったし、その目的は大方果たされたものの、渡航を終えた今、発展の裏に何か不安定さを孕んでいるルワンダの姿が浮かび上がってきた。ポジティブな面・ネガティブな面、表と裏、すべてひっくり返して今のルワンダなのだ。私はそんな表裏一体なルワンダと、これからも付き合っていきたいと考えている。上記につらつらネガティブな面も書いたが、過度に悲観的になる必要は無いし、そもそもどんな国だって裏表あるわけで、ルワンダだけが特別ではない（むしろ近年の日本のほうが裏とか闇の面深そうですね...）。たしかに、ルワンダのネガティブな面をしっかりと理解・心に留めた上でルワンダ社会を見ることは大切だが、個人的にはネガティブな部分ばかりを指摘・あげつらって、非生産的なことをするより、ポジティブな面に注目し、ルワンダのポジティブな面が今後より増え、また成長できる様なことがしたいと考えている。そのようによっぽど生産的であるし、今後のルワンダ社会の発展と安定につながると思うからだ。

自分の学生生活は、そろそろ終わりを迎える。ルワンダとの関わりも、ここで一端の区切りがつく。今後ルワンダにどう関わっていくのか、もしくは関わり続けられるのかはまだまだわからない。ルワンダやアフリカ以外の国や地域に自分の興味関心がひらけるかもしれないし、まったく別の何かに熱中することになるかもしれない。ただいつか、願わくばルワンダ、最低でもアフリカ大陸のどこかには、仕事で絶対戻ってきたいと思っている。

その時に、この団体で学んだ様々なことが大いに生きてくるだろう。

最後に、自分の 2 回目のルワンダ渡航を最高のものにしてくれた渡航メンバーの皆にお礼を言いたい。今回の渡航で、自分がメンバーの皆から学んだもの・気づかされたものは計り知れない。至らないところの多い代表 (& 最年長) ではあったが、皆のおかげで、素晴らしい経験ができたと思う (し、純粋に超楽しかった!!!)。本当にありがとう。また、国内でサポートしてくれたメンバー、この渡航を成功させるために関わって頂いた全ての方々に、心からの感謝を申し上げたい。次回は日本での第 12 回本会議。気を引き締めて、残りの日本ルワンダ学生会議での日々を駆け抜けていこうと思う。

-
- 1 ここでいうアフリカとは、サハラ以南アフリカのことを指す。
 - 2 ルワンダでは以前からトゥチ・フトゥ・トゥワという職能階級的な区別があったが、それが「民族」として固定化されるのは植民地化以降であった。この考えに基づくと、ルワンダには元々民族は存在しないため、ルワンダの虐殺は民族紛争とはいえない (し、「民族」の対立以外にも様々な要素があった)。また、同様の考えに基づき、トゥチ族・フトゥ族と族をつけて呼ぶことはされなくなっている。
 - 3 以前、約 70 名の日本人大学生を対象に、ルワンダに関する印象アンケートを行った。アンケートの質問の一つ、「ルワンダと聞いて何を連想するか」の答えベスト 3 は上から順に「紛争」「ジェノサイド」「ホテル・ルワンダ (ジェノサイドを題材とした映画)」。
 - 4 ユニセフによると、2050 年までに世界人口に占めるアフリカ人の割合は 25% に達するという。
 - 5 個人的な話ではあるが、就職活動期、某有名企業の人事にアフリカ進出について聞いたところ、「アフリカはまだ未開でビジネスなんてできないからね〜。」との答えがあった。彼だけを基に日本人ビジネスマンのアフリカ観を一般化することはできないが、就職活動中とても印象に残った一言。
 - 6 書くまでもないとはいったものの、3 年前同様、治安はすこぶる良く、また歩道が整備されるなど街が綺麗になっており、新しい建物も増えていた。ひとつ気になったのは、キガリ市内のストリートチルドレンがいなくなっていたことだ。政府に保護されているのか、保護と称して排除されているのか、詳しくはわからない。
 - 7 諸事情により、本誌では取り上げていないものの、現地にて訪問。大変貴重で有意義な訪問となった。
 - 8 アフリカ地域では始めやすさで第 1 位、ビジネスの行いやすさはサハラ以南アフリカで第 2 位。日本は 27 位。ルワンダはベルギー、フランス、スペインなどのヨーロッパ先進国よりも高い評価をこのランキングにて受けている。ちなみに 1 位はシンガポール。
 - 9 IMF *World Economic Outlook Database* [Online] Available:
<http://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2014/01/weodata/index.aspx>[Accessed 26 Sep 2014]

10 佐藤さんの詳しい情報は、インターネット等を参照されたい。佐藤さんの自伝「アフリカの奇跡 - OUT OF AFRICA」は、ぜひ多くの方に読んで頂きたい。無論自分のお気に入り本の一つとなった。

11 Central Intelligence Agency (2014) *The World Factbook* [Online] Available:

<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/rw.html> [Accessed 26 Sep 2014]

12 この一文はすこし正確さに欠けているかもしれない。NewTimes の創設者の一人の方のお話によると、国家はメディア規制、というよりメディアに関するルールを示すだけで、具体的な規制？や処罰？などは、ジャーナリスト達が自主的につくった組織によって行われているらしい。ここはもう少し勉強の余地があるので、間違ったことを書いてあってもご容赦願いたい。

13 ルワンダは、民主主義・基本的人権尊重がなされていない、と批判するのは簡単だが、彼らのジェノサイド後の社会状況、文化、歴史、価値観、思考様式等々色々考慮してみると、なかなか難しい実情が見えてくると...思う。

次のステージへ

横浜市立大学国際総合科学部 2 年
藤内庄司

日本から飛行機で約 20 時間。8 月 24 日、私はついにアフリカの地に降り立った。高校生の時からどこか憧れていたアフリカ。以前にもアフリカの国に行くチャンスは 2 度あったが、金銭面や治安などアフリカの国に行くというのはそう簡単なことではなく、3 回目の挑戦で今回初めてアフリカの地を踏むことが出来た。飛行機から降り立った瞬間は正直「やっとか…」というのが率直な感想であった。



降り立ったのはルワンダという小さな内陸国。空港を出て待っていたのは自分よりうんと背の高いアフリカ人。私は留学をしたことがあったがアフリカ出身の友達というのはなかなかいなかった。正直出会った最初は「3 週間もここで活動するのか…」と、ある意味複

雑な気持ちであった。

理由は 2 つ。まず初めてのアフリカ大陸だったということ。どれだけルワンダが安定している、アフリカの中でも群を抜いて安全だと言われても、大陸の西側で流行していたエボラ出血熱の懸念もあり、楽しみよりも不安と心配の方が大きかった。次にルワンダ人に対する印象である。今回私は日本側のコーディネーターという立場で参加した。渡航の 3 ヶ月前先代のメンバーから「仕事はルワンダ人との日程調整をするくらいだよ」と言われ、正直それならできるかと思ひあまり重く捉えずこの仕事を引き受けた。しかし、現実とは違った。メールをしても返事が帰ってくるのは遅く、チャットをしても、時差のせいもあるが、大事な話の時に返事がない。Skype をしても電波環境のせいか相手の声もなかなか聞き取れない。進まない日程調整、オンライン上でのやりとりなので余計にコミュニケーションがとりづらく歯痒い思いをしたこともあった。それ故初めて直接会ったときの感想はそれほどいいものではなかった。

しかしルワンダでの 3 週間はその気持ちを一変させてくれた。ぎゅうぎゅうのバンに詰められての移動、運が良ければ温水だが普段は冷水のホテルのシャワー、交通事故が起こらないのが不思議な交通事情。すべてがこの 3 週間を経て私たちの“日常”になった。その中で渡航前半の怒濤のフィールドワーク・企業訪問にも笑顔で共に活動してくれ、慣れない環境からか体調を崩しがちだった日本人メンバーを気遣ってくれるルワンダ人メンバーの寛容さ、優しさ、そしてフレンドリーさに触れ私のルワンダ・ルワンダ人に対する見方は一変した。気づかないうちに大好きな国、そして彼らは友達になっていた。

ルワンダに渡航する前と比べるとルワンダのことを知れたかもしれない。その中で渡航中そしてこの感想を書いている最中も、この団体、そしてルワンダという国に対して様々な疑問が浮かんでくる。

相互理解ってなんだろうか？

相互理解して何が得られるのか？

私たちが見てきたルワンダはほんの一部であることは確かだが、では本当のルワンダを知るにはどうすればいいのか？

ルワンダを、そしてルワンダ人を“知り”、“理解する”ことなんてできるのか？

そしてこの団体における私自身のゴールはなんなのか？

先代のメンバー達が抱いていたであろう疑問を私も今抱いている。ありきたりでどこかに書いてありそうなことなら誰でも言える。しかし実際現地に行き、現地の人と活動、しかも単なる支援や援助ではなく“学生交流”という少々異色の活動をしている身として、私なりの答えを見つけたいと私は思っている。それらの答えがポジティブ・ネガティブなのかは問題ではない。相互理解の“正しい”答えを見つけるより、自分なりの答えを見つけそれをもとに次のステージへのぼることが重要なのだろう。

以前引退した先代のメンバーからこんなことを言われたことがある。

「まだこの団体で活動しているの!？」

当時この言葉を聞かされた私には悔しさと怒りが込み上げてきたのを覚えている。活動の成果が目に見える形で表れはしないが、自分たちの団体に誇りを持って活動していたし、大学生の活動で支援や援助を唱う団体は無数にあるが、そのような団体だけが意味ある活動をしているとは思えなかった。その際なにも言い返すことができず笑ってごまかしたが、実際のところその言葉を言われたことに対してというよりも、その時に何も言い返せなかった自分に腹がたったのだろう。しかし渡航を終えた今、その言葉の本当の意味を少しだけ理解できた気がする。皮肉ではなく、次のステージへ私の背中を押す言葉だったのではないか。もちろんその言葉の真意は分からないが、私を後押ししていることは間違いない。

ルワンダ滞在中私の五感で感じる一瞬一瞬が私のルワンダのすべてを形作っていた。それほどに充実した本会議であった。しかしそれと同時にきっと私が知っているルワンダは社会の1%にも満たないのではないかとも思う。今までの私にとって未知でしかなかったルワンダを垣間みることは出来たが、きっとまだまだ知らないことがこの国にはある。今回の本会議を終えた今、ルワンダのことをもっと知りたいというのが本心だ。だからこそもう一度自分の目指すべきところ、そして自分の役割を見いだし前に進んで行きたいと思う。

そして最後に文脈を無視してしまう形にはなるが、特筆したいことがある。

それはエボラ出血熱に関することである。3月から西アフリカの一部の地域(当時ギニア・シエラレオネ・リベリア)でエボラ出血熱が大流行しており、アフリカだけではなくヨーロッパやアジアの一部の国では感染“疑い”の情報が私たちの耳に入ってきた。それはルワンダも例外ではなかった。8月10日にルワンダの病院に感染“疑い”の患者が搬送された。結果的に12日に陰性であることが判明した。ルワンダの周りにはエボラ出血熱が発生したことのある国(コンゴ民主共和国・ウガンダ)があるのにも関わらず、一度もエボラ出血熱の患者が出たことがない国ということもあり今回のエボラ出血熱に対するルワンダ政府の対応を盲目的に信頼していた。それ故驚いたと同時にエボラ出血熱の現状と感染経路を踏まえるとグローバリゼーションと言われるこの時代に西アフリカで起こっていることだからルワンダは大丈夫だと過信していた自分の思慮の浅はかさを反省した。また本当に今回ルワンダで本会議を実施できるのかも不安になっていた。当時のエボラ出血熱の状況と各国・各国際機関の対応(WHOがケニアでの発生リスクについて言及したことから大韓航空が東アフリカの最大都市であるナイロビへの直行便を当面中止したことやケニア政府が流行地域3カ国からの渡航者の入国を一時禁止した)を知っていくにつれて不安は大きくなる一方であった。実のところ出発の約3日前は「今行く必要があるのか。」「学生だけで行ってもしなにか起きたときどのように対処すれば良いのか」「万が一なにかあったら誰が責任をとるのか」と様々な不安と疑問が頭を駆け巡り、今回の渡航はやめておこうと思ったこともあった。しかし不安になっているよりもさらに情報収集をして現状と事実を把握す

るしか決断する方法はないと気づき、在ルワンダ日本大使館、訪問予定であった各日系企業、さらに現地に滞在している日本人の方に連絡をとらせて頂いたりするなどして多くの方々の御協力を得た。最終的に、不安を拭えたかと言われれば領けないが、保護者の方の理解も得た上で常に最新情報を得ること、活動中最大限の安全を確保するなど様々なリスクマネジメントに徹し、無事に出発から帰国まですべての日程を終えることができた。

今思い返すと渡航前の準備段階から学ぶことも非常に多く、何より多くの人の助けと支えを身にしみて体験させて頂きました。私たちが安全に企画を遂行できるよう貴重な時間を割いて最善を尽くして下さいました関係者の方々。今回の渡航を最高のものにしようと尽力してくれたメンバー。そして未熟な準備で直前になりエボラ出血熱でお騒がせしたのにも関わらず、温かく見送ってくださった各メンバーの保護者・家族の皆様にお礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

ルワンダに渡航して

学習院女子大学国際文化交流学部 4年
星野真希

今回、私は大学4年生にして初めてルワンダを訪れた。長かった21日間。そこで色々感じたこともあったが、今回私が一番ルワンダに来て感じたことは、「無意識の偏見」と「ルワンダのもろさ」であった。

・ルワンダおよびアフリカに対する「無意識の偏見」と「相互理解」

日本ルワンダ学生会議という団体に所属してもう3年以上も経とうとしているが、「ルワンダに行きたい」と思ったのはつい最近だった。なぜ私が長い間「ルワンダに行きたい!」という感情が起こらなかったのかは、その時、私自身よくわからなかった。ただ、私がルワンダに渡航する前、たくさんの予防接種をうち、医者にもマラリア薬をもっていくことを勧められたこと。両親にも周りの方からも、私がルワンダに行くことを心配され、「もしかしたら生きて帰って来られない可能性もある



から。」と言われ、ルワンダに渡航することが不安になり、「なんでルワンダに行くと決断したのだろう」と渡航直前で思ったことを覚えている。しかし、実際来てみるとなるとはな。街はきれいだし、交通機関も整っている。生活をしていて不便に感じることは何もなかった。治安も良く、盗難も一回もなかった。「ルワンダで生活していたけど、夜遅くまで出歩いて大丈夫だったわ」というルワンダに滞在していた日本人女性に何人もお会いした。「自分がルワンダに行く決心を遠ざけていたものはなんだっただろう？」この渡航中、そのことについて考えていた。おそらく私を「ルワンダに行きたい」と思う気持ちを遠ざけていたのは、「アフリカ」という地域に対する漠然とした恐怖心だった。ルワンダの学生と交流し、ルワンダについて知識を得る場にいるのにも関わらず、ルワンダが「アフリカ」にあるというだけで、一気にハードルが上がってしまうような気がした。いくらメンバーが「ルワンダは安全だ」といっても、写真やテレビなどで発展している光景を目に見ても、「アフリカ」に対する漠然とした恐怖心はぬぐえなかった。今回実際にルワンダを訪れてみて、私の中にある「アフリカ」に対する漠然とした恐怖心や偏見が消えたことが一番の成果なのかもしれない。もちろん、ルワンダはアフリカの中で一番治安がよい国なので、ルワンダの基準で「アフリカ」を測ってはいけない。しかし、「アフリカ」にあるからと理由で漠然とした恐怖心や偏見を抱くということがなくなった。

また、ルワンダ人と日本人も様々な考えの人がいて、決してステレオタイプでは見てはいけないということである。私が一番そう感じたのは、OSR（オーガニック・ソリューションズ・ルワンダ）で働いている従業員のインタビューをしていた時である。インタビューする前日、質問を用意していたのであるが、「働く目的について聞いてみよう」と提案した時に、「いやお金のためじゃないの？」というメンバーがいた。私も提案したのにも関わらず、心の中ではそのことが少しよぎっていたし、おそらく他のメンバーも同じように考えていたことであろう。しかし、実際に働く目的を従業員の方にきいてみると、彼からこのようなコメントがかえってきた。「お金を手に入れることが目的ではなく、スキルを身に着けるためにこの会社に入社した。将来は海外にでたい。」私はここで「はた」と思ってしまった。日本人もルワンダ人も働く目的は人それぞれであって、決して「この国の人はこちらだから、こういう考えであろう」とひとくくりしてはいけないということである。それだけではない。例えば、DVの解決策の方法にしても、ルワンダの政策にしても、私はルワンダから日本が参考にすべき点をいくつも見つけた。そして、「ルワンダにいる人はこういう考え方をしているのだろう」「アフリカでの小国ルワンダには、教わることなど何もないだろう」と「無意識」に偏見をもっている自分がいたことにも気が付いた。私は、「相互理解」とはお互いの国の偏見をなくすことではないかと考えていた。しかし、今回のルワンダ渡航を通じて、自分自身が、無意識のうちにルワンダおよびアフリカに対する「偏見」をかかえこんでいるということに気が付いた。そして、その無意識の「偏見」が、誤った国の見方につながることも。どうしても「相互理解」というとルワンダ人と日本人の関係構築に目がいきがちである。しかし、お互いの国の文化や人、考えを知り、「偏見」をなく

すこと。相手の国の考えを尊重することが、いかに難しいことか。そして、そのような視野がもてて初めて、ルワンダ人と日本人との関係構築に話に移るのだと思う。私は、この渡航が日本ルワンダ学生会議の最後の活動になるわけだが、最後にルワンダに行って、ルワンダを五感で感じ、またルワンダおよびアフリカに対して「無意識の偏見」を抱いていた自分に気づけてよかったと思う。

・ルワンダの「もろさ」

私がルワンダに渡航して、もう一つ感じたのは「ルワンダのもろさ」である。ルワンダに来て、治安の良さ。街の美しさには衝撃を受けた。「私は本当にアフリカに来たのか？」と疑問を持つほどであった。しかし、商業施設に行くごとにおこなわれる荷物検査。数十メートルごとに銃を持った警官が立っている。私がルワンダに行く前、ルワンダに行ったことがある旅人の人が、「キガリ（ルワンダの首都）のバスターミナルで爆破テロがたまにおきるから気をつけて」という助言もいただいた。確かに治安はいい。でも、数十メートルに銃をもった警官がいないと、この治安の良さは保たれないのか・・・？と思うと、ルワンダの治安の良さは案外「もろい」ものなのではないかと考えてしまった。またルワンダのメディア規制から、考えたことがある。ルワンダは、報道の自由ランキング 161 位で、なおかつ、ルワンダの憲法第 34 条に、「情報の自由は、国家によって認められ、保護される」という一文がある。つまり、情報や報道は国家によって、ある程度規制されるということである。ウムセケのマルセルさんにその件について意見をきいたところ、「確かに欧米と日本からみるとルワンダの規制は厳しく見える。しかし、ルワンダ人は報道の自由を規制されているとは感じていない。メディアの自由によって人々および民族が分断されるような情報は流れるくらいなら、適度にメディアを規制したほうがよい。」と。私は、どのような経緯でルワンダにメディアの規制法ができたのか詳しくは知らない。ただ、マルセルさんの一言をきいて、国家はメディアを規制しない状況になると、民族が分断されるような情報が流されてしまうのか。仮にそういった情報が流されなかったとしても、「メディアの自由によって民族が分断するような情報が流されてしまうのではないか」という考え方に至ることに、ルワンダの民族和解の「もろさ」を感じた。

ジェノサイドから 20 年、しかしまだ 20 年。これから 10 年、20 年・・・という時が過ぎ行くなかで、ルワンダがどのような国へと変貌をとげていき、また日本との関係をどのように築いていくのか。カガメ大統領が退いたあと、誰がルワンダを治めるのか。まだわからない。ただ、私が願うことは、日本人が抱くルワンダの印象が、「ジェノサイド」という過去の側面だけではないこと。また、ルワンダ人が抱く日本の印象が、「経済発展」や「原爆」だけでなく、多様な意見がでること。お互いがお互いの「今」を知らない。その状況が少しでも改善されることを願っている。

ルワンダと関わって

日本大学法学部 3 年

丸茂思織

はじめに、「全体感想」として掲載するにはふさわしい内容ではないかもしれないことをあらかじめ断っておく。極めて個人的な（しかも反省文のような…）話ばかりになってしまって恐縮だが、本感想では主にルワンダに渡航しようと思った理由と、ルワンダ渡航を終えた私のこれからについて述べたいと思う。



まず、私が今回ルワンダに渡航しようと思った理由について述べる。私が渡航を決意した理由は大きく 2 点ある。

まず 1 点目の理由は「自分の目で直接見たルワンダを、自分の言葉で語れるようになりたい。」そう考えたのがきっかけである。日本ルワンダ学生会議（以下 JRJC）に所属していると出張授業やイベント等の場において、JRJC のメンバーとして、ルワンダという国やその現状・歴史等について話をする機会を頂くことが多くあった。しかしルワンダ渡航前の私が語れる内容といたら所詮人づてに聞いた話か、書籍等から得た知識のみで、正直今まで自信をもってルワンダについて語るができなかった。また以前友人に「ルワンダの良いところを 3 つ説明して！」と言われた際、その質問にまともに答えることができず、非常に悔しい思いをしたこともある。JRJC のメンバーとして、またルワンダと関わる一個人として、自分の目でルワンダを見て、自分の言葉でルワンダを語れるようになりたい…そう考えたのが渡航するに至った理由の一つである。

2 点目の理由は、私の中で「この機を逃してルワンダに行かなかったら、絶対に後悔する！」という確信があったからだ。というのも、私は JRJC に所属して今年で 3 年目を迎えるにも関わらず、その個人的な活動ぶりには後悔ばかりが残っていた。極めて個人的な話だが、私は性格上、基本的に自分に・自分がやっていることに対して自信が持てない人間である。特に私が新入生だった頃は、能力がある先輩方や優秀な同期に囲まれながら、自分が駄目なところ・できなかったことばかりを数えては悶々としていた。当時は、JRJC の活動が楽しくないだけでなく、正直ルワンダに対してもたいして興味をもつことができず、「なぜこの団体に所属しているのか」が全く分からないような状況だった。ちなみに上記の期間を、自分史の中で「JRJC 暗黒時代」と呼んでいる（笑）自分の不甲斐なさが悔しく、ここで逃げることに我慢ならなかったという負けず嫌いの私の性格からか、気づけば「次はルワン

ダに行く。」と公言するようになっていた。ルワンダに行くことで、この現状を打開することができるのではないかと考えていたようだ。自分の納得できるかたちで自分のやりたい活動をしたい…。ルワンダへ行けば、ルワンダに対する興味関心が向上するのは勿論のこと、英語しか通じない環境に身を置けば嫌でも英語を話す他ない。またそれ以上に、ルワンダへ行けば「私の JRYC で活動するモチベーション・目的」を見つけることができるのではないかと考えていた。「アフリカというだけでただでさえ危ないのに、エボラが流行っている今、何でわざわざルワンダに行くの？」こんな質問を何度も投げかけられた中、ルワンダに行くという私の思いが一度も揺らがなかったのは、「今行かなかったら、今後の人生において絶対に後悔する。」この確信があったからに尽きると思う。

案の定、ルワンダ渡航を経て、私のルワンダ・JRYC に対する思いは確実に変化した。ルワンダに行って、自分の目で直接ルワンダを見て、ルワンダという国・ルワンダ人のことがすごく好きになり、もっと多くのことを知りたいと思ったし、そんな国・彼らのことをもっと多くの人に知ってほしいと考えるようになった。また 3 週間もの長い間、4 人の渡航メンバーと同じ時間を過ごして、彼らの考え方や行動から多くのことを学んだ。不思議なことに、悔しさを感じる経験をしなければルワンダに行かなかったかもしれないし、ルワンダに行けなかったら JRYC を辞めていたかもしれない。どんな事象や出来事が、自分の人生にどんな影響を与えるのかは分からない。もしかしたら、自分からしたら小さな出会いやきっかけだと思っていたものが、後々自分の人生を大きく変えることがあるかもしれない。チャンスが転がっている環境に身を置くこと、また目の前に転がってきたチャンスをきちんと掴むことの重要性を、今はひしひしと感じている。

続いて、ルワンダ渡航を経た私の今後について勝手ながら述べさせて頂く。ルワンダ渡航を経た私の現在・これからの活動のモチベーションは、「ルワンダ」をより多くの人に伝えることだ。この考えに至った理由は大きく 2 点ある。

1 点目は大好きなルワンダの「今の姿」を、純粹により多くの人に知ってもらいたいからである。渡航前、知人友人にルワンダに行く旨を伝えると、想像をはるかに超えた回答が返ってきた。「生きて帰ってきてね！（…この言葉はもう何度聞いたか分からないほど言われた。）」「槍持った彼氏とか連れて帰って来ないでね！（…私が見た限り、ルワンダには槍を持った人はいなかった）」「イモムシのお土産とかいらないから！笑（…確かに虫が沢山いたことは否めないが）」「ルワンダ？タイの州のひとつだっけ？（…決してそんなことはない）」等、それは酷いものだった。以上の発言から、日本人がいかにルワンダを知らないのか、またルワンダ・アフリカに対してどのようなイメージを持っているのかが、お分かり頂けるだろうと思う。しかし JRYC に入る前の私もその例外ではなく、またそれが普通なのではないかとも思う。対して、ルワンダのことを知っている日本人も、「ルワンダ」という国に対するイメージはやはり「ジェノサイド」が大半を占めているのではないだろうか。実際、かの有名な「ホテル・ルワンダ」や「ルワンダの涙」といった映画からルワン

ダのジェノサイドについて知り、ルワンダについて興味をもって所属に至った JRYC メンバーも少なくない。過去の悲劇を知り、またそれを忘れないことは非常に大切なことであると思う。しかしそれにとらわれ過ぎてしまうのは、ルワンダという国にとっても、そこで暮らすルワンダ人にとっても、そして私たち自身にとっても、決して良いことではないのかもしれない。以前日本に来たルワンダメンバーが「ルワンダ＝（イコール）ジェノサイドではない。」としきりに口にしていた。実際に今のルワンダの姿を見た私も、「ジェノサイドが起こった国とは思えない。」というのが率直な感想であった。「ルワンダ＝アフリカ＝危険・未開・貧困」、「ルワンダ＝ジェノサイド」、そんなイメージをもっている日本人はいまだに数多くいると思う。「現在のルワンダの姿」を知ってもらうことで、ルワンダ、ひいてはアフリカに対する偏見・イメージを変えるきっかけになるのではないだろうか。「偏見を変える」と言う聞こえがいいかもしれないが、純粹に、私の友人の住む国が、事実と反して「そういうイメージ」でとらえられるのが寂しく悔しいというのが本音だったりする。

2 点目は、「ルワンダ」という国を通して、多くの人々に新たな知見を提供することができるのではないかと考えるからである。正直私は JRYC に入るまで、ルワンダのこともジェノサイドのことも全く知らなかった。私が日本ルワンダ学生会議に入らなかつたら、ルワンダに行かなかつたら、ルワンダを知らなかつたら、知らなかつたもの・出会えなかつたものが沢山ある。「ルワンダ」との出会いが、私の人生に彩りを与え、またその人生を豊かにしてくれているのだ。どんな事象や出来事が、自分の人生にどんな影響を与えるのかは分からない。もしかしたら、自分からしたら小さな出会いやきっかけだと思っていたものが、後々自分の人生を大きく変えることがあるかもしれない。非常におこがましくはあるが、「ルワンダ」という国について情報を発信することで、多くの人に新たな知見を提供し、その人の人生の可能性や選択肢、彩りを増やすきっかけとなりたいと考えている。

今回のルワンダ渡航では、本当に多くのものを得たと感じている。ルワンダの今の姿を自分の目で見る事ができたこと。ルワンダ人と話し、共に行動することで彼らが好きになったこと。渡航メンバー4人と3週間にわたり共に過ごして、彼らから学ぶことが沢山あったこと。自分がすべきこと・できることはなんだろうか考えるに至ったこと。自分の将来やりたいことについて考えるきっかけになったこと…。3年生の夏というラストチャンス、また自分が JRYC を続ける意味を探していたこのタイミングでルワンダ行けたことは、自分の人生において非常に大きな意味があったと思う。「ルワンダ」というひとつの国との関わりが、私の人生をここまで豊かにしてくれるとは、以前の私では考えられなかっただろう。

最後に、第11回本会議はエボラ出血熱の流行に伴い、ルワンダに渡航することすら危ぶまれるような状況だったが、多くの方々のご協力あってこうして無事成し遂げることができた。愛おしいわが子が見知らぬ土地に行くことを了承してくださった渡航メンバーの保

護者様は勿論のこと、お世話になった多くの関係者の方々、皆キャラが濃いけど面白くて常に良い刺激を与え続けてくれた渡航メンバー、そして本報告書を手にとってくださった皆様…改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

何のために生きるのか

早稲田大学教育学部 2年

渡邊 伶



私が日本ルワンダ学生会議に入会したのは、2014年の5月頃なので、入会してから約4ヶ月目での渡航となる。他のメンバーがルワンダに対して深い知識を持っているのに対して、私は十分な知識を持っていなかった。もちろんルワンダと会うのも初めてである。ではなぜそのような状態でルワンダに行ったのか。実はルワンダに行くのは自分の中では決めていたことであり、

この団体もルワンダに行くために入ったと言っても過言ではない。ではなぜルワンダに行くことを決めていたのか、そして実際にルワンダに行って何を感じたのか。それを述べる為には、なぜこの団体に入ったのか、ということから述べなくてはならない。少々長くなるがお付き合いいただけたらと思う。

話は高校時代にさかのぼる。中高と陸上競技部に所属していた私は、本当に部活づけの日々を送っていた。強豪校というわけではなかったが、練習すればタイムが上がるのが嬉しかったし、同じ部の仲間といることが単純に楽しかった。そのため、長期休暇も旅行など行かずひたすら毎日練習に通っていた。お盆休みなどはあったが、その日ですら家や近くの競技場で一人で練習していた。希望制の海外研修も行くことができなくなるからという理由で行かなかったぐらいだ。では、なぜそこまで練習する必要があるのか。実は陸上の大会は、一学校につき、一種目に出ることのできる人数に限りがある。つまり、そもそも同じ学校内で競争が始まっているのだ。そうなるライバルである同じ学校の人に差をつけられたくない、逆に差をつけなければならない、と毎日練習して引退までいたのである。

このような部活の話になると、「引退試合の後悔が今も残っていて・・・」や「引退試合の

後悔が今の私の原動力」などという声を聞くが、私は中高の陸上に満足している。最後の大会ではずっと目標にしてきた県大会に出場することができ、目標だったタイムを突破し、あこがれの先輩方のタイムにも勝ることができたからだ。気持ちよく中高の陸上を終えることができた。

部活引退後は、学校が進学校だったこともあり、大学受験のための勉強を始めた。陸上競技同様、何かの目標に向けて努力するというのは嫌いではない性格なのか、あの一年は本当に勉強したと思う。私は早稲田大学を第一志望にしていたのだが、僕の勉強に対する姿勢をみた同じクラスの人「渡邊が早稲田に受からなければこの学校の誰も受からない」と言っていたそうだ。(笑) ちなみにこの「努力する」とうのは後にキーワードとなる重要な言葉である。

大学受験の時、後の僕の進路を大きく変えるきっかけとなる出会いがあった。一人の教師とその教師が所属している予備校である。

私は大学受験に向けて高校二年生の後期から予備校を探し始めた。様々なパンフレットや体験授業を受けて慎重に選んでいた。なぜなら予備校選びは志望校に合格するかに直結することだと当時の僕は考えていたからである。そんな中、ふとある体験授業に行った。T予備校のIという講師だ。実はこの時点でSという予備校に行くことを内心決めていて、時間あるし行ってみるか、ぐらいの気持ちだった。結果からいうと、私はそのIという講師に惹かれてしまい、Sをやめ、その講師が所属するTという予備校に入学することにした。I先生は話しの中で、受験の事に限らずその先の将来の事についても触れていた。今までどうやって志望校に合格するのかのみを考えていた私にとっては衝撃的で、これからの生き方を考える契機となった。この先生の授業を受けたいと思いTに入学した。大げさな表現だが、おそらくこの予備校との出会いによって、僕の人生は大きく変わったのではないかと今振り返ると感じる。この予備校に通い、当時17歳だった僕の価値観や考え方が変わり、将来について真剣に考えるようになった。今の私の将来の目標、そのために大学で行っていること、行ってしまえばなゼルワンダに渡航したのかということも、元をたどれば、この予備校に通っている時に私が考えていたこと、体験したことに戻っていくのである。

Tでは将来の目標や夢についてとても聞かれた、当時の私は、自分が将来何をしたいのかなんて大学に行ってから決めようと考えていた。しかし、言い方は少々悪いが、塾のチューターにしつこく言われ、少しずつ考えるようになった。色々と紆余曲折を経たが、最終的には、「世界中の困っている人のために何かしたい」といった漠然とした思いにいたった。これは当時入学を希望していた大学のHPを見ていた内に浮かんできたことだった。

予備校Tに通い続けているうちに、この漠然とした思いが少し具体化した。それは、予備校の学費が安くないという事に気付いたからだ。私は私立の中高に通っていたため、教育にかなりのお金をかけてもらっていた。そこにさらに予備校の費用だ。親は予備校費を払うことを承諾してくれたが、私は予備校に通いながら次のような疑問を感じていた。人間

は生まれる家庭や場所を選ぶことができない。それにもかかわらず、お金を持っている人が、私立の中高や予備校に行ったりなど、いい教育を受けることができるのは可笑しいのではないか。努力したいのに十分な努力する環境がない人がいるのは可笑しくはないか、と。

この時はまだ漠然とした想いだった。なんとなく誰にも平等な目標を叶える為のチャンスを与えたいというものだった。これが確信として、大学でこのテーマに取り組みたいと思ったのには、大学受験中に起きた次の二つの事件が影響している。

2012年の8月に起きたシリアでのジャーナリストの山本美香さんの殉職。2013年1月に起きたアルジェリア人質事件である。山本美香さんとアルジェリアでの事件を見て、「なぜその国のためを思って活動していた人が犠牲になり、死ななければならないのか？」と思ったのを覚えている。同時に、自分が知らない「国際関係上の何か」が影響しているのだろうとも思った。それが、私が国際関係に興味を持った理由であり、世界との関わりを意識し始めるようになったきっかけである。山本美香さんの事件が起きた時、ちょうど志望校・志望学部を選択する時期だった。私は国際関係のことを純粹に知りたいと思い、さらに前述したような機会の不平等さに対する問題意識が重なり、国際的に様々な角度からこの問題を考えたいと思い、学際的に様々な科目をとることのできる学部を志望した。この選択には前述したI先生の授業内での話も影響している。I先生はしばしば授業内で雑談をするのだが、ある授業の回で、社会問題を様々な角度から考えることの重要性を語っていたのだ。

そして大学生になったら、国際協力をしている団体に入ってバリバリ活動しようと決めた。結果的に社会科学を広く学ぶことのできる、早稲田大学教育学部の社会科学専修に進学することになった。

さて晴れて大学生になり、さっそく国際協力系の団体を探し始めた。早稲田大学ボランティアセンターのプロジェクトから他大学で活動している団体。NPOやNGO。多くの団体の活動説明会に行ったり、HPを見た。しかし結局一年次は、国際協力系団体には属さなかった。ありふれた言葉を言うと「ピンとくる団体がなかった」。もちろん素敵な活動をしている団体はおおくあったし、私のサーチ不足でもあるだろう。しかし自分がその中の一人となって活動している姿が想像できなかった。学生団体が行うような比較的小さい活動ではなく、もっと大きな活動がしたかった。社会・世界を変えていることを実感できることがしたかった。どの国際協力系団体にも属さず大学一年が終わり、二年が始まろうとしていた時期、このままどの団体にも属さず、国際協力のことを知らずにいるのはまずいなと思い始め、どこかの団体に入ることで得られることも多いのではないかと再び団体を探し始めた。そこで目にとまったのが日本ルワンダ学生会議である。本やテレビでルワンダのことは知っていて、ジェノサイドの悲劇からの経済成長に興味を持ったのと、早稲田大学ボランティアセンターに所属しているということで、アクセスがいいという理由で入会した。入会するのに特別な審査がないのも魅力だった。(迷っていた他の団体は入会のた

めに面接があったので入会するのをやめた。)

入会時から次のルワンダ渡航に参加することは決めていた。ルワンダを自分の目で見、一次的な情報として語りたいたいという想いと、最貧困の生活をおくっている人たちのことを知りたいという想いからであった。ルワンダは発展して、最貧困の生活をおくる人は少なくなってきたことは知っていた。しかし未だに貧困が残るアフリカという土地に行けば彼らのことが少しわかるのではないかと考えていた。私が受験生時代に抱いていた想い「機会を平等にして、全ての人の可能性を広げる」は達成したい。その一方で、今困っている人がいる。食べるものがなくて困っている人。住んでいる場所で紛争が起きて困っている人。その人たちにとっては、教育よりも目の前の食料やどのように紛争の被害から遠ざかるかが大事である。その人たちのために何ができるのか、そのような想いをいだいていたこともあり、ルワンダに行きたかったのだ。

さて念願のルワンダ渡航を終えたわけだが、今の気持ちはどうかというと、モヤモヤしていると形容するのがふさわしいだろう。もちろんルワンダに行き多くの気づきはあった。

まずはルワンダ人との出会い。新入生の私にとっては初めてのルワンダ人との交流だった。英語があまり得意ではない分苦労はしたが、まさに友達という感覚で付き合うことができた。おそらくこの友達という感覚は大切なのだろう。国籍は違うが普通に友達と思える。この感覚がとても好きだ。キガリの街もインターネットや本で見る二次的な情報と相違点が多々あった。今まではルワンダを語る際に、二次的な情報を基にしていたが、これからは、ルワンダを自分の体験を基に話すことができるようになったのが、とても嬉しいことだ。

ここまで書くと大満足の渡航と思われるかもしれない。

もちろん学術的にも文化的にも最高の渡航だったのは間違いない。それでは何が私にもモヤモヤさせるのか。それはこの感想のタイトル「どう生きるのか」に関わる。

私は日本の多くのサラリーマンの働き方に疑問を覚えている。多くの人は、大学を卒業後、一般企業に就職する。そして約40年以上仕事をし続ける。日本は長期休暇も少ないので、本当に働き尽くした。毎日満員電車に乗り会社に行く。遅くまで残業して帰宅する。そしてまた明日早朝から勤務のため、満員電車に乗って帰る。その繰り返し。たった一度の人生こんな生き方でいいのか？ただお金のため、家族を養うため、と我慢して仕事を続ける。果たして自分は40年以上こんな生活続けることはできるのだろうか？

もちろんこのような生き方をしている方々を批判しているわけではない。彼らも家族を養おうと必死に仕事を続けているのだろうし、そもそも心から仕事を楽しんでいる人も多いだろう。

しかし、私には仕事を楽しんでいるサラリーマンが想像つかない。多くの人がサラリーマンになるため、就職するわけだから、この問題は見過ごすわけにはいかない。考えなければならぬ。いったん就職して、起業するのか。NPO・NGOに行くのか。それともサラリーマンとして仕事を楽しむ方法を考えるのか。

私は、これからの将来を考えることは、仕事を考えることでもある、と考える。仕事の選び方は人それぞれだろう。好きなことを仕事にする人。待遇を優先する人。高い給料を求める人。ひたすらやりがいを求める人など。

私は「その仕事は社会にどのようにインパクトを残せるのか」を重視したい。

その仕事はたとえ低い給料でも（もちろん最低限生活できる程度は欲しい）、大変でも構わない。自分がその仕事をする事で、社会・世界はどのように変わるか。世界中の人々の可能性を広げることができるのか、をひたすら追求したい。生きる目的があれば、人生を迷うことはないと思う。しかしその目的の達成は、一般企業に勤めるだけでは実感できないと思う。一般企業の社員も社会に貢献している。会社が社会に貢献しているからこそ、利益が出て、社員を雇うことができ、給料を渡すことができるからだ。社会・世界を変えていくこと、全ての人々の可能性を広げること、それを直接的に実感できる仕事をしたい。

「どのように生きるのか＝どのような仕事をするのか」、はこれからも悩み続けるだろう。前述したが、私は、全ての人々の将来の可能性を広げることと、今困っている人を直接助けること、両方に重要性を感じている。しかしこの二つを同時に達成する職に就くのは難しい。私がモヤモヤしている理由。それは、今回のルワンダ渡航では、全ての人々の将来の可能性を広げることと、今困っている人を直接助けることどちらが重要なのか。どちらを達成するための仕事に就くべきなのか。さらに言えば「どのように生きるのか＝どのような仕事をするのか」の答えが見えてこなかったからだ。どこか、ルワンダに行けば分かるのではないかという想いがあった。結果は分からなかった。しかし、それでいいと思う。悩み続ければいいと思う。大学生活はまだ続く。まだ見つけるチャンスはある。探し続けるだけだ。

この感想文のタイトル「何のために生きるのか」は、私の尊敬する方が、早稲田の授業に来て話して下さった際のタイトルである。これからも向き合わざるを得ないこと。そして考え続けなければならないことである。そしてルワンダ渡航後の今の私の想いに一致するため、使わせていただいた。

最後になりますが、本事業は多くの方のご協力をいただき、行うことができました。お世話になった方々に感謝申し上げます。

※いろいろ書いたが予備校Tにはとても感謝している。予備校Tに通っていなかったら、志望していた大学には合格できていなかったかもしれないし、今のような志も持っていなかったかもしれない。その結果大学生活、さらにはその先の社会人も何も考えず過ごしていたかもしれない。

人生を変えてくれたといっても過言ではない T で過ごした一年半はとても大切な思い出である。

終わりに

日本ルワンダ学生会議は、不思議な団体です。早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)に所属している団体なので、一応ボランティア団体なのですが、私たちはルワンダで学校を建設したり、井戸を掘ったり、物資の支援をする等の、ボランティアと聞いて人がよく連想する様な活動はしていません。私たちの活動は、「相互理解」を理念にルワンダ人学生と学術・文化交流を行うというものです。直接的に人を助ける・社会を良くするというよりも、まずは自分が交流を通じて学ぶことに主眼が置かれています。

しかし最近、私たちはやはりボランティア団体なのだとしみじみ感じるようになりました。もしかしたら、実は日本ルワンダ学生会議は WAVOC 屈指のボランティア団体であるかもしれません。というのも、渡航でも招致でも当たり前ですが、私たちの活動は多くの方々のご理解、ご支援、ご協力無しには決して成立しないものです。今回のルワンダ渡航でも、例年と同じく多くの企業、学校、行政、その他組織、個人の方々にご協力を頂き、無事本会議を成功することができました。学生で社会経験が乏しいこともあり、至らぬ点が多い私たちではありますが、それでも、私たちの活動をご理解頂き、ご支援・ご協力をしてくださる皆様には、感謝してもしきれません。私たちの活動はいわば、そのような皆様のご理解・ご支援・ご協力、言うなれば、ボランティアで成り立っています。これまでルワンダへの渡航は6回、日本招致は5回実施しましたが、その度々に、本当に多くの方々に助けて頂きました。そういう意味で、私たちは WAVOC 屈指のボランティア（して頂いている）団体なのであって、私たちの活動は、多くの方々のボランティア精神の結晶であると思います。

感謝の気持ちを忘れずに、これからも活動の質をあげ、意義のあるものにしていきたいと、今改めて強く思っています。先に私たちの活動の主眼は自分と書きましたが、この国際交流という活動で私たちに蒔かれた種、そして少しながらも私たちが日本・ルワンダ社会に蒔いていった種が、今後大きく成長し、何か社会をより良くする力になればと思っています。

最後に、今年はエボラ出血熱が西アフリカで流行・拡大していたこともあり、渡航実施の是非の検討や活動の安全確保等に関して、これまで以上に多くの方からのサポートを頂きました。活動を理解して下さるご両親の方々、活動を全面的にサポートして下さる顧問の小峯先生・WAVOC（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）職員の皆様、両国大使館の皆様、ご多忙の中貴重な時間を割き、学生に多くの学びの場を提供して下さる企画協力者の皆様、私たちの活動を支えて下さる全ての方々に、今一度心から御礼申し上げます。今後とも、日本ルワンダ学生会議の活動にご期待ください。

日本ルワンダ学生会議 第9代代表
品川正之介



ありがとう
Murakoze!

日本ルワンダ学生会議 第11回本会議活動報告書

2014年11月18日 第初版発行

発行元 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）公認
日本ルワンダ学生会議

編集 丸茂思織

連絡先 japan.rwanda@gmail.com

